

秋田県文化財調査報告書第385集

小鳥田 I 遺跡

—県営ほ場整備事業(中仙南部地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）
遺跡出土の岩儀です。縄文時代晚期初頭、1992年8月
発見、高さ7cm、凝灰岩。

こ ちょう だ いち い せき
小 鳥 田 I 遺 跡

—県営ほ場整備事業(中仙南部地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005・3

秋田県教育委員会



小鳥田I遺跡周辺の空中写真(南→)



1. SM198道路状遺構(北→)



2. 灰釉陶器・綠釉陶器・紡錘車・石帶

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、農業地域においては、用排水路網の整備と水田の大区画化により、農業の大規模化と担い手の育成を目的とするは場整備事業が行われております。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営は場整備事業に先立って、平成15年度に中仙町鍾見内（中仙南部地区）において実施した小鳥田I遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、道路状遺構などが検出されました。また、縄文時代の土器・石器や、中世から近世に使用された陶磁器も出土しました。このことから、本遺跡は縄文時代に生活の場として利用され、平安時代には竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心とする集落が営まれ、鎌倉時代から江戸時代にも、この地に人々が生活していたことがわかりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県仙北平野農村整備事務所、中仙町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例　　言

- 1 本書は、県営は場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成15年度（2003年度）に発掘調査した秋田県仙北郡中仙町鏐見内字水上に所在する小鳥田Ⅰ遺跡の調査成果を収めたものである。
- 3 発掘調査の成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報22（平成15年度）』や『平成15年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』等で公表されているが、本報告書の記載内容がすべてに優先する。
- 4 本書に使用した地形図は、秋田県仙北平野農村整備事務所提供的1,000分の1「中仙南部地区は場整備計画図」と国土地理院発行の50,000分の1地形図「角館」、25,000分の1地形図「羽後長野」「六郷」である。
- 5 平成17年3月22日に、大曲市と仙北郡中仙町・仙北町・太田町・神岡町・西仙北町・協和町・南外村の1市6町1村が合併して「大仙市」が発足した。本遺跡が所在する旧中仙町については「仙北郡中仙町」の表記を「大仙市」と読み替える住所表示の変更となったため、例言・抄録を除く報告書本文においても、同様に読み替えていただきたい。なお、報告書抄録中の市町村コードについては、合併前の中仙町旧コードを記載した。
- 6 本書の挿図中に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版土色帖 2000年版』を使用した。
- 7 本書の航空写真是、昭和50年に建設省（当時）国土地理院が撮影したものを掲載した。
- 8 本書第5章の自然科学的分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の分析報告を収載した。
- 9 本遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたり、次の方々より御指導、御教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。
井上喜久夫、早川泉、高島英之、八重樋忠郎、伊藤博幸、三上喜孝、吉田歓、村木志伸、伊藤邦弘、熊田亮介、富樫泰時、藤田秀司
- 10 本書の執筆は次のように分担した。

第1章	……………	大信田壽一・石澤宏基
第2章第1節	……………	石澤宏基・打矢泰之
第2章第2節	……………	石澤宏基・千葉史宏
第3・4・6章	……………	石澤宏基
各遺構図の作成	……………	石澤宏基・大信田壽一・打矢泰之・千葉史宏
- 11 本書の編集は石澤宏基が行った。

凡　　例

- 1 本報告書の遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。世界測地系を基準とし、グリッドの座標原点杭MA50（X = -52943.000、Y = -26048.000、標高 = 36.839m）とした位置における座標北と磁北との偏角は西偏11°34"である。
- 2 遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

S I	………	堅穴住居跡	S B	………	掘立柱建物跡	S K	………	土　坑
S R	………	土器埋設遺構	S E	………	井 戸 跡	S N	………	焼土遺構
S D	………	溝　　跡	S M	………	道路状遺構	S K P	………	柱穴様ビット
S X	………	その他の遺構						
- 3 基本的に遺構実測図は1/20及び1/10の縮尺、遺物実測図は1/2及び1/3の縮尺で掲載した。しかし、挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図もある。各頁に付したスケールを参照されたい。
- 4 発掘調査の結果、検出した遺構のうち、規模の小さな柱穴様ビットについては、平面配置のみを掲載した。
- 5 土層の層序に用いた数字は、基本層位にローマ数字を、遺構内層位に算用数字を用いた。
- 6 挿図中の遺物番号は、各頁ごとに付した。
- 7 挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については個々の頁に凡例を示した場合もあるので参照されたい。



焼土範囲
(遺構挿図)



炭化範囲
(遺構挿図)



炭化物付着部分
(遺物挿図)



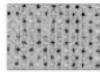
内面黒色処理
(遺物挿図)



凹　　み
(遺物挿図)



敲　　き
(遺物挿図)



磨　　り
(遺物挿図)



研　　ぎ
(遺物挿図)



施　　釉
(遺物挿図)

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

挿図・表・図版目次

第1章 はじめ	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の位置と立地	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 発掘調査の概要	10
第1節 遺跡の概観	10
第2節 調査の方法	10
第3節 調査の経過	11
第4章 調査の記録	15
第1節 基本層位	15
第2節 検出遺構と遺物	15
1 壓穴住居跡	18
2 掘立柱建物跡	29
3 土 坑	29
4 井 戸 跡	31
5 燃土 遺構	31
6 溝 跡	33
7 道路状遺構	33
8 柱穴様ピット	34
9 その他の遺構	34
第3節 遺構外出土遺物	57
第5章 自然科学的分析	75
第1節 放射性炭素年代測定	75
第2節 樹種同定	77
第6章 まとめ	79

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第31図 S KP柱穴様ピット配置図	49
第2図 地形区分図	4	第32図 S KP86・92・94・113柱穴様ピット・出土遺物	50
第3図 周辺遺跡位置図	6	第33図 S X191その他の遺構・出土遺物	51
第4図 調査範囲図	12	第34図 S X200・205その他の遺構・出土遺物(1)	52
第5図 遺構配置図	13	第35図 S X200その他の遺構・出土遺物(2)	53
第6図 基本土層図(1)	16	第36図 S X205その他の遺構・出土遺物(3)	54
第7図 基本土層図(2)	17	第37図 S X205その他の遺構・出土遺物(4)	55
第8図 S I 01堅穴住居跡・出土遺物	19	第38図 S X205その他の遺構・出土遺物(5)	56
第9図 S I 10堅穴住居跡・出土遺物	21	第39図 遺構外出土遺物(1)	58
第10図 S I 49堅穴住居跡・出土遺物(1)	22	第40図 遺構外出土遺物(2)	59
第11図 S I 49堅穴住居跡・出土遺物(2)	23	第41図 遺構外出土遺物(3)	60
第12図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(1)	24	第42図 遺構外出土遺物(4)	61
第13図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(2)	25	第43図 遺構外出土遺物(5)	62
第14図 S I 199堅穴住居跡	26	第44図 遺構外出土遺物(6)	63
第15図 S I 199堅穴住居跡・出土遺物(1)	27	第45図 遺構外出土遺物(7)	64
第16図 S I 199堅穴住居跡・出土遺物(2)	28	第46図 遺構外出土遺物(8)	65
第17図 S B 208掘立柱建物跡・出土遺物(1)	35	第47図 遺構外出土遺物(9)	66
第18図 S B 208掘立柱建物跡・出土遺物(2)	36	第48図 遺構外出土遺物(10)	67
第19図 S K07・44土坑・出土遺物	37	第49図 遺構外出土遺物(11)	68
第20図 S K83・109・202・203土坑・出土遺物	38	第50図 遺構外出土遺物(12)	69
第21図 S K203土坑・出土遺物	39	第51図 遺構外出土遺物(13)	70
第22図 S K201土坑・S E207井戸跡・出土遺物(1)	40	第52図 遺構外出土遺物(14)	72
第23図 S E207井戸跡・出土遺物(2)	41	第53図 遺構外出土遺物(15)	73
第24図 S E207井戸跡・出土遺物(3)	42		
第25図 S N03・04・05・06焼土遺構・出土遺物	43		
第26図 S N204焼土遺構・出土遺物	44		
第27図 S N206焼土遺構・出土遺物	45		
第28図 S D02溝跡・出土遺物	46		
第29図 S D112溝跡・SM198道路状遺構	47		
第30図 S D112溝跡・SM198道路状遺構・出土遺物	48		

図版目次

- 巻頭図版 1 小鳥田 I 残跡周辺の空中写真（南→）**
- 巻頭図版 2 1. S M198道路状遺構（北→）
2. 灰釉陶器・綠釉陶器・紡錘車・石器**
- 図版 1 遺跡近景**
 1. 調査区近景（南西→）
 2. 調査区近景（北→）
- 図版 2 検出遺構（1）**
 1. S I 01堅穴住居跡検出状況（南西→）
 2. S I 01堅穴住居跡断面（南西→）
- 図版 3 検出遺構（2）**
 1. S I 10堅穴住居跡北側（北西→）
 2. S I 10堅穴住居跡燒土断面（東→）
 3. S I 10堅穴住居跡検出状況（北東→）
 4. S I 10堅穴住居跡南側燒土断面（南西→）
 5. S I 10堅穴住居跡南側焼土検出状況（北西→）
- 図版 4 検出遺構（3）**
 1. S I 49堅穴住居跡完掘（北西→）
 2. S I 49堅穴住居跡カマド確認（北→）
 3. S I 49堅穴住居跡カマド確認（南→）
 4. S I 49堅穴住居跡カマド断面（西→）
 5. S I 49堅穴住居跡カマド2断面（南西→）
- 図版 5 検出遺構（4）**
 1. S I 91堅穴住居跡完掘（南東→）
 2. S I 91堅穴住居跡断面（北西→）
 3. S I 91堅穴住居跡カマド内支脚（北東→）
 4. S I 91堅穴住居跡カマド（南東→）
 5. S I 91堅穴住居跡カマド断面（北西→）
- 図版 6 検出遺構（5）**
 1. S I 199堅穴住居跡完掘（北西→）
 2. S I 199堅穴住居跡断面（北西→）
 3. S I 199堅穴住居跡焼化物および出土物状況（北東→）
 4. S I 199堅穴住居跡カマド検出状況（北西→）
 5. S I 199堅穴住居跡カマド断面（南西→）
- 図版 7 検出遺構（6）**
 1. S B 208掘立柱建物跡完掘（北東→）
 2. S B 208掘立柱建物跡柱穴断面（西→）
 3. S K 07土坑断面（北西→）
 4. S K 07土坑完掘（北西→）
 5. S K 44土坑断面（南→）
- 図版 8 検出遺構（7）**
 1. S K 83土坑断面（東→）
 2. S K 109土坑断面（北東→）
 3. S K 109土坑断面（北東→）
 4. S K 109土坑完掘（北東→）
 5. S K 201土坑断面（北西→）
 6. S K 201土坑材料状況（北西→）
 7. S K 202・203土坑検出状況（北→）
 8. S K 202・203土坑完掘（南西→）
- 図版 9 検出遺構（8）**
 1. S E 207井戸跡検出状況（北→）
 2. S E 207井戸跡完掘（北→）
 3. S E 207井戸跡済水状況（西→）
 4. S E 207井戸材出土状況（南西→）
 5. S E 207井戸材出土状況（南→）
- 図版10 検出遺構（9）**
 1. S N 03焼土遺構検出状況（北西→）
 2. S N 03焼土遺構断面（北西→）
 3. S N 04焼土遺構断面（北西→）
 4. S N 04焼土遺構完掘（南→）
 5. S N 05焼土遺構断面（南西→）
 6. S N 05焼土遺構完掘（西→）
 7. S N 06焼土遺構断面（南東→）
 8. S N 06焼土遺構完掘（南東→）
- 図版11 検出遺構（10）**
 1. S N 204焼土遺構土器出土状況（北東→）
 2. S N 204焼土遺構断面（南西→）
 3. S N 206焼土遺構断面（南西→）
 4. S N 206焼土遺構断面（北→）
- 図版12 検出遺構（11）**
 1. S D 02溝跡検出状況（北→）
 2. S D 02溝跡検出状況（北東→）
 3. S D 112溝跡断面（南西→）
 4. S D 112溝跡・S X 191断面（南西→）
 5. S D 112溝跡・S M 198道路状遺構（北東→）
- 図版13 遺構内出土遺物（1）**
 1. S I 01堅穴住居跡出土遺物
 2. S I 10堅穴住居跡出土遺物
- 図版14 遺構内出土遺物（2）**
 1. S I 49堅穴住居跡出土遺物（1）
 2. S I 49堅穴住居跡出土遺物（2）
- 図版15 遺構内出土遺物（3）**
 1. S I 91堅穴住居跡出土遺物（1）
 2. S I 91堅穴住居跡出土遺物（2）
- 図版16 遺構内出土遺物（4）**
 1. S I 199堅穴住居跡出土遺物（1）
 2. S I 199堅穴住居跡出土遺物（2）
- 図版17 遺構内出土遺物（5）**
 1. S B 208掘立柱建物跡出土遺物（1）
 2. S B 208掘立柱建物跡出土遺物（2）
- 図版18 遺構内出土遺物（6）**
 1. S B 208掘立柱建物跡出土遺物（3）
 2. S K 07土坑出土遺物
- 図版19 遺構内出土遺物（7）**
 1. S K 44・83・109土坑出土遺物
 2. S K 201土坑出土遺物
- 図版20 遺構内出土遺物（8）**
 1. S K 202・203土坑出土遺物（1）
 2. S K 202・203土坑出土遺物（2）
- 図版21 遺構内出土遺物（9）**
 1. S E 207井戸跡出土遺物（1）
 2. S E 207井戸跡出土遺物（2）
- 図版22 遺構内出土遺物（10）**
 1. S E 207井戸跡出土遺物（3）
 2. S E 207井戸跡出土遺物（4）
- 図版23 遺構内出土遺物（11）**
 1. S N 03・04焼土遺構出土遺物
 2. S N 204焼土遺構出土遺物
- 図版24 遺構内出土遺物（12）**
 1. S N 206焼土遺構出土遺物
 2. S D 02溝跡出土遺物
- 図版25 遺構内出土遺物（13）**
 1. S D 112溝跡出土遺物
 2. S M 198道路状遺構出土遺物
- 図版26 遺構内出土遺物（14）**
 1. S K P92~115柱穴様ピット出土遺物
 2. S X 191その他の遺構出土遺物
- 図版27 遺構内出土遺物（15）**
 1. S X 200その他の遺構出土遺物
 2. S X 205その他の遺構出土遺物（1）
- 図版28 遺構内出土遺物（16）**
 1. S X 205その他の遺構出土遺物（2）
 2. S X 205その他の遺構出土遺物（3）
- 図版29 遺構内出土遺物（17）**
- 図版30 樹種同定顕微鏡写真**

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

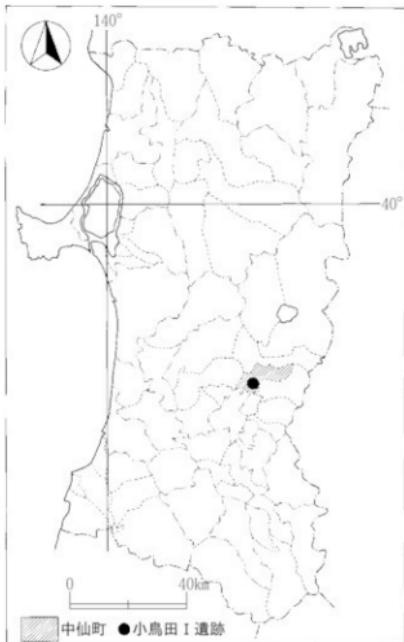
秋田県農林水産部は、農業の近代化と大規模経営をいっそう推進するため、県営は場整備事業を実施している。本事業は農地の大区画および農道・用排水路網の整備を行い、農業経営環境の改善と安定を図ることによって、新たな農業の担い手を育成することを目的としている。

中仙町中仙南部地区的県営は場整備工事区域は『秋田県遺跡地図（県南版）』（1989年、秋田県教育委員会刊）の記載にあるように、埋蔵文化財が包蔵されていることが判明していた。このため、本事業を計画・実施する秋田県仙北平野農村整備事務所（現：仙北地域振興局仙北平野農村整備事務所）は、文化財保護法に基づき工事に先立って、事実確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導を依頼した。これを受けて秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室は、踏査・試掘および確認調査の結果、遺跡がある場合は記録保存としての発掘調査を実施すべきことを回答した。

平成12年5月25日および12月20・26日、文化財保護室と中仙町教育委員会が中仙南部地区的遺跡踏査・試掘を行った結果、事業予定地内に新発見の遺跡2か所（小鳥田I遺跡・下道満遺跡）が確認された。平成13年12月4日の試掘でも、この2遺跡から土師器片が出土し、平成14年5月1・10・22日の試掘でも小鳥田I遺跡からは土師器片が出土した。

この結果に基づき、小鳥田I遺跡および下道満遺跡の範囲について、秋田県埋蔵文化財センターは確認調査（平成14年11月21日～12月20日）を実施した。確認調査の結果、工事区域18,000m²内に3,400m²の遺跡面積が含まれ、両遺跡とともに平安時代の造構や遺物を主体とすることが判明した。これを受け、仙北平野農村整備事務所、文化財保護室、中仙町教育委員会は、工事の施工上、破壊を免れない小鳥田I遺跡の一部（2,400m²）を発掘調査によって記録保存することを決定した。

以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、平成15年8月6日から10月7日の期間、小鳥田I遺跡の発掘調査を実施するに至った。



第1図 遺跡の位置

第2節 調査要項

遺 跡 名	小鳥田 I 遺跡（こちょうだいいちいせき）：遺跡略号 7 K C D - I		
遺 跡 所 在 地	秋田県仙北郡中仙町鍾見内字水上216-1外		
調 査 期 間	平成15年（2003年）8月6日～10月7日		
調 査 目 的	県営は場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財事前発掘調査		
調査対象面積	2,400 m ²		
調 査 面 積	2,400 m ²		
調査主体者	秋田県教育委員会		
調査担当者	秋田県埋蔵文化財センター（所属と職名は当該年度） 平成15年度 発掘・整理担当者 石澤 宏基 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事 大信田壽一 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 文化財主事 (平成15年度 中仙町教育委員会派遣職員) 打矢 泰之 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 調査・研究員 千葉 史宏 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 調査・研究員 平成16年度 整理担当者 石澤 宏基 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事		
総務担当者	平成15年度 総務担当者 金 義晃 秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長 高橋 修 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主 任 田口 旭 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主 事 平成16年度 総務担当者 渡辺 憲 秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長 高橋 修 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主 任 田口 旭 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主 事		
調査協力機関	秋田県仙北地域振興局仙北平野農村整備事務所 中仙町教育委員会 中仙町文化財保護協会		

《参考文献》

- 秋 田 県『秋田県史 考古編』1960(昭和35)年
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2001(平成13)年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
中 仙 町『中仙町史 通史編』中仙町郷土史編さん委員会 1983(昭和58)年
中 仙 町『中仙町史 文化編』中仙町郷土史編さん委員会 1989(平成元)年

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

小鳥田I遺跡は秋田県の内陸中央東側、仙北郡中仙町にある。中仙町は、昭和30(1955)年3月31日に、当時の長野町、清水村、豊川村、豊岡村の4町村が合併して成立した町で、全国的にも著名な秋田民謡「ドンパン節」発祥の地である。町域は東に太田町、西に西仙北町、南に大曲市と仙北町、北に玉川を挟んで角館町と境を接している。地形は、町域の南西部に出羽丘陵（町域最高峰は長野山293.7m）があり、その麓を雄物川の支流である玉川が流れる。玉川左岸から東側は仙北平野で最大の水田地帯であり、東進するにつれ齊内川や小滝川が形成する扇状地となり、町域東部には奥羽山脈が連なる。町の規模は東西18.25km、南北10.50kmに及び、面積は78.92km²で、人口11,763人、3,274世帯（平成16年12月末現在）である。

本遺跡は中仙町の南西端、JR田沢湖線鶴見内駅から北へ約500mに位置し、玉川左岸からは約960m東の水田地帯にある。奥羽山脈を源流とする齊内川が作る扇状地の前延構造低地上に立地し、標高は36～38mである。遺跡の中心位置は、北緯39度31分21秒、東経140度31分49秒となる。

地形区分上は、東部扇状地前延扇状構造低地〔III e〕の西端に位置し、約100m先の玉川下流沖積低地〔III g〕と境を接する。なお〔III e〕は、齊内川扇状地前延扇状構造低地と呼ばれる場合もある。^(註1) 表層地質は、第四紀完新世の未固結堆積物（扇状地前延扇状構造低地堆積物）である。この低地はほとんど勾配がなく、玉川および各扇状地の諸河川が形成した山麓沖積河川平野を成している。土壌区分は、細粒質グライ土である浅津統に属するが、一部遺跡の東側が黒泥土の井川統である。

I k : 諏訪山山地

I l : 長野山山地

I m : 明光沢岳山地

III b : 小滝川扇状地

III c : 齊内川扇状地

III d : 真昼川・釜湧川合成扇状地

III e : 東部扇状地前延扇状構造低地

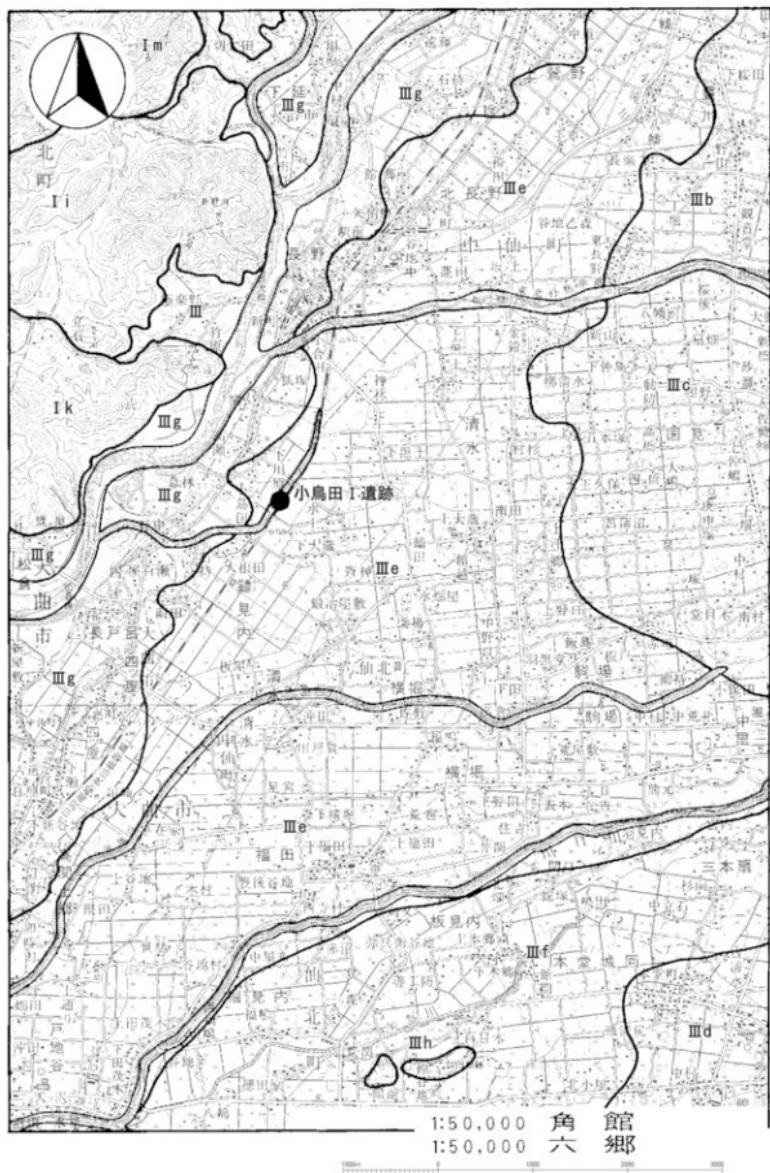
III f : 真昼川・釜湧川合成扇状地前延扇状構造低地

III g : 玉川下流沖積低地

III h : 払田丘阜群

註1 秋田県農政部『土地分類基本調査 角館・鶴宿（5万分の1）国土調査』秋田県 1989(平成元)年

註2 秋田県農政部『土地分類基本調査 六郷（5万分の1）国土調査』秋田県 1988(昭和63)年



第2図 地形区分図

第2節 歴史的環境

小鳥田I遺跡の周辺には多数の遺跡が存在する。中仙町内の遺跡については『秋田県遺跡地図(県南版)^(注3)』によると、90箇所の埋蔵文化財包蔵地が「周知の遺跡」として記載されている。しかし、現在までのところ町内で公的な発掘調査が実施された遺跡は、野口遺跡^(注4)(中仙町清水字田中)。現在は野口I・II遺跡：遺跡地図番号49-21・22)が唯一であり、この他は秋田県教育委員会・中仙町教育委員会および中仙町文化財保護協会が遺跡の試掘・踏査を行い、町民によって表採された遺物は長野公民館などに収蔵されている。

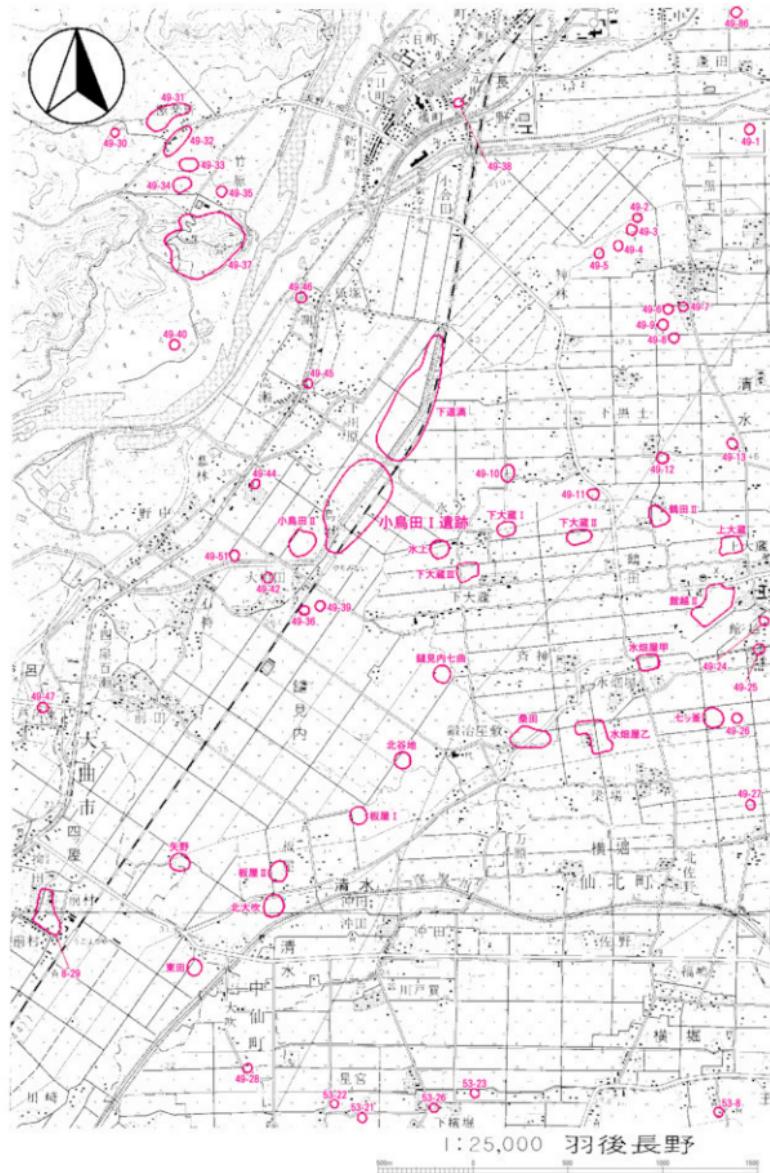
平成12年度以降、県営は場整備事業を推進するため、秋田県教育委員会と中仙町教育委員会が町内の遺跡分布調査(試掘・踏査)を行った結果「新発見の遺跡」が多数確認され、周知の遺跡についても既存の範囲を見直さねばならない事実が判明している。小鳥田I遺跡もこうした新発見の遺跡の1つである。なお、周辺にある遺跡を第3図と第1表に掲載した。以下、各時代の遺跡について触れる。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ中仙町内および小鳥田I遺跡周辺では確認されていない。県南部の雄物川流域では、南外村小出I・IV遺跡、雄物川町新道I遺跡、横手市大乗院塚遺跡、山内村小田V遺跡、羽後町新成遺跡などがある。

縄文時代草創期の遺跡は、県南全体でも横手川上流の山内村岩瀬遺跡があるのみで、中仙町内およびその周辺では確認されていない。

縄文時代早期の遺跡には野中遺跡がある。この遺跡については、周辺遺跡を代表する遺跡なので、他の時期・年代も含め詳述する。野口遺跡は中仙町清水字野口田中にあり、小鳥田I遺跡から南東へ3.8kmの地点に位置する。藤田秀司氏の『仙北郡石器時代遺跡地名表』によって初めて紹介された遺跡であり、現在は周知の遺跡として『秋田県遺跡地図(県南版)^(注5)』に記載されている。1963(昭和38)年、中仙町教育委員会が細谷宇三郎氏の協力を得て、氏所有の田圃を確認調査した結果、石器片が多数出土したため、町の遺跡として取り扱うことを秋田県教育委員会に報告した。その後1973(昭和48)年、県営は場整備事業(国見地区)の整備計画区域内に野口遺跡が含まれることが判明し、記録保存のため中仙町教育委員会と秋田県教育庁文化課および社会教育課が主体となって、緊急発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代晚期の住居跡1軒と土坑(墓)墓32基を検出し、縄文早期の爪形文土器(約80片)や中期の大木式土器、晚期の大洞式土器、円盤状土製品・同石製品などが出土した。出土した土器の大部分は中期のものであり、早期・晚期のものは少ない。なお、出土した遺物は長野公民館に保管されている。

縄文時代中期の遺跡は、考古学研究家武藤鉄城が1952(昭和27)年に調査し、14基の配石遺構を検出した雲穂野遺跡(雲穂野組石群:54-7)、千烟村教育委員会(当時)が1965(昭和40)年から4次に渡る発掘調査を実施し、計35軒の竪穴住居跡が検出され、大木8b式期の土器を中心に遺物が出土した一丈木遺跡(54-9)がある。この遺跡には、二回建て替えられ、二回とも規模が縮小されている竪穴住居跡が検出された。規模が拡大するものや増築される例は多いが、この時期の縮小する住居跡は少なく、貴重な例である。現在、公園内に一軒復元されている。また、秋田県教育委員会が1980(昭和55)年に発掘調査し、複式炉を伴う竪穴住居跡15軒が確認された内村遺跡^(注6)(54-14)がある。この遺跡で出土した大木式土器は県内の縄文中期土器編年の指標となっている。



第3図 周辺遺跡位地図

弥生時代の遺跡は調査事例が少ないが、近隣では仙北町星宮遺跡(53-21・22・23)、大曲市宇津台遺跡(8-18)、千畳町中屋敷II遺跡(54-5)がある。

古代の遺跡は、仙北町と千畳町に跨る払田柵跡(53-1、54-1)がある。1906(明治39)年から始まった耕地整理の際に埋木が出土し、これを地元出身の後藤寅外氏と藤井東一氏が調べた結果、真山・長森の二つの丘陵を取り巻くように柵列が存在することが判明した。彼らと地域住民の努力によって、1930(昭和5)年には、文部省の上田三平氏が発掘調査を実施することとなり、遺跡としての全体像が明らかになった。その後1974(昭和49)年、秋田県教育委員会によって仙北町に払田柵跡調査事務所が設置された。この払田柵跡調査事務所が調査主体となって、現在も継続的な学術調査が行われている。この払田柵跡に隣接する厨川谷地遺跡は、平成12年の発掘調査によって、約400点に及ぶ墨書き土器や灯明皿、斎串や呪符木簡などが出土し、払田柵跡と強い関係を持つ平安時代(主に9世紀後半から10世紀前半の時期)の祭祀遺跡であることが判明した。近年、払田柵跡周辺では、墨書き土器が出土した遺跡が数か所確認されている。厨川谷地遺跡の他にも、近隣では内村遺跡、中屋敷II遺跡、飛沢尻遺跡、下中村遺跡などがあげられる。

上記以外の縄文時代から近世までの遺跡は、中仙町内だけでも88か所、仙北町・千畳町・太田町などの玉川左岸の平野部にある遺跡には、前村館跡、金鏡遺跡、尻長I～IV遺跡、寺屋敷遺跡、殿村I～III遺跡、三尺遺跡、鶴田遺跡、高野遺跡、上高野遺跡、新処遺跡、田屋敷杉遺跡、行人塚I～III遺跡、熊野神社遺跡、野口内城跡、春日遺跡、館越遺跡、壇合遺跡、七ッ釜跡、大形遺跡、立石堤遺跡、極楽野I～V遺跡、船コ山遺跡、大根田遺跡、紫山慈恩寺跡、下谷地遺跡、長野山遺跡、古館遺跡、源勝寺跡、紫嶋遺跡、幕林経塚、開南経塚、開北経塚、六部塚、鍛冶屋敷遺跡、長野鉄山跡、鍔見内城跡、大堀野南原遺跡、旭田遺跡、一里塚跡、羽黒杉遺跡、中西遺跡、松ヶ窪遺跡、新田I・II遺跡、肥前I～III遺跡、白岩街道傍提、南松の木、清水谷地I・II遺跡などがある。特に周辺の中世の遺跡には、城館跡が多い。八乙女城跡、遠藤野城跡、鶯野城跡、野中内城跡、葛川館跡、鍔見内城跡、伊勢の腰館跡、上ノ山館跡、館山城跡、太田城跡、駒場城跡、払田柵跡の地形(払田丘阜群)をそのまま利用した払田城跡、小野寺氏配下の本堂氏が居城とした本堂城跡、元本堂城跡、境田城跡、川端山館跡、砂館跡、張山館跡、幡江館跡、神尾町館跡、上館跡などがある。

次の江戸時代になると「小鳥田」の名が文献史料上に現れる。著名な史料の中では、菅江真澄『月の出羽路』仙北郡二四「箭野の若草のまき○鍔見内本郷村」中に「小鳥田」が鍔見内枝郷のひとつとして『享保郡邑記』から引用されており、その神社部にも「小鳥田ノ千手觀音社 一戸鎮守、祭日正月十七日、斎主兵右エ門」と記されている。寛政年間に近藤甫寛が調査・編述した『久保田領郡邑記』にも仙北郡「鍔見内村」の「支郷」の中に「小島(鳥)田村」^(注14)が見える。この小鳥田の周辺では、文政年間に水田開発が行われており、秋田藩が文政7年に齊内川流域で着工した御堰(太田町:遺跡地図番号52-12)もこの時期のものである。小鳥田を含む鍔見内村は、明治22年に周辺6か村で合併し長野村となる。この長野村時代と町制施行後の長野町時代(大正11年から昭和30年まで)には、齐内川の改修と耕地整理が実施され、新たな遺跡が多く発見されたものの破壊を受けた遺跡も少なくない。戦後、この仙北郡内の周知の遺跡および新たに見つかった遺跡(地名)を記録したのが、昭和23年8月にガリ版で刊行された藤田秀司氏の『仙北郡石器時代遺跡地名表』である。なお昭和30年以降、中仙町になってからは、前述の野口遺跡の調査時のような県営は場整備事業が行われた記録がある。

- 註3 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
- 註4 中仙町教育委員会『野口遺跡－仙北郡中仙町野口遺跡発掘調査報告書－』1979(昭和54)年
- 註5 秋田県教育委員会『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第1集 1981(昭和56)年
- 註6 秋田県教育委員会『弘田柵跡 I－政疔跡－』秋田県文化財調査報告書第122集 1985(昭和60)年
- 註7 秋田県教育委員会『弘田柵跡 II－区画施設－』秋田県文化財調査報告書第289集 1999(平成11)年
- 註8 秋田県教育委員会『嗣川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集 2005(平成17)年
- 註9 高橋 学「大曲市和合出土の墨書き土器－使用痕跡にも注目して－」
『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号 2004(平成16)年3月
- 註10 秋田県教育委員会『中屋敷II遺跡』秋田県文化財調査報告書第384集 2005(平成17)年
- 註11 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 註12 ここで真澄が引用している『享保郡邑記』は秋田藩境目奉行の飼見知愛が編述した『六郡郡邑記』のことを指す。なお、六郡郡邑記の史料的詳細については、柴田次雄『六郡郡邑記の再発見』『出羽路』127・128・129号 秋田県文化財保護協会 2000～2001(平成12～13)年による。
- 註13 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第8巻 241～244頁 未来社 1979(昭和54)年
- 註14 柴田次雄編『校訂・解題 久保田領郡邑記』336頁 無明舎出版 2004(平成16)年
- 註15 中仙町郷土史編さん委員会「第6章第5節 一 斎内川改修と耕地整理」「中仙町史 通史編」中仙町 1983(昭和58)年

«第1表 周辺遺跡一覧の参考文献»

- 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
- 2 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2001(平成13)年
- 4 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年
- 5 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
- 6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第380集 2004(平成16)年

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

小鳥田I遺跡は、仙北平野の北東部、出羽丘陵の麓を南流する玉川左岸から約940m東にあり、その標高は36～37m前後である。遺跡の範囲は、平成13年11～12月の確認調査によって括られた18,000m²全域であり、その工事区域内遺跡面積3,700m²のうち切土施工部分（面積2,400m²）が破壊を免れ得ないため、今回の発掘調査区が設定された。遺跡の現況は水田と畑地であり、第2章で述べたように藩政期には水田開発が、長野村時代（明治22年から大正11年まで）と町制施行後の長野町時代（大正11年から昭和30年まで）には耕地整理が実施され、昭和30年以降、中仙町になってからは、小規模の場所整備が行われた記録がある。水田は、町道鍾見内線に直交する北川幹線排水路と同軸方向（北北東）を向いて地割りされる。遺跡一帯は低く平坦な地形で、西側には周知の遺跡である鍾見内遺跡や小鳥田II遺跡、北には下道溝遺跡が近接し、約500m南には鍾見内集落が、約200m西には小鳥田集落がある。

第2節 調査の方法

調査の方法はグリッド方式によった。国土交通省が打設した2か所の三角点（国土地理院作成25,000分の1地形図「羽後長野」記載、小合田三角点：標高40.7mおよび鍾見内三角点：標高37.1m）からスタティック測量方式（GPS併用）を用いて国家座標X・Yを導き出し、発掘調査区の中央に原点杭（杭記号：MA 50.、X = -52943.000、Y = -26048.000、標高 = 36.839m、北緯39度18分23秒、東経140度26分37秒）を打設した。これを通る座標北ラインを南北基線とし、同じく原点杭を通り南北基線と直交するラインを東西基線とした。この東西南北の基線に沿って4m×4mの方眼（以下、グリッドと略記する）を組み、その交点に杭を打設した。各グリッドを呼称するために、基線の交点には、西に行くに従いMA・MB・MC・MD……、東に行くに従いLT・LS・LR・LQ……、北に行くに従い50・51・52・53……、南に行くに従い49・48・47・46……と、アルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を4m置きの各杭に明記した。方眼に囲まれた区域を呼称する場合は、その区域の南東隅の杭番号を用いた。

各調査区を掘り進む方法は、基本層位I層（表土・水田耕作土）の上面のみ、重機を用いて表土を除去し、これ以外は機械を用いず、すべて人力によって掘り下げた。これは、前年度の確認調査の結果から、I層表土の下がすぐ遺物包含層・遺構確認面であることが判明していたことと、現地形が水田および畦畔だったからである。ただし、確認調査後のトレンチ埋め戻し土がある場所については、平成14年度にバックフォーで試掘された箇所である。

なお、調査条件上の理由で排土搬出用ベルトコンベアは用いなかった。遺構名は、全調査区を通じて検出した順に連番を付し、凡例にあげた遺構略号をついた。ただし精査の過程で欠番となった遺構もある。遺構の記録については、実測図・写真・筆記によって行った。実測図は平面図・断面図と

も基本的に20分の1縮尺で作成した（遺構規模の大小により適宜縮尺を変更）。写真は基本的に35mm判のモノクロ・カラーリバーサル・ネガカラーの3種類のフィルムを用いて撮影したが、部分的に中判カメラやデジタルカメラでも撮影した。その後、本遺跡をほぼ直上から撮影した空中写真（国土地理院、写真番号 CTO-75-25 : C13-59およびC14B-20、昭和50年撮影）が存在するのを確認し、許可を得てこれを掲載した。

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成15年8月6日（水）～10月7日（火）までの延べ41日間実施した。以下、調査日誌を基に調査の経過を記述する。

6月5日：中仙町役場にて、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室および秋田県仙北平野農村整備事務所、中仙町教育委員会、秋田県埋蔵文化財センターの四者で発掘調査開始前の現地協議を行った。ここで調査面積や調査条件・調査期間・相互協力事項などを確定した。

7月30日：中仙町民会館ドンバルにて発掘調査作業員選考会を実施した。作業員の募集は中仙町教育委員会が行い、秋田県埋蔵文化財センターが選考した。

8月6日：発掘調査を開始した。同時に方眼杭の打設作業も開始した（8日に打設完了）。この日から、高橋佐登志安全管理指導員による発掘現場の安全管理指導が開始された。

8月7日：前年度確認調査トレントを一部基本土層として精査中、遺物が出土し始める。発掘調査前の遺跡近景写真撮影を行う。

8月8日：S I 01堅穴住居跡を検出した。中仙町文化財保護審議委員（代表：藤田秀司氏）10名が来跡し、調査状況を見学した。その際、鍾見内地区および周辺の遺跡について様々な御教示を得た。

9月1日：S D 02溝跡およびS N 03・04・05・06焼土遺構を検出した。溝跡は両端が途切れている。焼土遺構4基は比較的近接した場所で確認した。

9月2日：S K 07土坑を検出した。堆積土中から平安時代の土師器が出土した。

9月4日：L Q 50～54グリッドライン以東で、多数のS K P柱穴様ピットを検出した。また、調査区の北東端に近いS X 10は、住居の壁は削平されているものの、カマド跡の可能性がある焼土と炭化物の範囲を確認したことからS I 10堅穴住居跡とした。

9月11日：秋田県立大曲工業高等学校土木科のインターンシップ実習で、2年生3名が発掘調査に体験参加した。

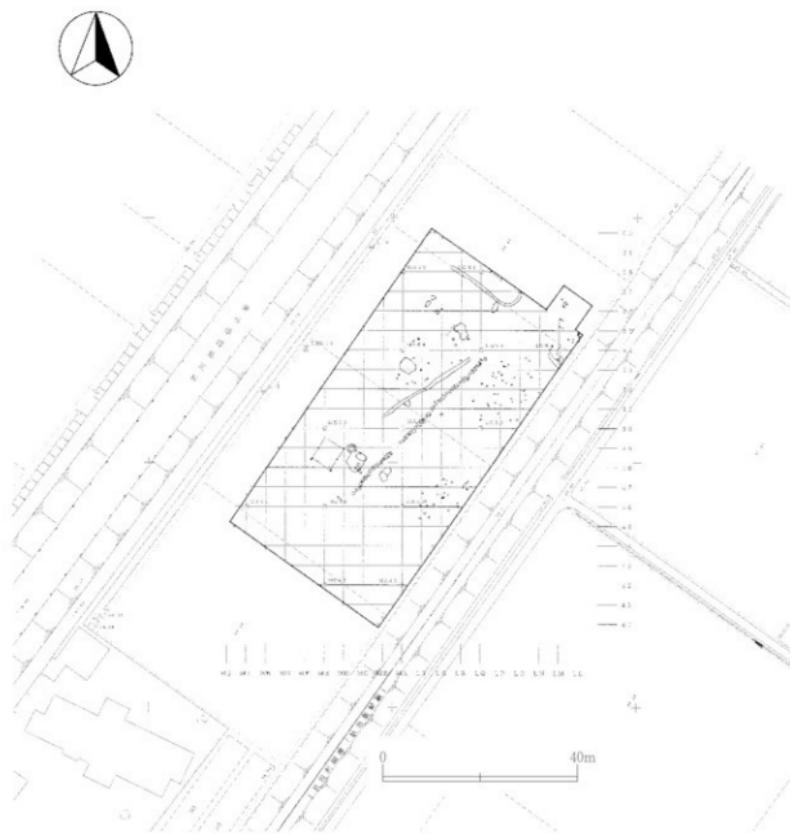
9月12日：検出したS X 91は住居跡であることが判明し、S I 91堅穴住居跡とした。

9月16日：S D 112溝跡を検出した。これを精査した際、やや東側に浅い凹みが数十基、北東～南西方向に連続することが判明した（後にこれをS M 198道路状遺構とした）。

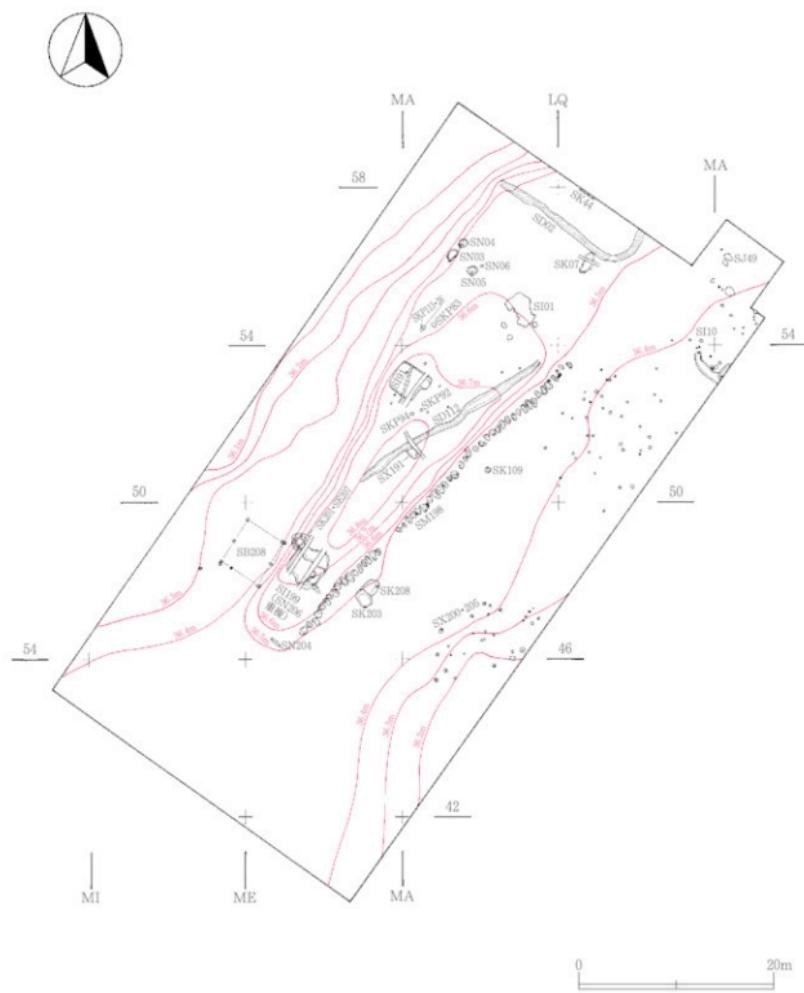
9月22日：中仙町立清水小学校6年生26名が発掘調査を体験学習（総合的学習）した。S N 206焼土遺構とS I 199堅穴住居跡を検出し、これ以外にも複数の遺構と重複していることが判明した。調査区の線路側で確認したS K P柱穴群をS X 200およびS X 205とした。

9月26日：S I 199堅穴住居跡と重複して、S K 201土坑とS E 207井戸跡を検出した。

9月29日：中仙町立農川小学校6年生13名が発掘調査を体験学習（総合的学習）した。



第4図 調査範囲図



第5図 遺構配置図

第3章 発掘調査の概要

- 10月3日：SKP群の一部が掘立柱建物跡となることを確認し、SB208掘立柱建物跡とした。調査区全体の地山レベリング（センター図作成作業）を行った。
- 10月6日：中仙町立豊成中学校3年生1名、2年生2名が発掘体験学習した。発掘調査終了前の遺跡遠景写真を撮影した。SI199堅穴住居跡のカマドから土製支脚が出土した。
- 10月7日：SI199堅穴住居跡の精査を終え、発掘調査を完了。現場を撤収した。高橋佐登志安全管理指導員による安全点検を受けたのち、発掘調査区(2,400m²)の全てを秋田県仙北平野農村整備事務所に引き渡した。

第4章 調査の記録

第1節 基本層位

小鳥田I遺跡の基本層位は、平成14年11～12月実施の確認調査トレンチ（埋め戻し済み）を再度掘り上げ、精査・観察した。その確認地点は、第6・7図に示した10か所の地点である。検出した遺構のほとんどがII層上面で確認され、遺構外遺物もII層以下で出土している。なお、発掘調査前の現況は水田であったため、土壤中には酸化・沈殿した赤褐色の鉄分層が斑入り、地山粘土層には暗青緑色にグライ化した場所も認められた。耕作による擾乱や削平が著しい場所では、土器片などの遺物がI層で多数表採された。また、第2章第1節で述べたように、本遺跡が立地する東部扇状地前延扇状構造低地〔III e〕は、第四紀完新世の未固結堆積物（扇状地前延扇状構造低地堆積物）が表層地質となっているため、土壤は細粒質のグライ土が主体となっている。基本層位の特徴は次の通りである。

〔基本層位東西基線ライン〕

- I層：灰黄褐色土(10YR 4/2) 締まり強・粘性中、表土、耕作土。層厚10～20cm
- II層：黒褐色土(10YR 3/2) 締まり中・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～25cm
- III層：暗褐色土(10YR 3/3) 締まり中・粘性中、遺物包含層。層厚 5～10cm
- IV層：暗灰黃褐色土(2.5Y 5/2) 締まり中・粘性強、遺物包含層、地山漸移層。層厚10～20cm
- V層：灰黃褐色土(10YR 5/2) 締まり中・粘性強、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

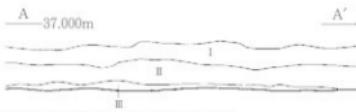
〔基本層位南北基線ライン〕

- I層：灰黄褐色土(10YR 4/2) 締まり中・粘性中、表土、耕作土。層厚10～25cm
- II層：黒褐色土(10YR 3/2) 締まり強・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～30cm
- III層：暗褐色土(10YR 3/3) 締まり中・粘性中、遺物包含層。層厚 5～15cm
- IV層：暗灰黄色土(2.5Y 5/2) 締まり強・粘性中、遺物包含層、地山漸移層。層厚15～25cm
- V層：灰黄褐色土(10YR 5/2) 締まり中・粘性強、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

本遺跡の周辺は玉川左岸まで一面に低く平坦な地形であるが、基本土層を観察した結果、表土から地山までの深さは、最も浅いところで20cm、最も深いところでは80cmである。これは遺跡全体の原地形に若干の高低差があったことを示している。特に調査区西側の北川寄りの方が東側よりも深くなる傾向が見られる。現在では護岸整備された玉川支流の小河川も、過去には幾度となく蛇行し、地形の起伏を形作っていたものと考えられる。

第2節 検出遺構と遺物

発掘調査の結果、小鳥田I遺跡で検出した遺構は合計206遺構である。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器や木製品、鎌倉～安土桃山時代の中世陶器、江戸時代の陶



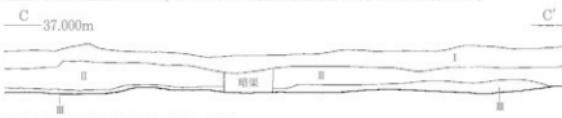
基本土層図 ① LN56グリッド(A-A')

- I層、灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱・炭化物微量混入・植物根多量混入・表土・耕作土。
II層、黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中・炭化物微量混入・暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入・上面は耕作土。
III層、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中・シルト質土。
地山、灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強・粘土層(部分的に砂礫層あり)。



基本土層図 ② LP53グリッド(B-B')

- I層、灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱・炭化物微量混入・植物根多量混入・表土・耕作土。
II層、黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中・炭化物微量混入・暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入・上面は耕作土。
III層、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中・シルト質土。
IV層、灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性弱・暗灰黄色土(2.5Y 5/2)多量に混入。
地山、灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強・粘土層(部分的に砂礫層あり)。



基本土層図 ③ LR50グリッド(C-C')

- I層、灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱・炭化物微量混入・植物根多量混入・表土・耕作土。
II層、黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中・炭化物微量混入・暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入・一部暗渠で攪乱される。
III層、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中・シルト質土。
地山、灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強・粘土層(部分的に砂礫層あり)。



基本土層図 ④ LS49グリッド(D-D')

- I層、灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱・炭化物微量混入・植物根多量混入・表土・耕作土・一部確認調査トレンチで削平。
II層、黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中・炭化物微量混入・暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入・一部確認調査トレンチで削平。
III層、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中・シルト質土。
地山、灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強・粘土層(部分的に砂礫層あり)。

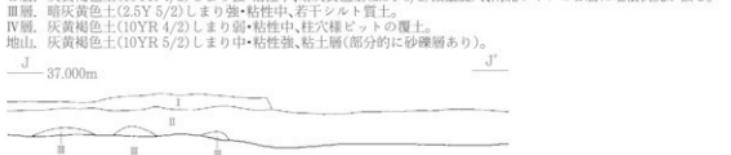
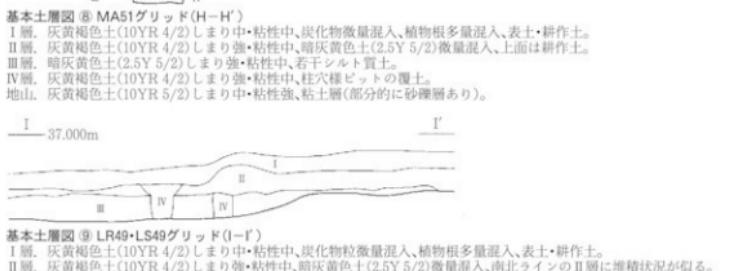
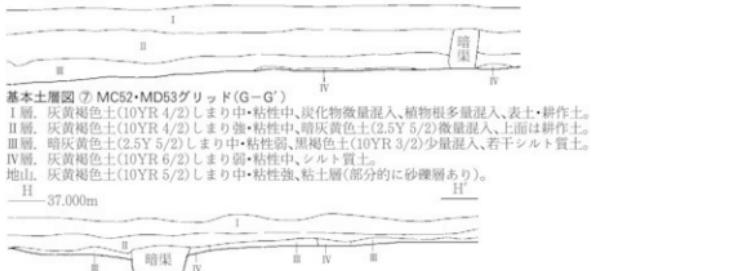
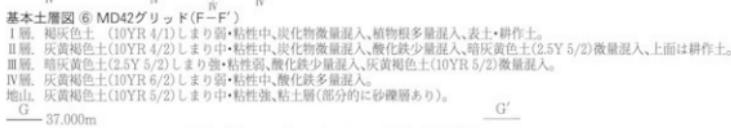


基本土層図 ⑤ MB45グリッド(E-E')

- I層、灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱・炭化物微量混入・植物根多量混入・表土・耕作土。
II層、黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中・炭化物微量混入・暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入。
III層、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中・シルト質土。
地山、灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強・粘土層(部分的に砂礫層あり)。



第6図 基本土層図(1)



第7図 基本土層図(2)

磁器など整理用コンテナで60箱分（中コンテナ換算）である。また、発掘調査区（2,400m²）内で検出した遺構数の内訳は、次の通りである。

第2表 検出遺構一覧

遺構の種類	検出数	遺構番号
堅穴住居跡	5軒	S I 01、10、49、91、199
掘立柱建物跡	1棟	S B 208
土 坑	7基	S K 07、44、83、109、201、202、203
井 戸 跡	1基	S E 207
焼 土 遺 構	6基	S N 03、04、05、06、204、206
溝 跡	2条	S D 02、112
道路状遺構	1条	S M 198
柱穴様ピット	180基	※第5図および第31・32図を参照。
性格不明遺構	3基	S X 191、200、205
合 計	206遺構	

これら調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付したものであるが、精査の過程で欠番となったものもある。検出遺構の時期は古代（平安時代）である。遺構外出土の遺物には、縄文時代、中世陶器、近世陶磁器などがある。

（1）堅穴住居跡

S I 01堅穴住居跡

《位置と確認》L Q 55～54、L R 55～54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》平面形は整わないプランである。規模は確認できる範囲で、長軸3.60m×短軸2.60m、深さ0.08mである。主軸方位はN-17°-Wである。

《土 層》3層に分層した。1層と3層は床面であり3層は貼床と考えられる。2層には焼土と炭化物多くが含まれていた。

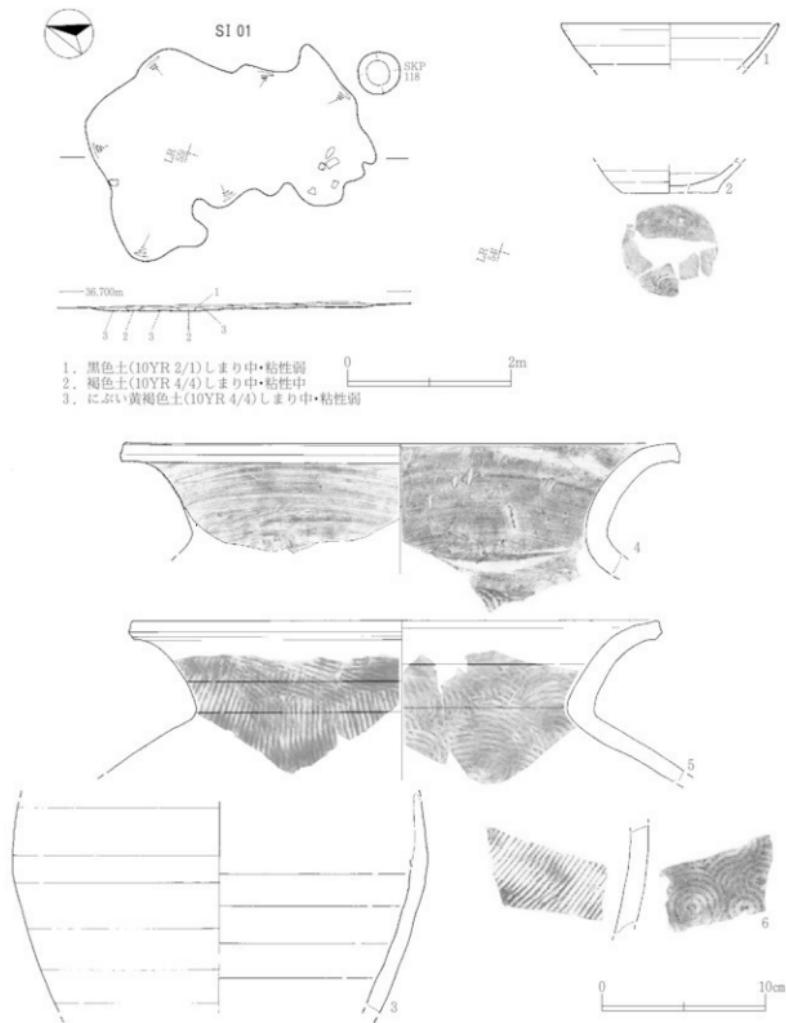
《壁》壁は耕作による攢乱で失われている。浅い平面プランの端部では僅かに緩い角度で立ち上がる。

《床面》確認した平面形が住居床面の残存した範囲である。

《柱穴》平面形の内側に柱穴は確認されなかった。しかし南東側にS K P 118柱穴様ピットが近接して位置し、住居内柱穴であった可能性がある。

《カマド》L R 55グリッド杭の周囲の2・3層に炭化物および焼土が比較的多く確認され、この部分がカマド燃焼部であると判断した。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかったが、遺物が出土している。

《出土遺物》6点を図示した（第8図1～6）。いずれも破片だが、土師器壺2点、土師器甕1点、須恵器甕3点である。



第3表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・部位	計 幅(cm)	深 度(cm)	高 さ(cm)	特 徴	その 他
第8図1	土器部	鉢	口縁部	SI 01壁上中	(33.4)	-	-	ロクロ	
第8図2	土器部	鉢	底部	SI 01壁上中	-	5.8	-	ロクロ 回転底切り	
第8図3	工具	鍬	口縁部	SI 01壁上中	-	-	-	ロクロ 剣刃に切欠き	赤褐色
第8図4	工具部	大鍬	口縁部	SI 01木マツ壁上中	(33.4)	-	-	内・外タキ日 施物 内・外縁部 工具跡有り	残存部 幅29.5cm 高さ7.5cm
第8図5	道具部	鍬	口縁部	SI 01木マツ壁上中	(33.4)	-	-	ロクロ 内・外タキ日	
第8図6	道具部	大鍬	側面	SI 01木マツ壁上中	-	-	-	ロクロ 内・外タキ日	

第8図 SI 01豎穴住居跡・出土遺物

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

S I 10堅穴住居跡

《 位置と確認 》 L L53～54、LM53～55、LN54グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 推定となるが第9図に示した炭化物分布範囲から、一辺が5m以上6m前後の規模になるものと考えられる。平面形はP1～P15（またはP13）～P19（P22）を結ぶラインがほぼ直角に近いことから、隅丸方形になるものと考えられる。

《 土 層 》 炭化物が極めて薄く分層できなかった。

《 壁 》 壁は耕作による攪乱で失われているが、炭化物（一部焼土を含む）範囲のP1からP11およびP15を結ぶラインが住居壁の一辺となるものと思われる。

《 床 面 》 炭化物の分布範囲とその中に囲まれた部分が住居の床面と思われる。

《 柱 穴 》 24基確認した。このうちP11は浅い凹み状であり、P22は一部調査区外に位置する。

《 カ マ ド 》 第9図に掲載した炭化物範囲の中で、P18・19・22・37・38付近が最も強く焼けておりカマド燃焼部であると判断した。遺物もここから多く出土している。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかった。調査区外から溝状の浅い凹みが入る。

《 出土遺物 》 9点を図示した（第9図1～9）。いずれも破片だが、土師器壺2点、土師器蓋1点、土師器壺1点、土師器甕2点、須恵器壺1点、須恵器壺1点、砥石1点である。

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

S I 49堅穴住居跡

《 位置と確認 》 調査区北側の境界線に沿ったL L55・LM55グリッドのII層で確認した。堅穴住居跡のカマド部分のみの検出である。

《 規模と平面形 》 平面形は二つのカマドとも長楕円形となるが、楕形はカマド1がほぼ円形、カマド2が長楕円形である。カマド1の規模は長軸1.70m×短軸0.90m、深さ0.52mで、主軸方位はN-24°-Wである。カマド2の規模は長軸2.01m×短軸1.26m、深さ0.26mで、主軸方位はN-59°-Wである。

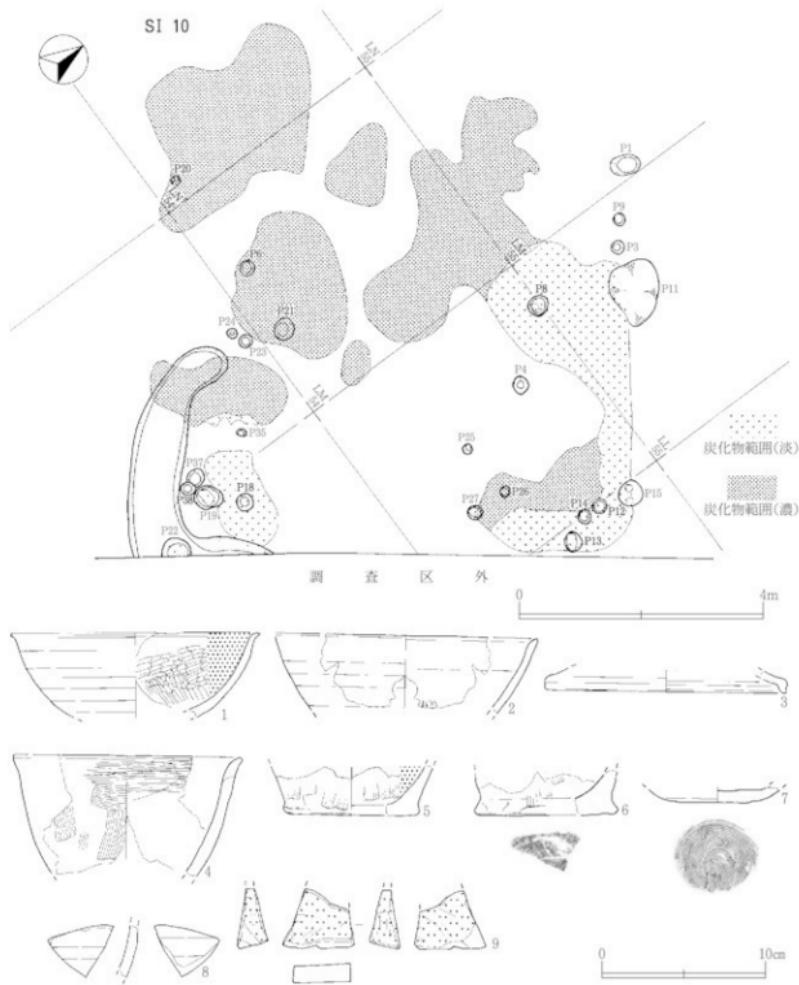
《 土 層 》 カマド1は6層に分層した。1～4層は焼土・炭化物の燃焼した層、5・6層は焼土・炭化物が少なく、遺物を多く含んでいた層である。カマド2は6層に分層した。1～4層は焼土・炭化物の燃焼した層、5層は焼土・炭化物が少なく、カマド底面となる6層が薄い炭化物層となっていた。

《 壁 》 壁は耕作による攪乱で失われている。

《 床 面 》 カマドより南東側は平坦であるが北西側はやや低くなるため、調査区外の北西方向に住居の床面が位置するものと考えられる。

《 カ マ ド 》 第10図に掲載した焼土範囲2カ所がカマド燃焼部であると判断した。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかったが、多くの遺物が出土した。断面A-A'の側がカマド1、断面B-B'の側がカマド2である。

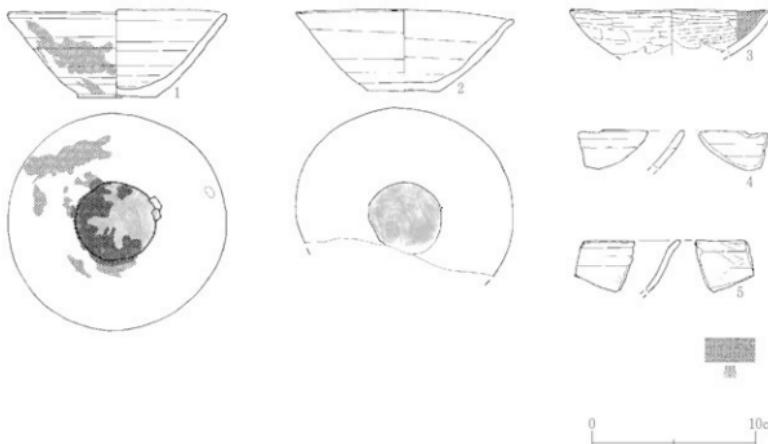
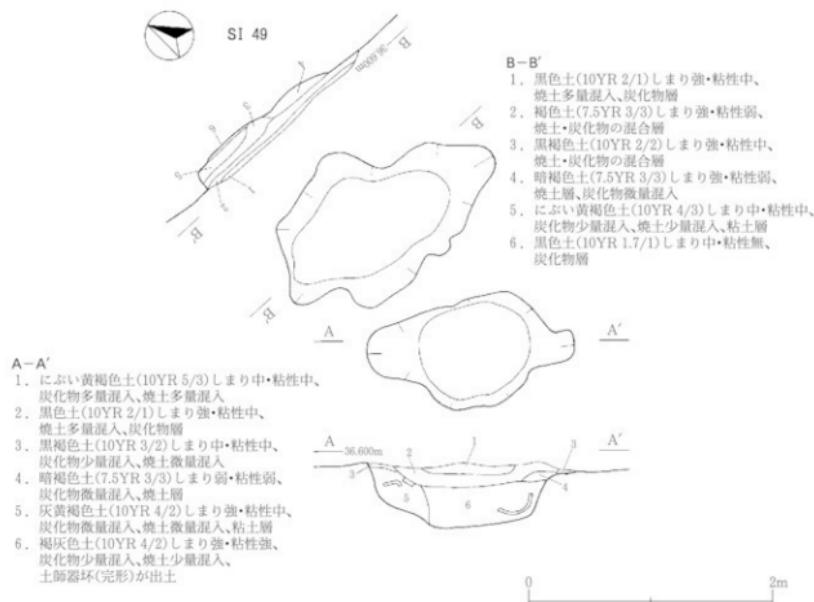
《 出土遺物 》 23点を図示した（第10図1～5、第11図1～18、第5表）。土師器壺8点（うち完形



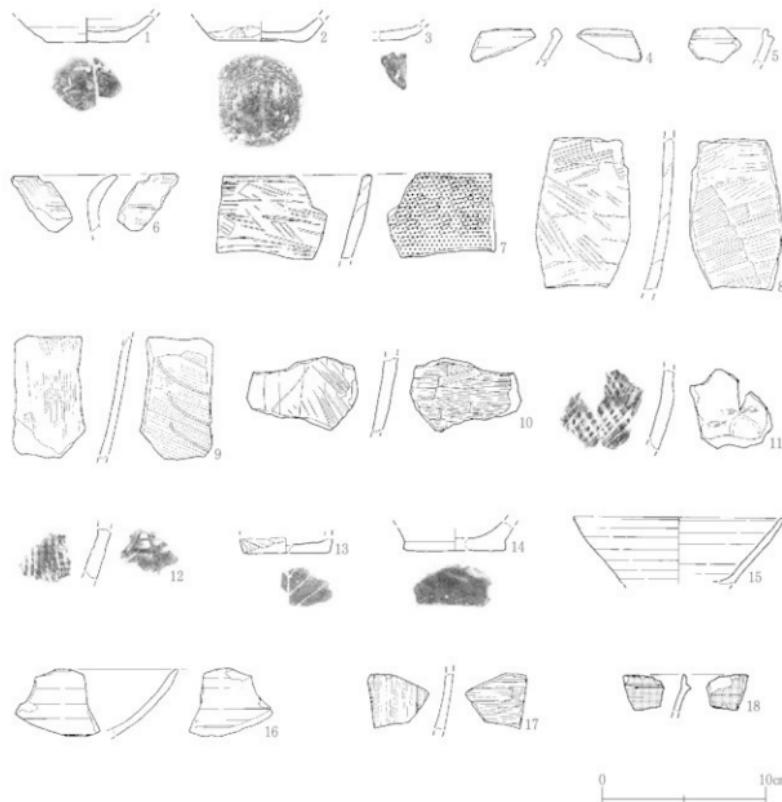
第4表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計 幅(cm)	計 深さ(cm)	高さ(cm)	特 徴	その 他
第9回1	土器部	灰	口縁部	S 110 P 4	(31.0)	-	-	ロクロ 内ミガキ→内面黑色化現	
第9回2	土器部	灰	口縁部	S 110	(34.0)	-	-	ロクロ 内ニハナ目	
第9回3	土器部	灰	口縁部	S 110 P 4	(34.0)	-	-	ロクロ	
第9回4	土器部	灰	口縁部	S 110 S K11 R P 1	-	-	-	ロクロ、内面黑色化現	
第9回5	土器部	灰	口縁部	S 110 R P 3	(34.0)	-	-	ロクロ、内面ニハナ目、移動現る	輪廻性有り
第9回6	土器部	灰	底盤	S 110 R P 27	(34.0)	-	-	ロクロ 内ニハナ目、移動現る	輪廻性有り
第9回7	土器部	灰	底盤	S 110	4.5	-	-	ロクロ	底盤表面
第9回8	陶器部	灰	脚部	S 110 S K11 覆土中	-	-	-	ロクロ	
第9回9	石製品	石器	-	S 110 S N 22	最大幅3.6	最大幅4.3	最大厚1.00	重さ23.0g 両面使用一部欠損	破損

第9図 S 110堅穴住居跡・出土遺物



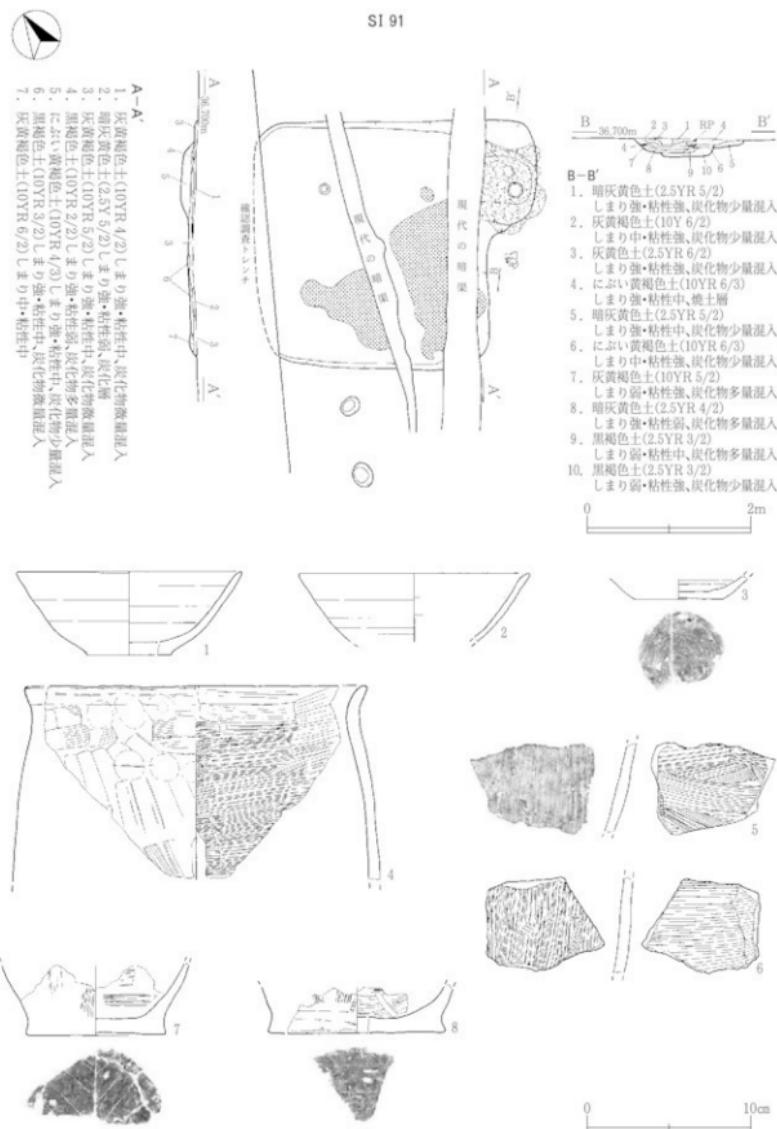
第10図 SI 49竪穴住居跡・出土遺物(1)



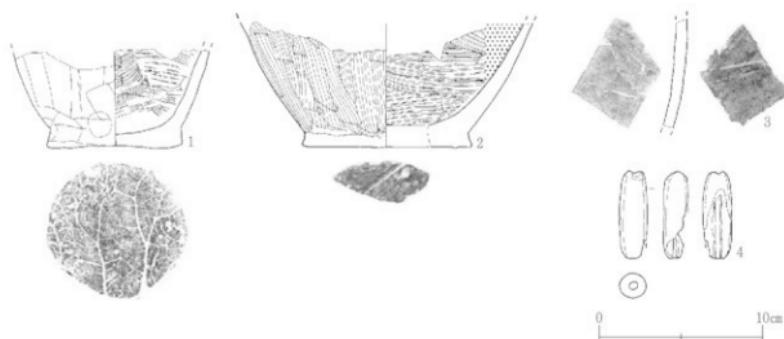
第5表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他
					(mm)	(mm)	(mm)		
第10901	土器部	碗	完形	S149-RP-a カツド	13.3	4.8	5.2	ロクロ 口縁丸切り 内:浅出巻刃形	DC底平
第10902	土器部	碗	底ばらけ	S149-388	13.3	4.5	5.0	ロクロ 口縁丸切り	
第10903	土器部	碗	底	S149-カツド2	(12.1)	-	-	ロクロ 内:メタリック(内:ミギキ)内:底色	内底黑色地斑
第10904	土器部	碗	口縁部	S149-288	-	-	-	ロクロ 前方に砂利じ	
第10905	土器部	碗	口縁部	S149-288	-	-	-	ロクロ	
第10906	土器部	碗	底	S149-カツド 腹上中	-	-	-	ロクロ 口縁丸切り	内底赤褐色
第10907	土器部	碗	底	S149-カツド R.P.24	14.8	-	-	ロクロ 口縁丸切り	
第10908	土器部	碗	底	S149-カツド R.P.3	5.7	-	-	ロクロ 内:ナダ 中心凹む 口縁丸切り	
第10909	土器部	碗	底	S149-288	-	-	-	ロクロ 口縁丸切り	
第10910	土器部	碗	底	S149-288	-	-	-	ロクロ	
第10911	土器部	碗	底	S149-R.P.22/23	-	-	-	ロクロ 内:ナダ底付 内:ナダ 斜傾江瓶	
第10912	土器部	碗	底	S149-288	-	-	-	ロクロ 内:ナダ底付	
第10913	土器部	碗	底	S149-288	(5.4)	-	-	ロクロ 内:ナダ	腹底
第10914	土器部	碗	底	S149-288	(5.4)	-	-	ロクロ 前方に砂利じ 腹底が美しい	口縁部に特徴あり
第10915	土器部	碗	底	S149-カツド 第二回	(12.4)	-	-	ロクロ	
第10916	石器部	石	口縁部	S149-R.P.3	-	-	-	ロクロ 両刃有り	
第10917	石器部	石	底	S149	-	-	-	ロクロ 内:ナダ	
第10918	石器部	石	口縁部	S149-288	-	-	-	ロクロ 両刃	口縁部に巻か行く段有り

第11図 S149堅穴住居跡・出土遺物(2)



第12図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(1)



第6表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計面積・高さ			特徴	その他
					横幅(cm)	奥幅(cm)	高さ(cm)		
第1298 1	土師器	碗	口縁部	S I 91 R P 30	(33.8)	(5.2)	5.1	ロクロ	
第1298 2	土師器	碗	口縁部	S I 91 R P 7	(34.0)	-	-	ロクロ	
第1298 3	土師器	碗	底盤	S I 91 R P 10	-	(5.4)	-	ロクロ 回転丸切り	
第1298 4	土師器	壺	口縁部	S I 91 R P 2	(26.0)	-	-	ロクロ 焼成済み+アベニア付、表面無釉、内面無釉	
第1298 5	土師器	壺	側面	S I 91 R P 2	-	-	-	ロクロ 焼成済み+アベニア付、表面無釉、内面無釉	
第1298 6	土師器	壺	側面	S I 91 R P 10	-	-	-	ロクロ 焼成済み+アベニア付、表面無釉、内面無釉	
第1298 7	土師器	壺	底盤	S I 91 カマド1	(8.4)	-	-	ロクロ 内外二層化壁、斜面削り	
第1298 8	土師器	壺	底盤	S I 91 R P 2	(10.8)	-	-	ロクロ 外：ナゲルヘッカ目、内：ナゲ 内外：斜面削り	底面無釉
第1300 1	土師器	壺	底盤	S I 91 R P 2 カマド 支脚	8.3	-	-	ロクロ 外：ナゲルヘッカ目、内：ナゲ 支脚有り	底面無釉 支脚有り
第1300 2	土師器	壺	底盤	S I 91 R P 2	(10.4)	-	-	ロクロ 外：ナゲルヘッカ目、内：ナゲ 内面黒色処理	底面無釉
第1300 3	土師器	壺	側面	S I 91 傷跡中	-	-	-	ロクロ 外：ナゲルヘッカ目 内：ナゲ	
第1300 4	土製品	土器	-	S I 91 R P 3	前方版 3.4	前方幅 1.8	最大厚 1.3	重さ 1.0kg	瓦解

第13図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(2)

1点)、土師器碗2点、土師器壺1点、土師器甕2点、須恵器壺1点、須恵器壺1点、砥石1点である。

《 時期 》 平安時代（9世紀前半）と考えられる。

S I 91堅穴住居跡

《 位置と確認 》 LT 52・53、MA 52・53グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 平面形は隅丸方形の堅穴住居跡である。規模は長軸3.36m×短軸3.06m、深さ0.22mである。主軸方位は、N-54°-Wである。

《 土層 》 現代の暗渠に切られた部分を断面とし7層に分層した。カマドは10層に分層された。

《 壁 》 壁は削平されているため浅いが、緩く傾斜して立ち上がる。

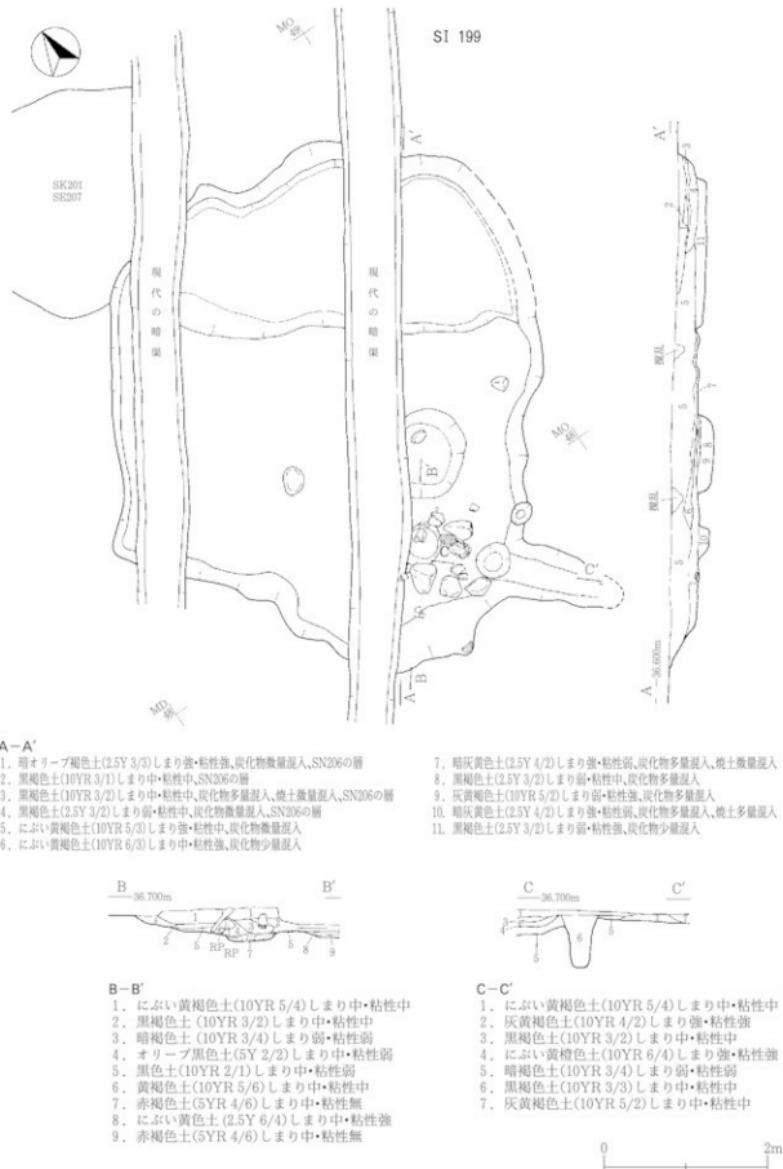
《 床面 》 全体的に平坦である。5層の部分のみ深くなるが、これはカマドの焚口部分だったものと想定される。

《 柱穴 》 カマド燃焼面中に1基確認した。

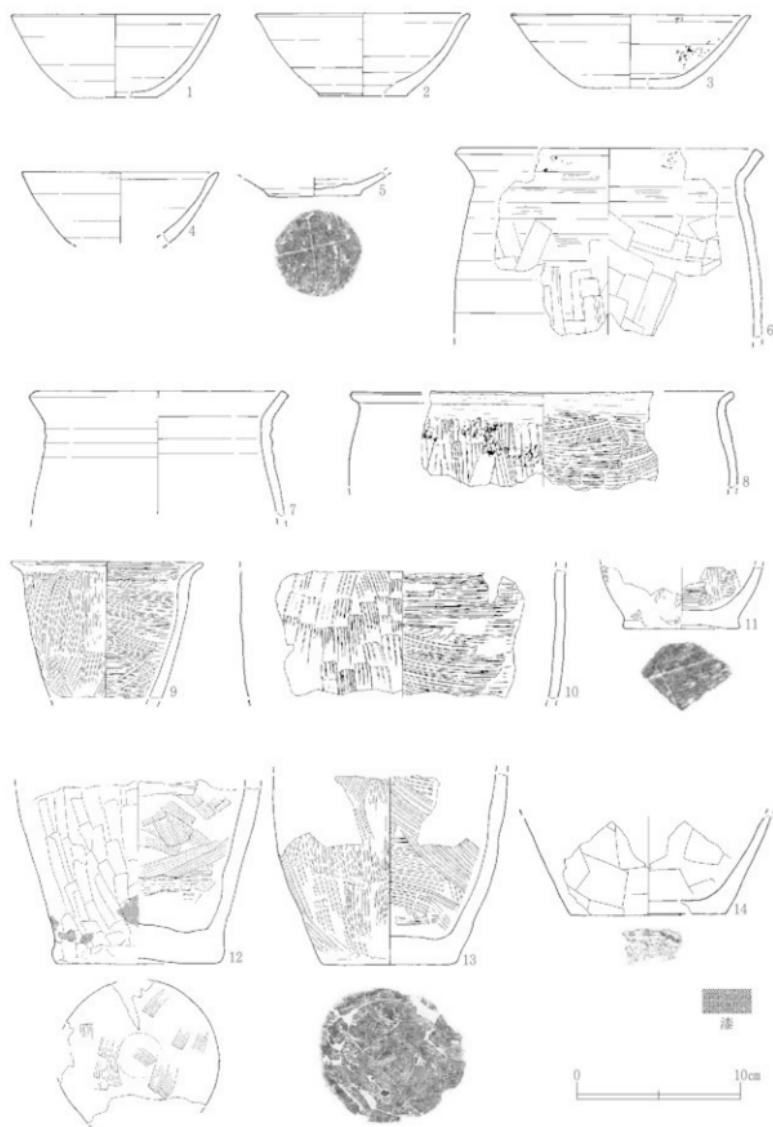
《 カマド 》 住居東角に張り出す部分がカマドである。焚口や袖部は暗渠によって壊されているが、土製支脚の下半分が残っており、その周囲（張り出し全体）が強く焼けていた。煙道部は確認されなかった。

《 出土遺物 》 12点を図示した（第12図1～8、第13図1～4、第6表）。いずれも破片だが、土師器壺3点、土師器甕7点、須恵器甕1点、土錐1点である。

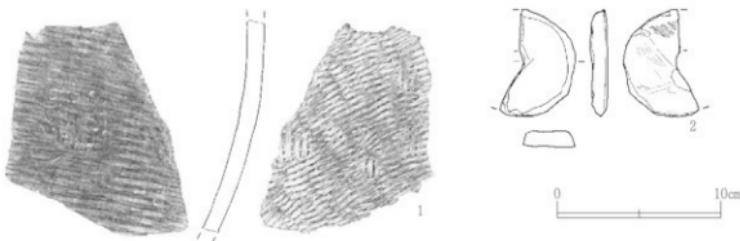
《 時期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第14図 S I 199堅穴住居跡



第15図 SII 199堅穴住居跡・出土遺物(1)



第7表 遺物観察表

番号	種別	形	部位	遺構・部位	計画図			特徴	その他
					口徑(㎝)	底面(㎝)	高さ(㎝)		
第15001	土器部	縫	底付形	S I 199 縫付不明	(11.0)	(10.2)	5.1	ロクロ	縫付
第15002	土器部	縫	底付形	S I 199 カマド 屋主中	(12.0)	(5.0)	(5.1)	ロクロ	縫付
第15003	土器部	縫	底付形	S I 199 R.P. カマド 屋主中	(14.7)	(5.0)	(4.5)	ロクロ	内面焼付物付着
第15004	土器部	縫	底付形	S I 199 R.P. 屋主中 焼付付	(12.0)	—	—	ロクロ	
第15005	土器部	縫	底付	S I 199 R.P. 4	—	—	5.5	ロクロ	底部焼付
第15006	土器部	縫	口縫形	S I 199 R.P. 5	(18.6)	—	—	ロクロ 内:ハケ目 ナメ 口縫周に少量の焼付物付着	底部のみ
第15007	土器部	縫	底付形	S I 199 R.P. 6	(16.5)	—	—	ロクロ	
第15008	土器部	縫	底付形	S I 199 R.P. 7	(16.5)	—	—	ロクロ 内:ハケ目 西:ハケ目 ナメ 西:ハケ目→ドア 内:焼付物付着	
第15009	土器部	縫	底付形	S I 199 R.P. 8	(11.0)	—	—	ロクロ 内:ハケ目	
第15010	土器部	縫	底付	S I 199 縫付	—	—	—	ロクロ 内:ハケ目	
第15011	土器部	縫	底付形	S I 199 カマド 屋主中 焼付	—	—	—	ロクロ 西:ハケ目 内:ハケ目 番属(?)	炭化物年代測定(分析1)
第15012	土器部	縫	底付	S I 199 R.P. 9	(16.0)	—	—	ロクロ 西:カマド 内:ナメ 工具による	底部へカズリ 有り
第15013	土器部	縫	底付	S I 199 R.P. 10	—	—	—	ロクロ 西:カマド 内:ハケ目	底部少しきずあり 土製支撑
第15014	土器部	縫	底付	S I 199 R.P. 11	—	—	—	ロクロ 内:ナメ	底部砂吸
第16001	用器部	縫	側部	S I 199 R.P. 12	—	—	—	ロクロ 西:ナメ付 無施 内:タキ4目	
第16002	用器部	側部	側部	S I 199 カマド 屋主中	最大径 4.6 厚大厚 1.0 高さ34.0cm 工程解剖	—	—	解剖	

第16図 S.I. 199堅穴住居跡・出土遺物(2)

S.I. 199堅穴住居跡

《位置と確認》MB48、MC47・48グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》平面形は略円形の堅穴住居跡である。規模は長軸4.20m×短軸3.50m、深さ0.23mである。主軸方位は、N-33°-Eである。

《重複》S.N.206焼土遺構に切られ、S.K.201土坑とS.E.207井戸跡を切る。

《土層》11層に分層した。断面A-A'の1~4層は重複するS.N.206焼土遺構の土層を含む。

7層は貼床、断面B-B'の7層はカマドの焼土である。

《壁》壁は浅いが、緩く傾斜して立ち上がる。

《床面》北東側の床面(11層の部分)が一段低くなる。南西側の床面はほぼ平坦だが、カマド焚口の北東に土坑状の凹みがある。

《柱穴》カマドの煙道側に1基、その東壁際に1基の計2基確認した。

《カマド》住居の南角に焚口・袖部・煙道部が確認された。断面B-B'の7層が焚口であり著しく焼けていた。袖部は石が組まれており、その内部から土製支脚が出土した。煙道部は末端が削平されているが、概ね南東側に向く。

《出土遺物》16点を図示した(第15図1~14、第16図1~2、第7表)。いずれも破片だが、土師器壺5点、土師器甕9点、須恵器甕1点、紡錘車1点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

S B 208掘立柱建物跡

《位置と確認》MD47~49、ME48~49グリッドのII層で確認した。当初、SKP柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。

《規模と平面形》規模は桁行2間×梁行1間、桁行長は北西側(P1~P4)で5.30m、南東側では5.20m、柱間距離は北西側では南から2.73+2.57m、南東側では南から2.90+2.30m、梁行は南西側で4.50m、北東側では4.40mの側柱式建物である。平面形は正方形に近いが僅かに北東-南西方向が長くなる。建物方位は東側でN-30°-Eを示す。

《柱穴》P1~6の計6基を確認した。各柱穴とも土層は単層で、黒褐色土または黒色土である。P4には柱材が遺存していた。平面形はP1・3~5・7・10の6基が円形、P2・6・8・9の4基が略円形である。重複関係はP1がP2に切れられ、P5がP6を切り、P8がP9を切る。P10のみ他の柱穴との間隔が異なる。深さは浅いもので0.18m(P9)、深いものでは0.48m(P5)と差がある。

《出土遺物》10点を図示した(第18図1~10、第8表)。いずれも土器片および掘立柱建物の構築材だが、土師器壺1点、土師器甕2点、須恵器甕1点、柱部材6点である。

《時期》出土した遺物から平安時代(9世紀代)と考えられる。

(3) 土坑

S K07土坑

《位置と確認》LP55・56グリッドのII層で確認した。北側は一部暗渠に壊されている。

《規模と平面形》規模は長軸2.40m×短軸1.02m、深さ0.19mで、平面形は長楕円形である。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は中央に凹凸がある。

《出土遺物》6点を図示した(第19図1~6)。いずれも破片だが、土師器壺3点、土師器甕2点、須恵器壺1点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

S K44土坑

《位置と確認》LP57グリッドのII層で確認した。調査区の境界線上に位置していたため、断面のみ確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.80m(短軸は不明)、深さ0.34mで、断面から推定される平面形は楕円形である。

《土層》2層に分層した。炭化物の混入が2層とも確認された。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。2層部分は一段凹み、これが底面となる。

《出土遺物》2点を図示した(第19図7~8、第9表)。破片であるが土師器鉢1点、須恵器甕1点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

S K 83土坑

《位置と確認》L T 54グリッドのII層で確認した。
《規模と平面形》規模は長軸0.70m×短軸0.50m、深さ0.25mで、平面形は略円形である。
《土 層》2層に分層した。1層に対し2層は壁の立ち上がりに取り付く。
《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がる。底面は2層側が高く傾いている。
《出土遺物》土師器壺の破片1点を図示した(第20図1、第10表)。
《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

S K 109土坑

《位置と確認》L R 50、L S 50グリッドのII層で確認した。
《規模と平面形》規模は長軸0.80m×短軸0.80m、深さ0.30mで、平面形は円形である。
《土 層》灰黄褐色土の単層である。
《壁・底面》壁は傾斜して立ち上がる。底面は平坦である。
《出土遺物》4点を図示した(第20図2～5、第10表)。土師器壺2点、土師器甕2点である。
《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

S K 201土坑

《位置と確認》M C 48・49グリッドのII層で確認した。南側は現代の暗渠で壊されている。
《重複》S E 207井戸跡を切り、S I 199堅穴住居跡に切られる。
《規模と平面形》規模は長軸1.90m×短軸1.03m、深さ0.76mで、平面形は略円形である。
《土 层》8層に分層した。黒褐色土主体の土層で、炭化物と灰色粘土が混入している。
《壁・底面》壁は傾斜して立ち上がる。底面は半円形に凹み、S I 199堅穴住居側でやや平坦になる。
《出土遺物》9点を図示した(第22図1～9、第11表)。土師器壺5点、土師器甕1点、土師器甕3点である。
《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

S K 202土坑

《位置と確認》MA 47、MB 47グリッドのII層で確認した。
《重複》S K 203土坑に切られる。
《規模と平面形》規模は長軸1.60m×短軸1.30m、深さ0.14mで、平面形は略円形である。
《土 层》4層に分層した(第20図中の3～6層)。黒褐色土主体の土層である。
《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状である。
《出土遺物》3点を図示した(第20図6～8、第10表)。破片であるが土師器甕1点、土師器甕1点、磨石兼敲石1点である。
《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

S K 203土坑

《位置と確認》MA 47、MB 47グリッドのII層で確認した。
《重複》S K 202土坑を切る。
《規模と平面形》規模は長軸1.90m×短軸1.30m、深さ0.17mで、平面形は略円形である。

《 土 層 》 2層に分層した（第20図中の1・2層）。黒褐色土主体の土層である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状である。

《 出土遺物 》 7点を図示した（第21図1～7、第10表）。土師器壺2点、土師器甕2点、須恵器甕1点、須恵器瓶1点、焼けた面のある礎1点である。

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

（4）井戸跡

S E 207井戸跡

《 位置と確認 》 MC 48～49グリッドのII層で確認した。南側は現代の暗渠で壊されている。

《 重 複 》 SK 201土坑とS I 199竪穴住居跡に切られる。よってS E 207井戸跡→SK 201土坑→S I 199竪穴住居跡の順で新しくなる。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.40m×短軸1.32m、深さ0.88mで、平面形は円形である。

《 土 層 》 緑灰色土の単層で、上面にSK 201土坑の2・5・7層の黒褐色土が多く混入していた。井戸の掘形は土壤のグライ化で確認できなかった。SK 201土坑との間（5～7層と8層の境界）に加工痕のある木材が出土し、井戸の部材と判断した。8層に達すると井戸内の曲物が出土した。

《 壁・底面 》 壁は垂直に立ち上がるが、北西側は曲物より上で緩く傾斜して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 14点を図示した（第22図10～14、第23図1～3、第24図1～5、第11～13表）。土師器壺5点、土師器甕1点、井戸枠曲物1点、井戸の部材7点である。これらの遺物は8層から底面にかけて出土した。

《 時 期 》 平安時代（9世紀代前半）と考えられる。

（5）焼土遺構

S N03焼土遺構

《 位置と確認 》 LS 56グリッドのII層で確認した。北西側は確認調査トレンチで壊れている。

《 重 複 》 SK P 08・09柱穴様ピットに切られる。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.40m×短軸0.75m、深さ0.08mで、平面形は梢円形である。

《 土 層 》 5層に分層した。全面焼土であるが、黒褐色土中に黄褐色・灰黄褐色土が混じる。

《 壁・底面 》 壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央が僅かに凹むがほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 2点を図示した（第25図1～2、第14表）。土師器壺1点、土師器甕1点である。

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

S N04焼土遺構

《 位置と確認 》 LS 56グリッドのII層で確認した。北西側は確認調査トレンチで壊れている。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.10m×短軸0.85m、深さ0.08mで、平面形は略円形である。

《 土 層 》 5層に分層した。全面焼土であるが、特に4層（赤褐色土）が主要な燃焼面と思われる。

《 壁・底面 》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状である。

《 出土遺物 》4点を図示した（第25図3～6、第14表）。土師器壺1点、土師器甕2点、焼けた面のある礫片1点である。

《 時期 》平安時代（9世紀後半）と考えられる。

S N05焼土遺構

《 位置と確認 》L S 55グリッドのII層で確認した。

《 重複 》SKP柱穴様ピット2基に切られる。

《 規模と平面形 》規模は長軸1.10m×短軸0.80m、深さ0.17mで、平面形は略円形である。

《 土層 》8層に分層した。全面焼土である。上位は黒褐色土、下位は灰黄褐色土が多い。

《 壁・底面 》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》極めて小さな土師器片が出土した。

《 時期 》平安時代（9世紀後半）と考えられる。

S N06焼土遺構

《 位置と確認 》L R 55～56グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》規模は長軸0.30m×短軸0.30m、深さ0.07mで、平面形は梢円形である。

《 土層 》灰黄褐色土主体の単層で、全面焼土である。

《 壁・底面 》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅い塊状である。

《 出土遺物 》遺物は出土しなかった。

《 時期 》近接するS N05焼土遺構との関連から平安時代と考えられる。

S N204焼土遺構

《 位置と確認 》MD46グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》規模は長軸1.20m×短軸0.30m、深さ0.13mで、平面形は細長い梢円形である。

《 土層 》2層に分層した。全面焼土であり、炭化物を多く含む。

《 壁・底面 》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は中央が平坦である他は凸凹が多い。

《 出土遺物 》焼土範囲の外側にも土師器の破片が散在しており、後世の擾乱によって動いたものと判断した（同一個体も含まれる）。6点を図示した（第26図1～6、第14表）。土師器壺1点、土師器甕4点、須恵器甕1点である。

《 時期 》平安時代（9世紀後半）と考えられる。

S N206焼土遺構

《 位置と確認 》MB48、MC48グリッドのII層で確認した。南東側は確認調査の坪掘りで壊れてい る。

《 重複 》S I 199竪穴住居跡を切る。

《 規模と平面形 》規模は長軸2.00m×短軸1.30m、深さ0.26mで、平面形は梢円形である。

《 土層 》8層に分層した（9層はS I 199竪穴住居跡の層）。特に5層が焼土層となる。

《 壁・底面 》壁は緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》6点を図示した（第27図1～6、第15表）。土師器壺2点、土師器甕3点、須恵器甕1点である。

《 時期 》平安時代（9世紀後半）と考えられる。

（6）溝跡

S D02溝跡

《 位置と確認 》MA51、MB50、LQ53、LR52～53、LS51～52、LT51グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》規模は長軸（北西→南東方向）13.50m、短軸（LP56杭付近からカーブする北東→南西方向）3.50m、深さ0.16mで、溝幅は0.90mである。調査区外の北側に溝が続くものと思われる。

《 土層 》4か所計測したが、溝跡自体の堆積土は暗褐色土または黒褐色土の単層である。

《 壁 》壁は緩く傾斜して立ち上がる。

《 底面 》粒状の炭化物が底面に多く含まれる。遺物も底面からの出土が多い。

《 出土遺物 》12点を図示した（第28図1～12、第16表）。土師器壊4点、土師器甕5点、須恵器壊1点、須恵器甕1点、磁石1点である。

《 時期 》平安時代（9世紀代前半）と考えられる。

S D112溝跡

《 位置と確認 》MA51～50、MB50、LQ51、LR51～52、LS51～52、LT51グリッドのⅡ層で確認した。北東側はLQ53グリッドで途切れ、南西側はMB50グリッドで消失する。

《 規模と平面形 》規模は長軸21.60m×短軸1.10m、深さ0.16mで、平面形は北東→南西方向に直線状となる。軸線方向はN-59°-Eである。溝幅は場所によって一定しない。

《 重複 》SX191その他の遺構を土坑を切る。

《 土層 》2か所計測し、2～3層に分層した。溝跡自体の堆積土は黒褐色土だが、底面に灰黃褐色土が多く含まれる。

《 壁 》壁は急な角度で立ち上がる。

《 底面 》溝の底面は概ねレンズ状であるが、部分的に凹凸がある。

《 出土遺物 》11点を図示した（第30図1～11、第17表）。土師器壊5点、土師器甕1点、土師器甕4点、須恵器壊1点である。

《 時期 》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

（7）道路状遺構

S M198道路状遺構

《 位置と確認 》MA48～49、MB47～48、MC46～47、LP53、LQ52～53、LR51～52、LS50～51、LT50～49グリッドのⅡ～Ⅲ層で確認した。

《 規模と平面形 》径35～70cmの凹みが54基北東→南西方向に連続する。規模は長軸39.00m×短軸1.00m（凹み連続部分のみの幅）、深さ0.22m（平均値）で、平面形は直線状である。北東側（全長の約3分の2）は標高36.5mの等高線に沿い、南西側（全長の約3分の1）は標高36.6mの等高線に沿う。

《 土層 》凹み自体の堆積土は黒褐色土の単層だが、炭化物が底面に多く含まれる。

《 底面 》凹みの中央がより深く、底面は整わず凸凹がある。

《出土遺物》12点を図示した（第30図12～23、第17表）。土師器壺9点、土師器甕1点、須恵器壺2点である。

《時期》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

（8）柱穴様ピット（※数が多いため、下記以外は第31図に掲載）

S K P 92柱穴様ピット

《位置と確認》L T 52グリッドのII層で確認した。

《出土遺物》土師器壺1点を図示した（第32図1、第18表）。

S K P 94柱穴様ピット

《出土遺物》土師器甕1点を図示した（第32図2、第18表）。

S K P 83・113柱穴様ピット

《出土遺物》S K P 113側から出土した土師器甕1点を図示した（第32図3、第18表）。

S K P 98柱穴様ピット

《出土遺物》須恵器甕1点を図示した（第32図4、第18表）。

S K P 151柱穴様ピット

《出土遺物》土師器甕1点を図示した（第32図5、第18表）。

（9）他の遺構

S X 191他の遺構

《位置と確認》L T 51グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.30m×短軸0.90m、深さ0.11mで、平面形は梢円形である。主軸方位はN-34°-Eを示す。精査後の形態から他の遺構としたが、その機能は土坑に準ずるものと想定される。

《重複》S D 112溝跡に切られる。

《土層》2層に分層した。1層はS D 112溝跡の層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第33図1～4、第19表）。土師器壺1点、土師器甕3点である。

《時期》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

S X 200他の遺構

《位置と確認》L Q 46～47、L R 47グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》掘立柱建物を構成する柱穴様ピット群になるものと考えたが、判定できなかった。

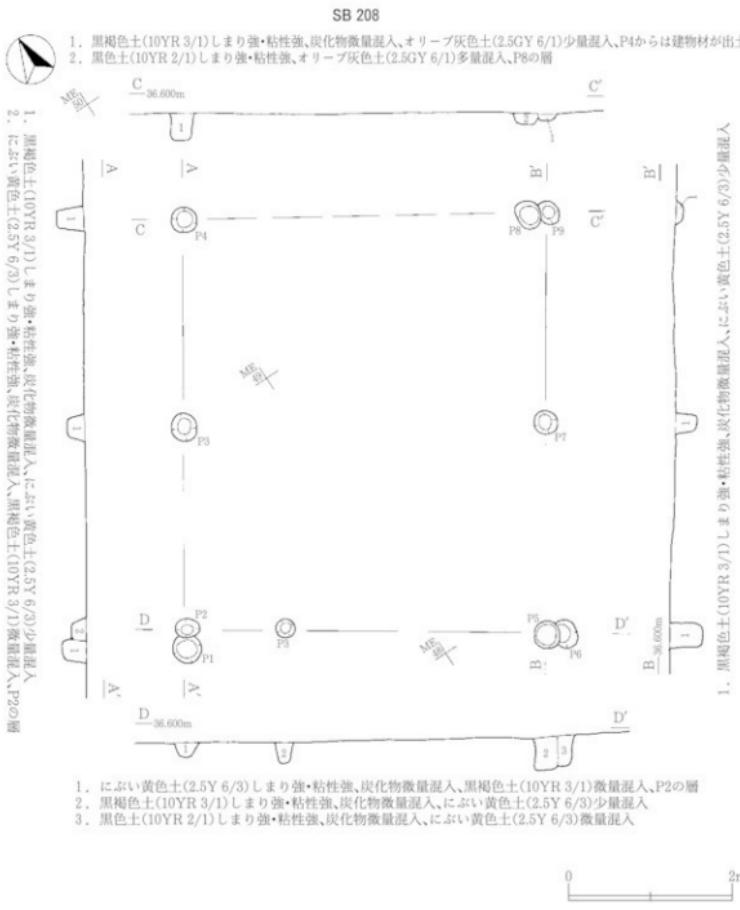
《土層》黒褐色土の單層である。

《出土遺物》15点を図示した（第34図1～5、第35図1～10、第20・21表）。土師器壺5点、土師器9点（うち台付甕1点）、須恵器甕1点である。

《時期》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

S X 205性格不明遺構

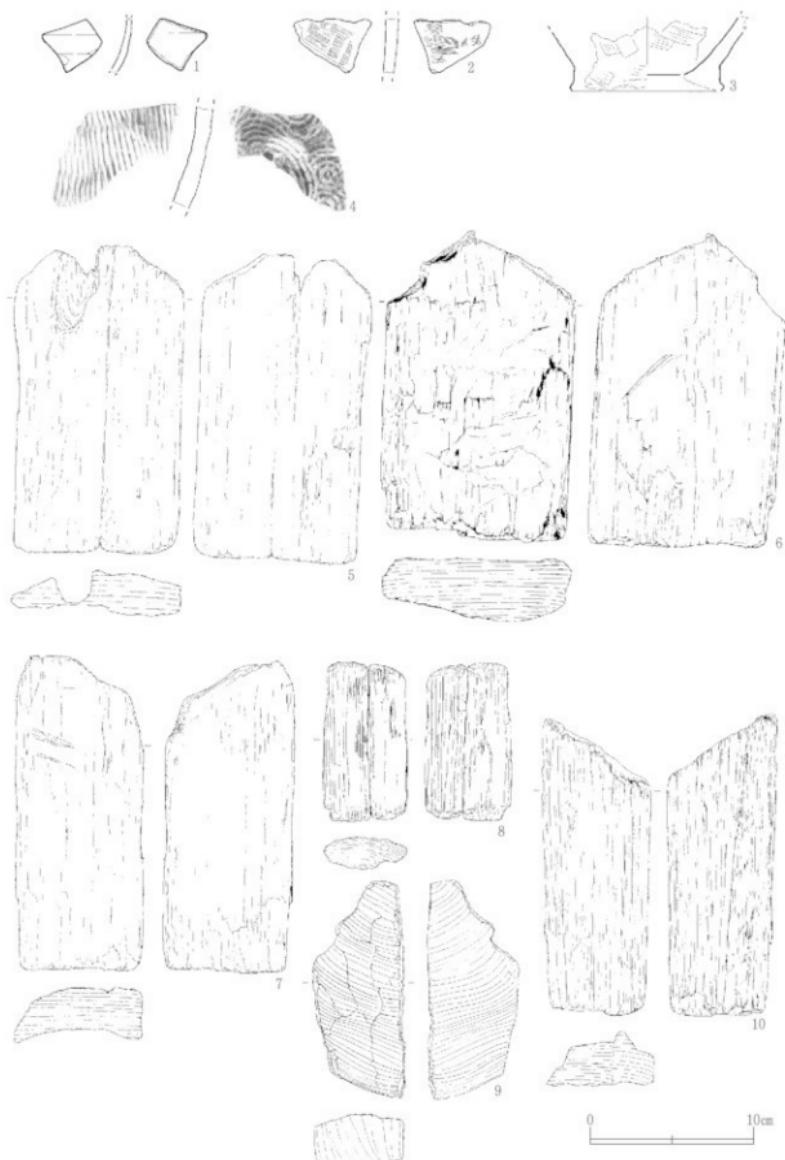
《位置と確認》L R 46～45、L S 45～47、L T 45～46グリッドのII層で確認した。



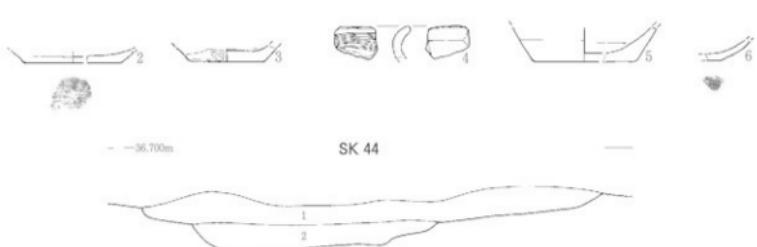
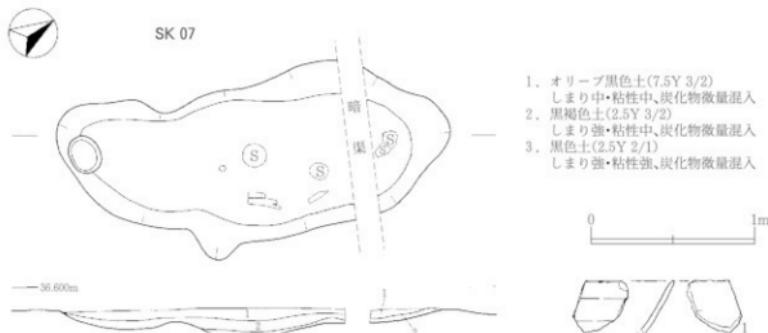
第3表 遺物観察表

番号	種別	形態	部位	計測量			特徴	その他の
				C径(m)	周長(m)	高さ(m)		
第18081	下脚部	鉢	S B208-II R/P	-	-	-	ロクロ	
第18082	下脚部	鉢	S B208-II R/P	-	-	-	ロクロ 内外:ハケ目	
第18083	下脚部	鉢	S B208-II R/P	-	-	(9.2)	ロクロ 内:ケメリ→カゼ 内:ナゲ	
第18084	底盤部	鉢	S B208-II R/P	-	-	-	ロクロ 内外:タキヨ目	底面が突いている
第18085	A製材	木材	S B208 P40 RW1.1 1脚	最大幅18.8	最大幅14.6	高さ厚3.7		(分析:11)
第18086	A製材	木材	S B208 P40 RW2.2 1脚	最大幅10.0	最大幅14.6	高さ厚3.7	裏にナギ 加工痕	(分析:14)
第18087	A製材	木材	S B208 P40 RW3.3 1脚	最大幅12.5	最大幅16.0	高さ厚3.7	裏にナギ 加工痕	(分析:12)
第18088	A製材	木材	S B208 P40 RW3.3 1脚	最大幅9.7	最大幅13.7	高さ厚3.0		(分析:13)
第18089	A製材	木材	S B208 P40 RW3.3 1脚	最大幅13.3	最大幅13.7	高さ厚3.0		(分析:15)
第18090	A製材	木材	S B208 P40 RW3.3 1脚	最大幅18.2	最大幅16.7	高さ厚3.4		(分析:16)

第17図 S B208掘立柱建物跡・出土遺物(1)



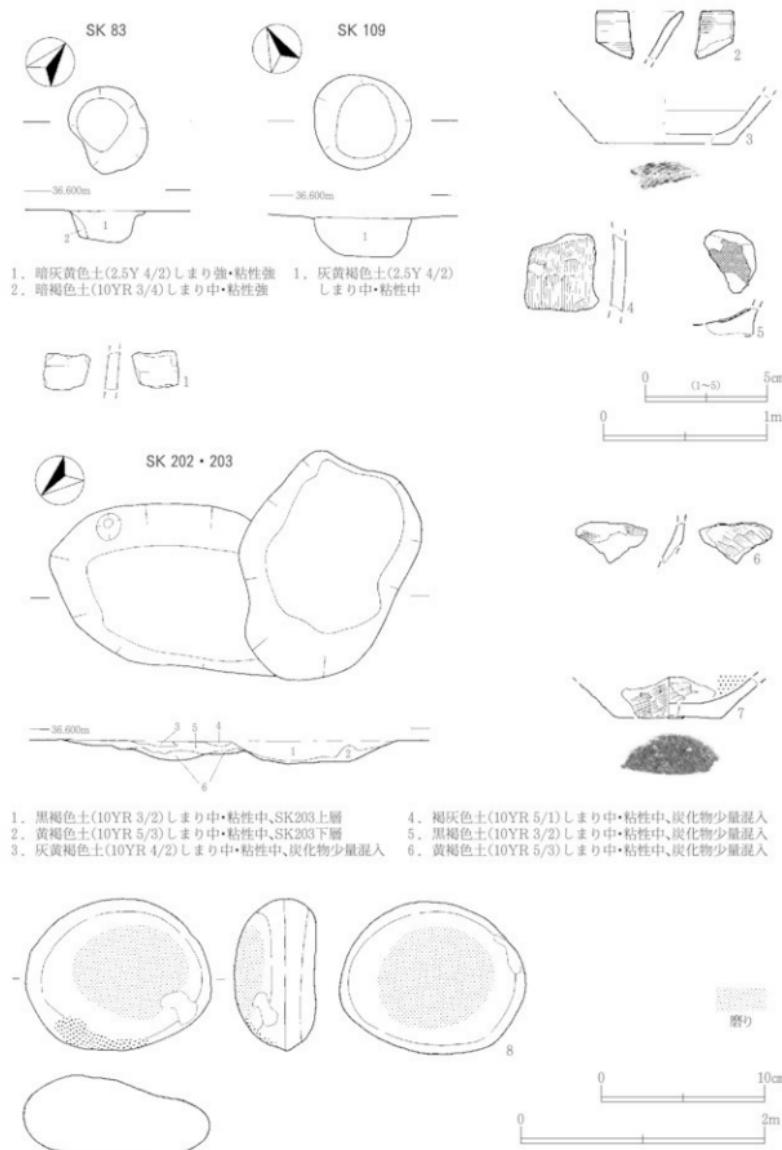
第18図 S B208掘立柱建物跡・出土遺物(2)



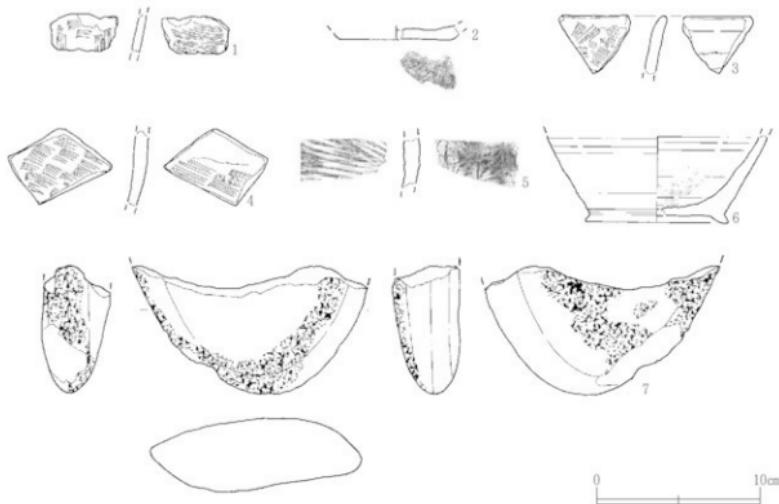
第3表 遺物観察表

番号	種別	面形	部位	遺構・層位	計測面積			特徴	その他
					口徑(cm)	底径(cm)	深さ(cm)		
第19回1	土器部	碗	上部	C縫隙 S.K07	-	-	-	ロクロ 内外二ナゲ 狹肩に凸	
第19回2	土器部	碗	上部	底面 S.K07	-	(3.0)	-	ロクロ 内外二ナゲ	
第19回3	土器部	碗	上部	S.K07	-	(4.0)	-	ロクロ 内外二ナゲ	
第19回4	土器部	碗	上部	C縫隙 S.K07 壁上部	-	-	-	ロクロ 外底する	
第19回5	土器部	碗	上部	S.K07 壁上部	-	(3.1)	-	ロクロ 狹肩する	
第19回6	瓦器部	碗	側面～底面	S.K07 壁上部	-	-	-	ロクロ 四輪車切跡	
第19回7	土器部	碗	上部	C縫隙 S.K44 (L.P16)	(38.0)	-	-	ロクロ 内二ナゲ 狹	
第19回8	瓦器部	碗	側面	S.K44 (L.P16)	-	-	-	ロクロ 内二ナゲ 狹 内二ナゲ	

第19図 SK 07・44土坑・出土遺物



第20図 SK 83・109・202・203土坑・出土遺物



第20表 遺物観察表

番号	種別	部形	部位	遺構・部位			特徴	その他
				計面積	幅径(cm)	高さ(cm)		
第2001	土器器	灰	側面	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内外：粘着じる	
第2002	土器器	灰	口縁度	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内外：シグマ	
第2003	土器器	灰	底層	S K 203 壁上	-	(5.0)	ロクロ 四隅角切ち	
第2004	土器器	灰	側面	S K 203 壁上	-	-	ロクロ	
第2005	土器器	灰	底層	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内に漆	
第2006	土器器	灰	側面	S K 202 料下	-	-	ロクロ 内一二箇所 内外：粘着じる	
第2007	土器器	灰	底層	S K 202 料下	-	-	ロクロ 内一二箇所 内外：粘着じる	炭化物年代測定（分析2）
第2008	礫石	磨り削り石	側面	S K 203 R Q2	前大後 3.4 前大輪 11.2 後大厚 5.0	重さ20.0 g 次脚有り	ロクロ 内外：シグマ	
第2101	土器器	灰	側面	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内外：シグマ 粘着じる	
第2102	土器器	灰	底層	S K 203 壁上	-	(5.0)	ロクロ 四隅角切ち	帶著者しい
第2103	土器器	灰	底層	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内一二箇所 内：軽く研磨 内外：粘着じる	
第2104	土器器	灰	側面	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内一二箇所 内外：粘着じる	
第2105	土器器	灰	側面	S K 203 壁上	-	-	ロクロ 内外：シグマ	
第2106	土器器	灰	側面～底層	S K 203 R P1	-	-	ロクロ 磨痕	
第2107	礫石	磨り石	側面	S K 203 R Q2	前大後 7.9 前大輪 14.4 後大厚 4.6	重さ28.0 g 磨き跡著しい炭化物付着	ロクロ	

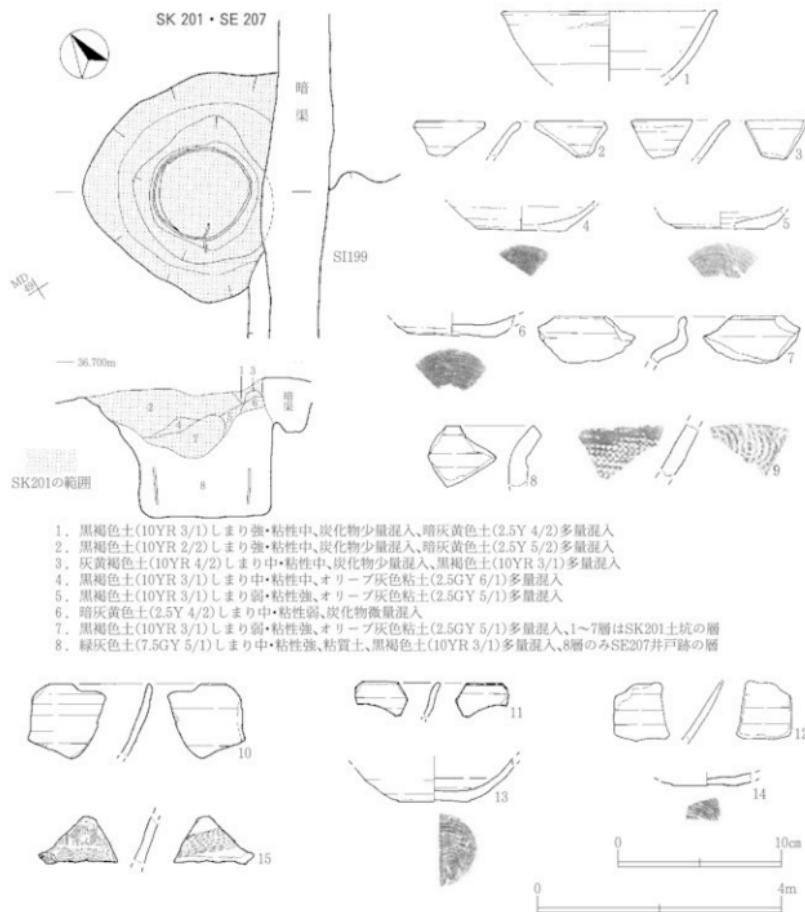
第21図 S K 203土坑・出土遺物

《規模と平面形》掘立柱建物を構成する柱穴様ピット群になるものと考えたが、判定できなかった。

《 土 層 》 黒褐色土の單層である。

《 出土遺物 》 41点を図示した（第36図1～24、第37図1～17、第38図1～9）。いずれも破片だが土器器24点、土器器甕11点、土器器壺1点、須恵器壺2点、須恵器甕9点、須恵器壺2点、土鍾1点である。

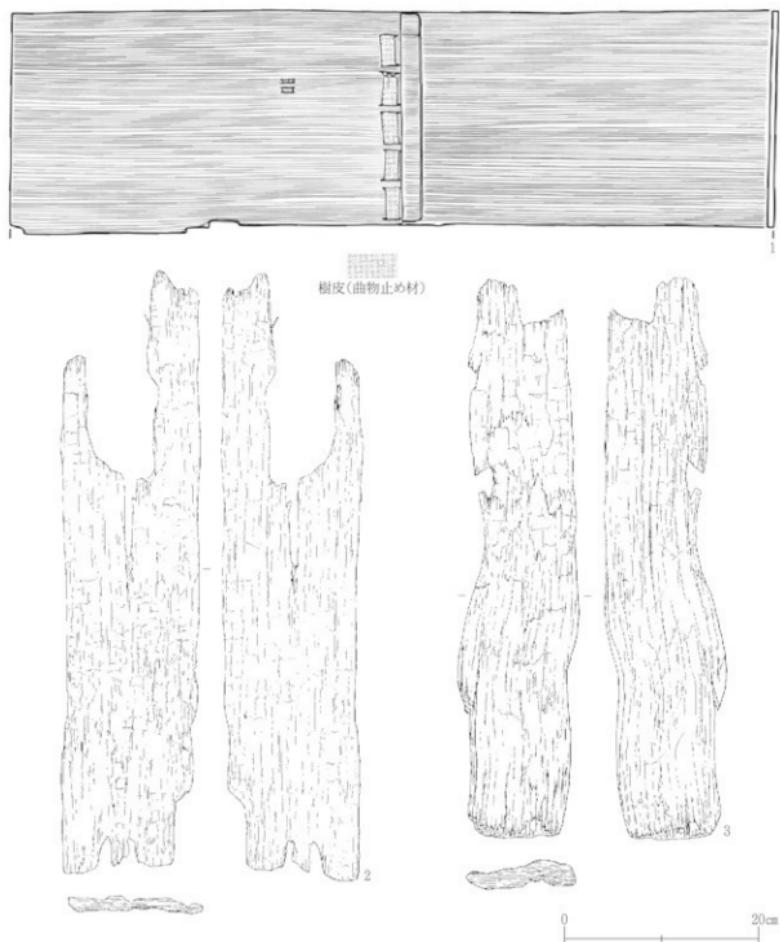
《 時 期 》 平安時代（9世紀代後半）と考えられる。



第11表 遺物観察表

番号	種別	形態	部位	遺構・層位	計測値	特徴	その他
					G.H.(cm) 幅径(cm) 厚さ(cm)		
第2209.1	土器部	鉢	口縁部	S.K201 壁土中	(33.0)	ロクロ	
第2209.2	土器部	鉢	口縁部	S.K201 壁土中	-	ロクロ	口縁ふくらむ
第2209.3	土器部	鉢	口縁部	S.K201 壁土中	-	ロクロ 内:工具痕	内面に工具線(引抜)
第2209.4	土器部	鉢	底盤	S.K201 壁土中	(3.6)	ロクロ 回転系切り	管窓が美しい
第2209.5	土器部	鉢	底盤	S.K201 壁土中	(3.6)	ロクロ 回転系切り	
第2209.6	土器部	鉢	底盤	S.K201 壁土中	(3.4)	ロクロ 回転系切り 遷回中央に凹み	
第2209.7	土器部	鉢	口縁部	S.K201 壁土中	-	ロクロ	外側に凹み
第2209.8	土器部	鉢	口縁部	S.K201 壁土中	-	ロクロ	外側に凹み
第2209.9	土器部	鉢	口縁部	S.K201 壁土中	-	ロクロ	外側に凹み
第2209.10	土器部	鉢	口縁部	S.E.207 壁土中	-	ロクロ 外面に接着部	
第2209.11	土器部	鉢	口縁部	S.E.207 壁土中	-	ロクロ	
第2209.12	土器部	鉢	側面	S.E.207 壁土中	-	ロクロ	
第2209.13	土器部	鉢	底盤	S.E.207 壁土中	4.2	ロクロ 回転系切り	
第2209.14	土器部	鉢	底盤	S.E.207 壁土中	(4.0)	ロクロ 回転系切り	
第2209.15	土器部	鉢	側面	S.E.207 壁土中	-	ロクロ 外:ハリ目 内面:粗粒にむ	

第22図 S K 201土坑・S E 207井戸跡・出土遺物(1)



第12表 遺物観察表

番号	種別	部形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)		
第207-1	木製品	直物	-	S E 207	19.5	19.5	1.0	直物	樹皮(曲げ物止め材)
第207-2	木製品	直物	直物	S E 207	19.5	19.5	1.0	直物(木の棒)	直木(木の棒)直木(木の棒)直木(木の棒)
第207-3	木製品	直物	直物	S E 207	19.5	19.5	1.0	直木(木の棒)直木(木の棒)直木(木の棒)	直木(木の棒)直木(木の棒)直木(木の棒)

第23図 S E 207井戸跡・出土遺物(2)



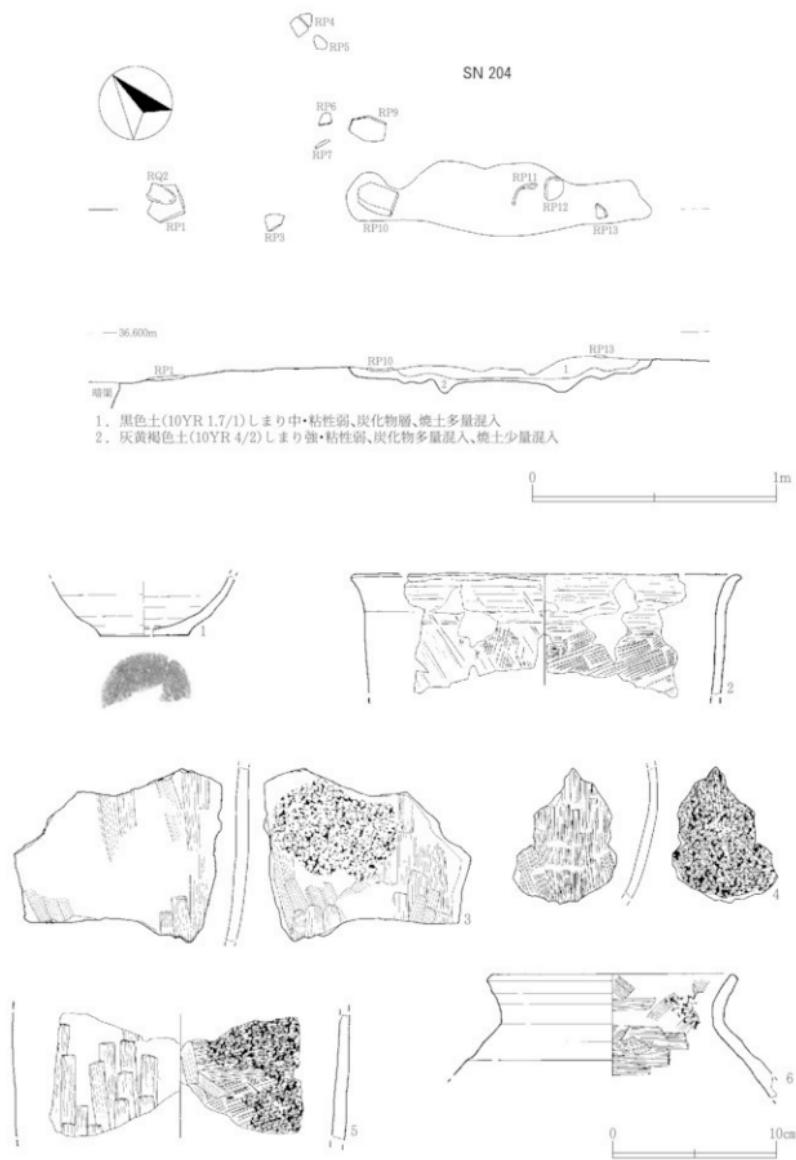
第24表 遺物観察表

番号	種別	部形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他
					CH(m)	幅径(m)	厚高(m)		
第24標1	木製品	板材	—	S E 207	直大板 0.9	最太幅 2.2	最大厚 1.0	舟形木材の一端	
第24標2	木製品	板材	—	S E 207	直大板 0.9	最太幅 2.2	最大厚 1.0	舟形木材の一端	
第24標3	木製品	板材	—	S E 207	直大板 0.8	最太幅 2.1	最大厚 1.0	舟形木材左側部分の一端	
第24標4	木製品	板材	—	S E 207	直大板 0.8	最太幅 2.1	最大厚 1.0	舟形木材右側部分の一端	(分析: 18)
第24標5	木製品	板材	—	S E 207	直大板 0.4	最太幅 3.1	最大厚 2.5	舟形部分の一端	(分析: 17)

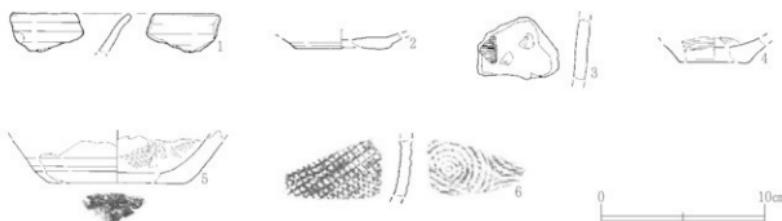
第24図 S E 207井戸跡・出土遺物(3)



第25図 S N03・04・05・06焼土遺構・出土遺物



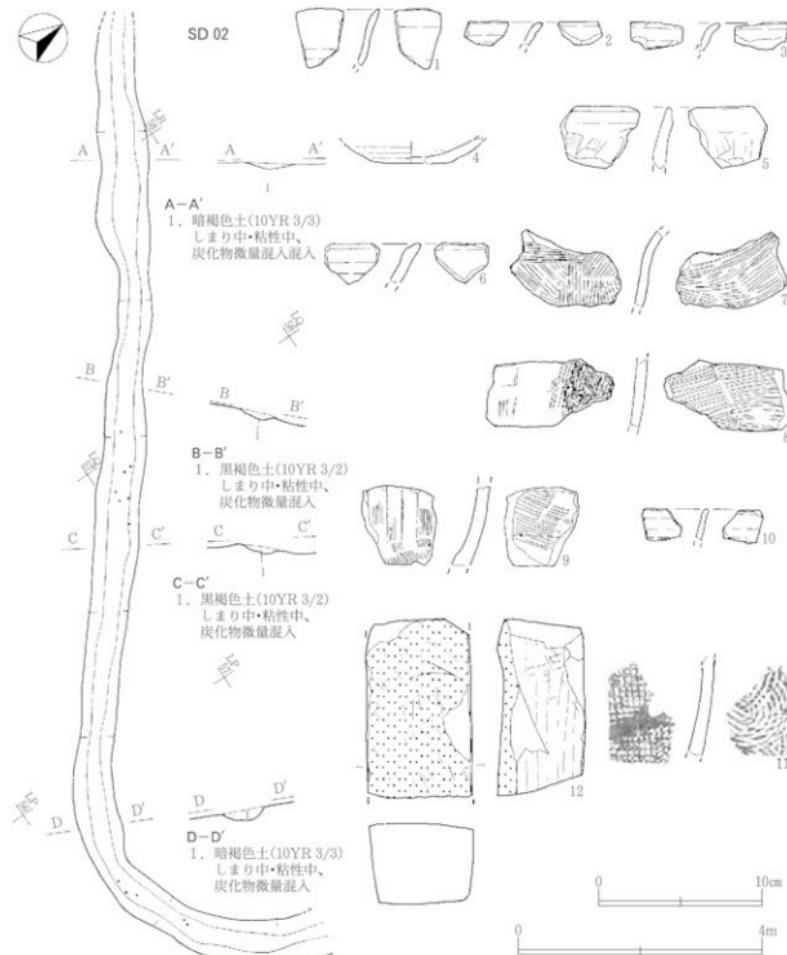
第26図 S N 204焼土遺構・出土遺物



第15表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
第2796.1	土器部	碗	C縫部	SN206 R.P2	-	-	-	ロクロ 内外二層壁に名	
第2796.2	土器部	碗	底部	SN206 R.P2	-	(5.30)	-	ロクロ 内外二層壁に名	
第2796.3	土器部	碗	側壁	SN206 壁土中	-	-	-	ロクロ 外へハク日 内外二層壁	
第2796.4	土器部	碗	底部	SN206 壁土中	-	(4.3)	-	ロクロ 内外二層壁 特別な名	
第2796.5	土器部	碗	底部～側壁	SN206 R.P2	-	(8.4)	-	ロクロ 内外二層壁 特別な名	
第2796.6	陶器部	碗	側壁	SN206 壁土中	-	-	-	ロクロ 外・布日 内・タタキ日	

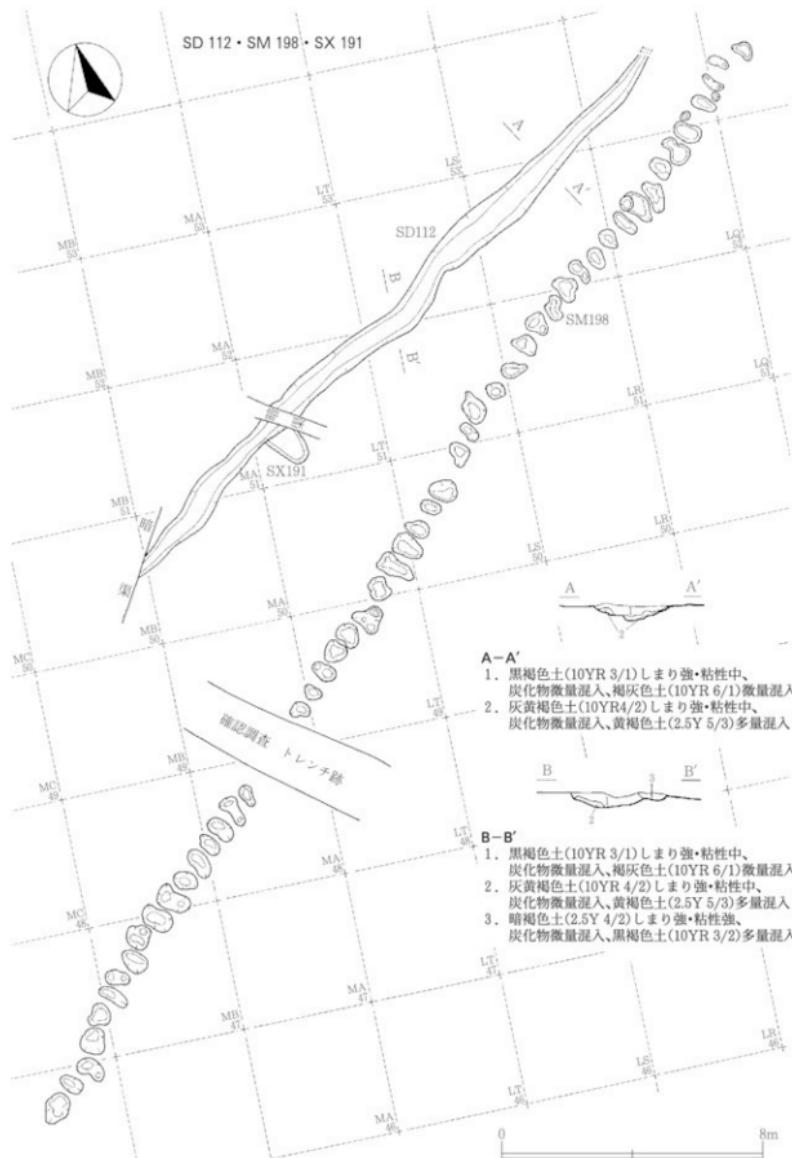
第27図 S N 206焼土遺構・出土遺物



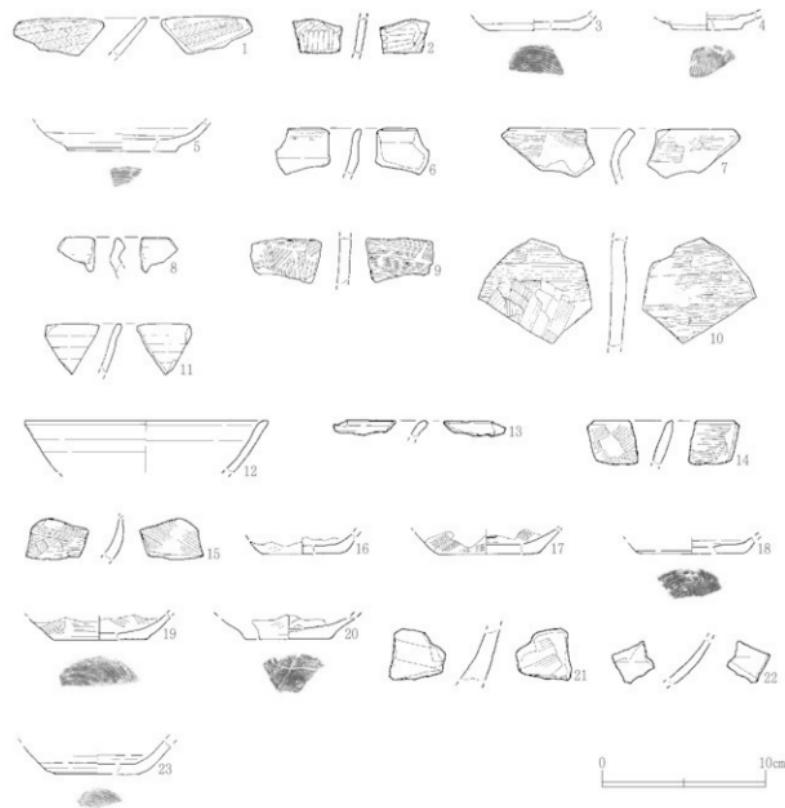
第26表 遺物観察表

番号	種別	器形	位	遺構・層位	寸			特徴	その他の
					幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)		
第2601	土器	口縁部	II	口縁部	S D02			ロクロ	
第2602	土器	口縁部	II	口縁部	S D02			ロクロ 内一本縫がある	
第2603	土器	口縁部	II	口縁部	S D02			ロクロ 口縁外にする	
第2604	土器	底盤	II	底盤	S D02			ロクロ 内外 積重じる (底面無)	
第2605	土器	口縁部	II	口縁部	S D02			ロクロ 内外ハラゲ 重ねじる	
第2606	土器	底盤	II	底盤	S D02			ロクロ 口縁外にする	
第2607	土器	側面	II	側面	S D02			ロクロ 内外ハラゲ (口縁下)	
第2608	土器	側面	II	側面	R P2			ロクロ 内外ハラゲ (口縁上)	
第2609	土器	側面	II	側面	R P2			内側 ハラゲ	
第2610	土器	口縁部	II	口縁部	S D02			ロクロ	
第2611	土器	側面	II	側面	R P2			ロクロ 内・外にタテキ日	
第26012	石製品	磨石	II	磨石	S D02 S 8	前大後小 前大軸 6.6 前大厚 5.4	重さ560g 一面のみ研ぎ面あり	四角	

第28図 S D02溝跡・出土遺物



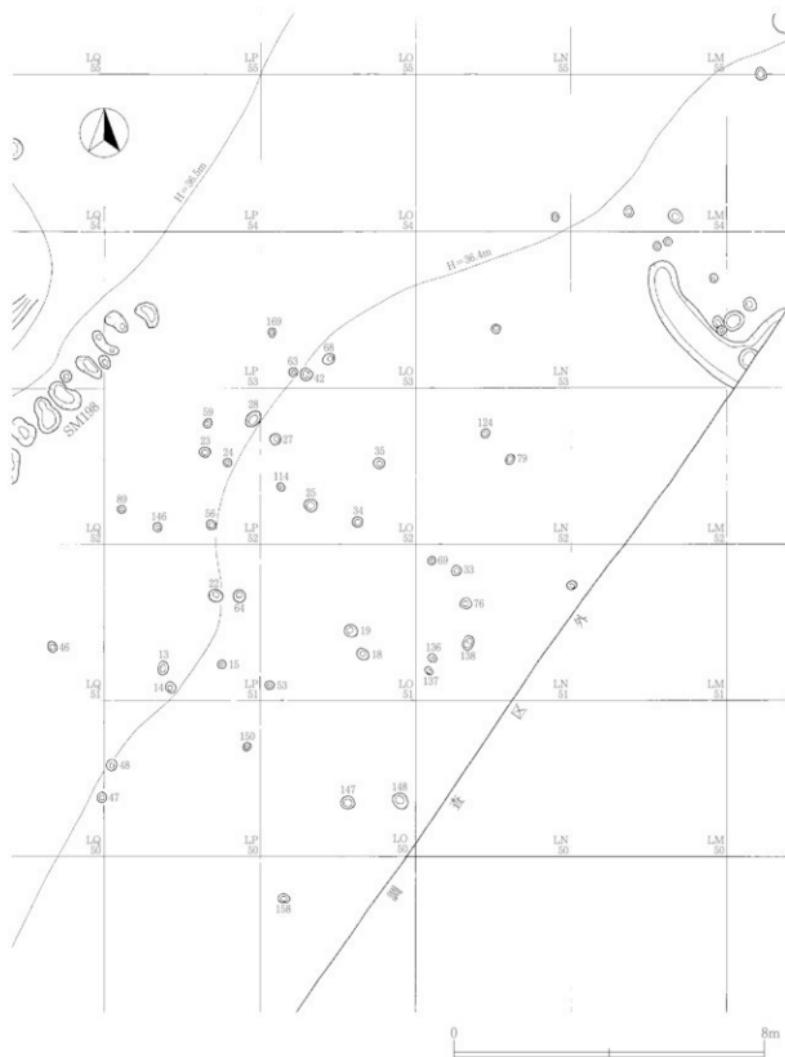
第29図 S D112溝跡・S M198道路状遺構



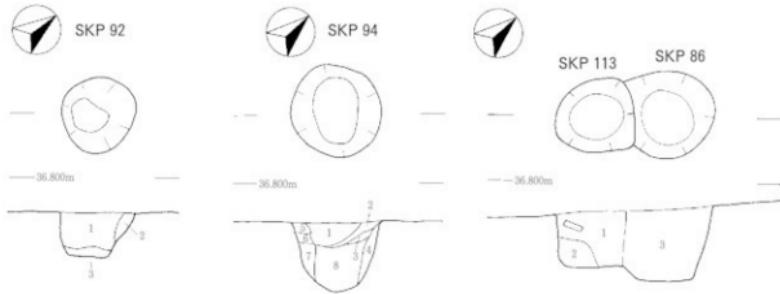
第30表 遺物観察表

番号	種別	部形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他の
					O長(m)	幅長(m)	高さ(m)		
第3001	下限部	块	口縫部	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ	
第3002	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ外:カボ内:ミガキ 内外:黒い	
第3003	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	(0.40)	-	-	ロクロ 回転系切り	
第3004	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	(0.40)	-	-	ロクロ 回転系切り	
第3005	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	(0.7)	-	-	ロクロ 回転系切り	
第3006	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ 口縫下:剥離ふくらむ	
第3007	下限部	块	口縫部	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ 断面に毛	
第3008	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 口縫外反毛	
第3009	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ	
第3010	下限部	块	側面	S D 112, 壁駆1	-	-	-	ロクロ 黒:ヘリテグヘリテグ 内:ヘリテグ 内:紛糾毛	
第3011	山形部	块	口縫部	S D 112,	-	-	-	ロクロ 内:段がある	
第3012	下限部	块	口縫部	S M 198, K 38	(0.48)	-	-	ロクロ	
第3013	下限部	块	口縫部	S M 198, K 36.5	-	-	-	ロクロ	
第3014	下限部	块	側面	S M 198, K 36.8	-	-	-	ロクロ 口縫のみ	
第3015	下限部	块	側面	S M 198, K 41	-	-	-	ロクロ 口縫の下に織入る	
第3016	下限部	块	側面	S M 198, K 21	(0.30)	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ 内:紛糾毛	
第3017	下限部	块	側面	S M 198, 肩土中	(0.05)	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ 回転系切り	
第3018	下限部	块	側面	S M 198, K 13	(0.25)	-	-	ロクロ 回転系切り 内:紛糾毛	
第3019	下限部	块	側面	S M 198, K 28	(0.8)	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ	
第3020	下限部	块	側面	S M 198, K 24	(0.4)	-	-	ロクロ 回転系切り	
第3021	下限部	块	側面	S M 198, K 20	-	-	-	ロクロ 内:ヘリテグ 内:ヘリテグ 外面が黒い	
第3022	下限部	块	側面	S M 198, K 11	-	-	-	ロクロ	
第3023	頂部部	块	側面	S M 198, K 14	(0.1)	-	-	ロクロ 回転系切り	

第30図 S D 112溝跡・S M 198道路状遺構・出土遺物

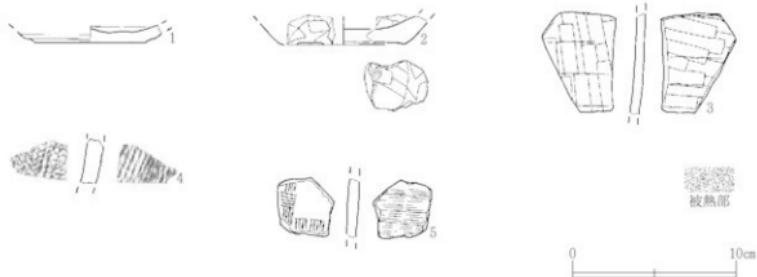


第31図 SKP柱穴様ピット配置図



1. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり中・粘性中
2. にい黄褐色土(10YR 5/3)しまり中・粘性中
3. 褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱
1. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中
2. 黄灰色土(2.5Y 4/1)しまり強・粘性中
3. 灰青褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中
4. 灰褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強
5. 灰灰褐色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性弱
6. 灰青褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強
7. 灰青褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性強
8. 黑褐色土(10YR 3/2)しまり中・粘性中
1. 單灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性強, SKP 113の層
2. 單灰黄色土(2.5Y 4/2)しまり強・粘性強, SKP 113の層
3. 灰青褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中, SKP 86の層

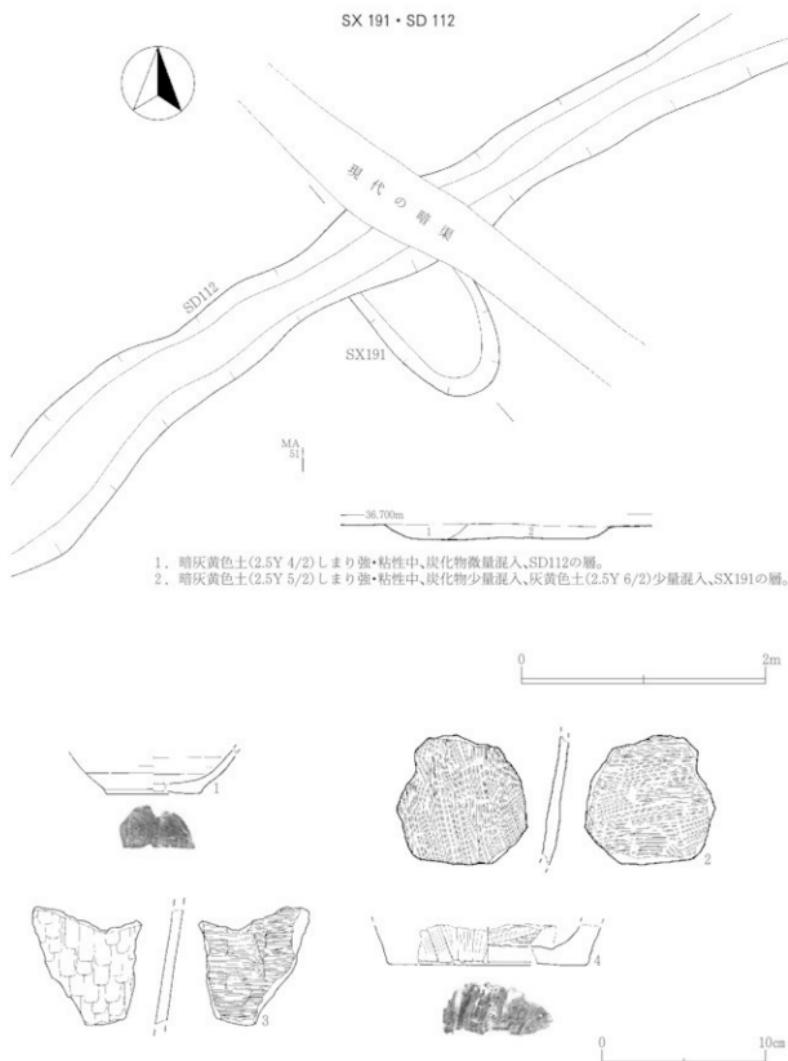
0 1m



第32表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・施位	計 幅(cm)	周長(cm)	高さ(cm)	特 徴	その 他
第3292 1	土器部	盆	側面	SKP92 R.P1	-	(6.8)	-	ロクロ 内二ナメへふ切り 内外二砂粒層にむ	
第3292 2	土器部	盤	側面	SKP92	-	(7.6)	-	ロクロ 内外二ナメテ 横無目有り 砂粒層にむ	
第3292 3	土器部	盤	側面	SKP92 R.P1	-	-	-	ロクロ 内二ケズメ 内二ナメ 内外二砂粒層にむ	容器
第3292 4	土器部	盆	側面	SKP92	-	-	-	ロクロ 外二面目 内二ナメ目	
第3292 5	土器部	盤	側面	SKP92 R.P	-	-	-	ロクロ 内外二砂粒層にむ 外面が黒い	

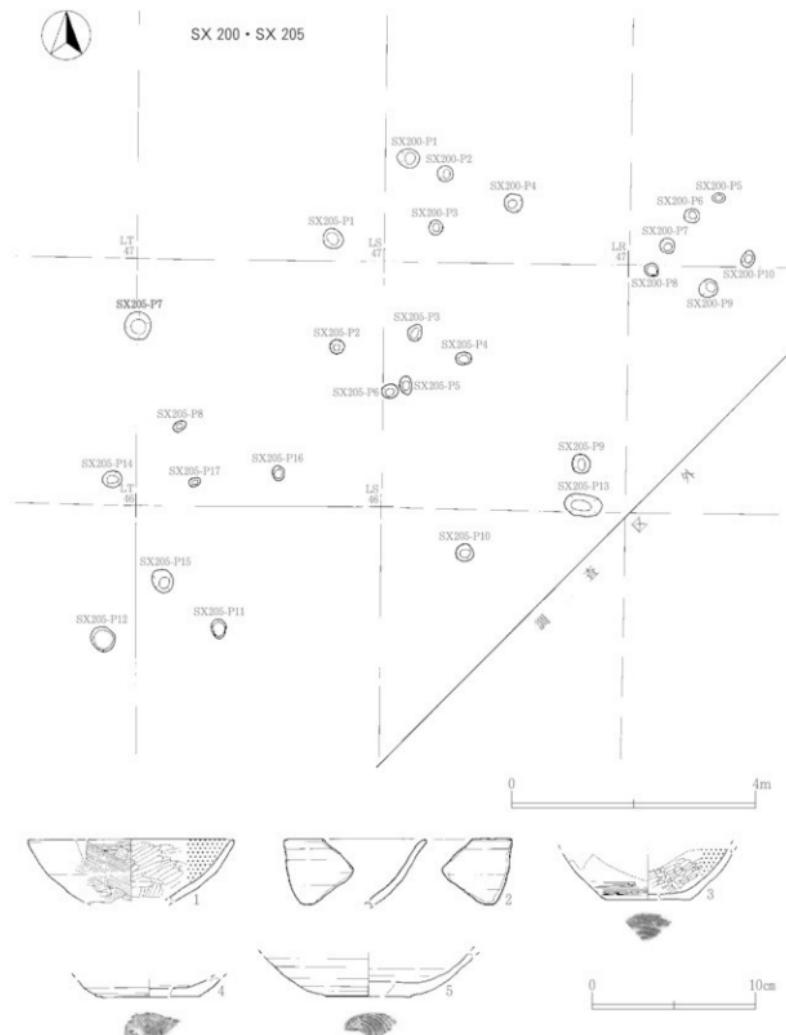
第32図 SKP 86・92・94・113柱穴様ピット・出土遺物



第19表 遺物観察表

番号	種別	形態	部位	遺構・部位	計画図			特徴	その他
					横幅(cm)	縦幅(cm)	高さ(cm)		
第33図1	土陶器	杯	底面	S X191 墓土中	—	—	15.8	ロクロ 内側表面切欠き	
第33図2	土陶器	盤	底面	S X191 墓土中	—	—	—	ロクロ 内外・砂粒混じる	
第33図3	土陶器	盤	底面	S X191 墓土中	—	—	—	ロクロ 内外・砂粒混じる	漆器部
第33図4	土陶器	盤	底面	S X191 墓土中	—	—	13.0	ロクロ 色・内側・外側・マット質・表面に砂・細粒混じる	

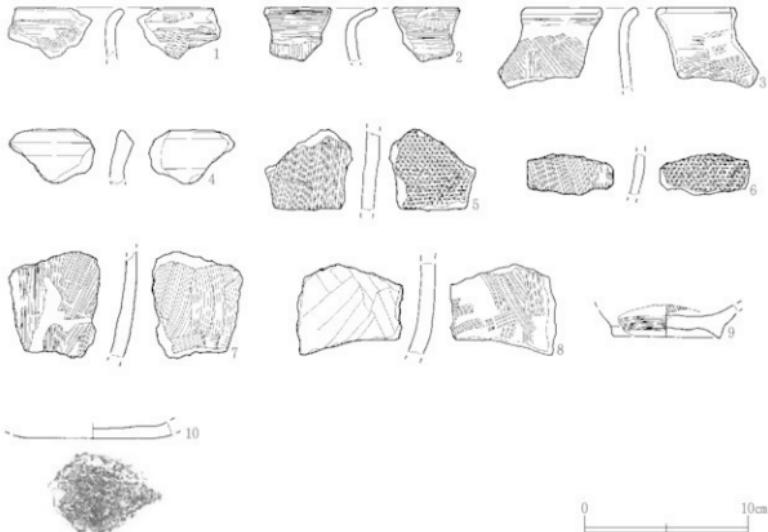
第33図 S X191その他の遺構・出土遺物



第20表 遺物観察表

番号	種別	部形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他の
					口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
M0404 1	土器部	盤	口縁部	S X200 縫合直縫	(12.6)	-	-	ロクロ 内:ナガ 内:ミガタ 内:黒色処理	
M0404 2	土器部	盤	口縁部	S X200	-	-	-	ロクロ	
M0404 3	土器部	盤	底部	S X200 直縫	-	0.30	-	ロクロ 内:ナガ 内:ミガタ 内:黒色処理 口縫直縫	
M0404 4	土器部	盤	底部	S X200	-	0.40	-	ロクロ 口縫直縫	
M0404 5	土器部	盤	底部	S X200	-	0.10	-	ロクロ 口縫直縫	

第34図 S X200・205その他の遺構・出土遺物(1)



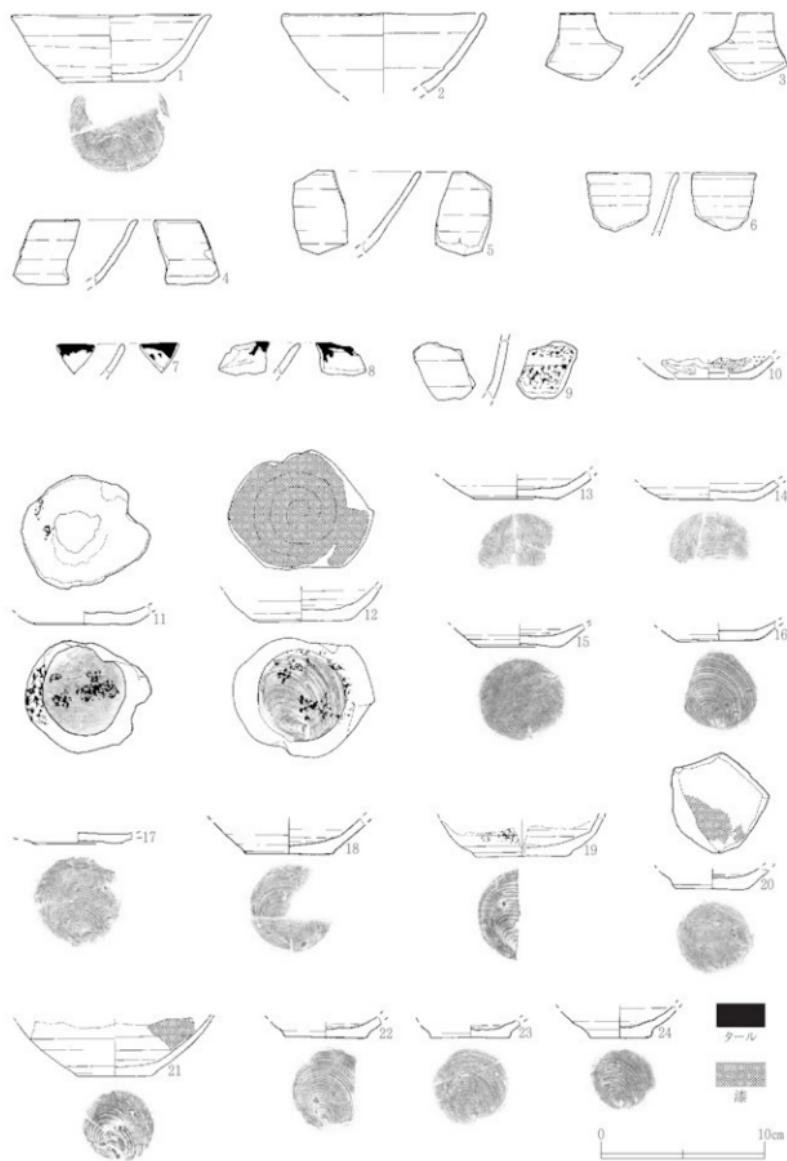
第21表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
第30301	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ 内:ナメラハタ 内:ハサカ 外反する	
第30302	下限器	縦	口縫部	S X200 P15	-	-	-	ロクロ 内:ハサカ→チテ 外反する	
第30303	下限器	縦	口縫部	S X200 P5	-	-	-	ロクロ 内:ハサカ 外反する	
第30304	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ 外反する	
第30305	下限器	縦	側縫	S X200 P16	-	-	-	ロクロ 黒:ハサカ 内:ハサカ→内側凹面 破損なし	
第30306	下限器	縦	側縫	S X200	-	-	-	ロクロ 黒:ハサカ 内:ハサカ→内側凹面 破損なし	
第30307	下限器	縦	側縫	S X200	-	-	-	ロクロ 黒:ハサカ 内:ハサカ→内側凹面 破損なし	
第30308	下限器	縦	側縫	S X200	-	-	-	ロクロ 黒:ハサカ 内:ハサカ→内側凹面 破損なし	
第30309	下限器	縦	側縫	S X200 東側	-	-	-	ロクロ 内:ナメラハタ 内:ハサカ 外反する	
第30310	田端器	縦	底縫	S X200 P15	-	6.7	-	ロクロ 内:ナメラハタ 内:ハサカ 外反する	
					-	8.2	-	砂岩土器 蝋面砂質	

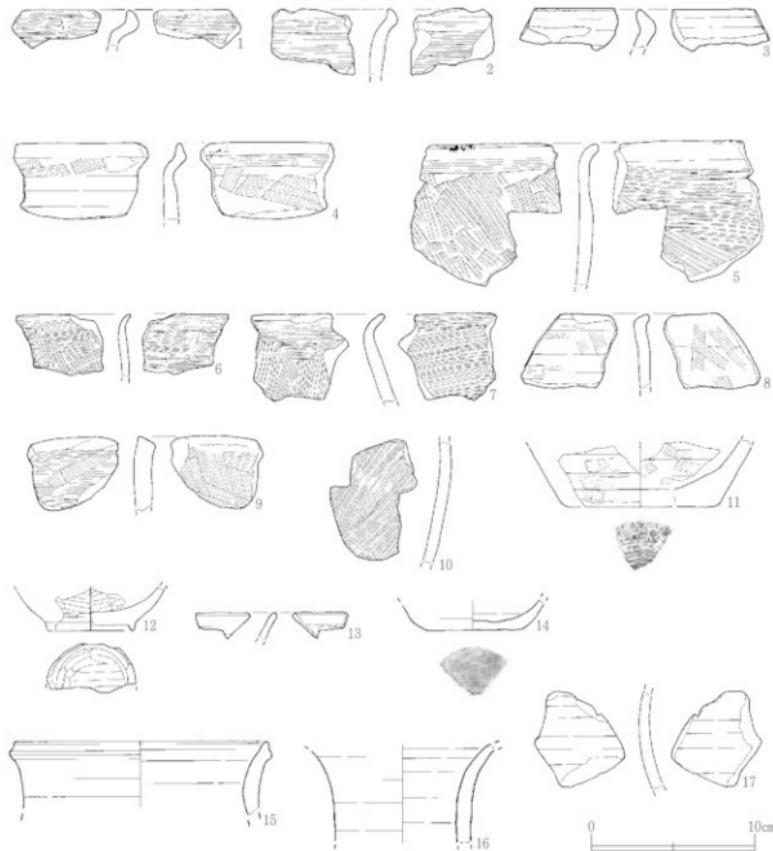
第22表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
第30301	下限器	縦	底縫定期	S X200 R.P4-L.T.6底縫	-	6.3	-	ロクロ 回転あ切り	赤褐色
第30302	下限器	縦	口縫部	S X200	(11.5)	-	-	ロクロ	
第30303	下限器	縦	口縫部	S X200 P31	-	-	-	ロクロ	
第30304	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ	
第30305	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ	
第30306	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ 内面に凹溝	
第30307	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ 口縫部ナメラハタ付箇所	
第30308	下限器	縦	口縫部	S X200	-	-	-	ロクロ 口縫部ナメラハタ付箇所	
第30309	下限器	縦	側縫	S X200	-	-	-	ロクロ 内面に砂粒混じる 内面に炭化物付着	
第30310	下限器	縦	側縫	S X200	9.8	-	-	ロクロ 内面に凹溝 内面に炭化物付着	
第30311	下限器	縦	底縫	S X200	5.8	-	-	ロクロ 内面:ナメラハタ 内面に炭化物付着	
第30312	下限器	縦	底縫	S X200 R.P2	5.3	-	-	ロクロ 内面に縫合部 有り	漆器類
第30313	下限器	縦	底縫	S X200	5.2	-	-	ロクロ 内面:ナメラハタ	
第30314	下限器	縦	底縫	S X200	5.20	-	-	ロクロ 回転あ切り	
第30315	下限器	縦	底縫	S X200	5.1	-	-	ロクロ 回転あ切り 破滅らしい	
第30316	下限器	縦	底縫	S X200	4.9	-	-	ロクロ 回転あ切り	
第30317	下限器	縦	底縫	S X200 R.P	5.2	-	-	ロクロ 回転あ切り	
第30318	下限器	縦	底縫	S X200	5.2	-	-	ロクロ 回転あ切り	
第30319	下限器	縦	底縫	S X200 P13	(5.0)	-	-	ロクロ 回転あ切り 外面に炭化物付着	
第30320	下限器	縦	底縫	S X200	4.2	-	-	ロクロ 回転あ切り 内面に縫合部	
第30321	下限器	縦	底縫	S X200	4.4	-	-	ロクロ 回転あ切り 内:縫合部	
第30322	下限器	縦	底縫	S X200	5.0	-	-	ロクロ 回転あ切り	
第30323	下限器	縦	底縫	S X200	4.8	-	-	ロクロ 回転あ切り	
第30324	下限器	縦	底縫	S X200	-	3.8	-	ロクロ 回転あ切り	

第35図 S X200その他の遺構・出土遺物(2)



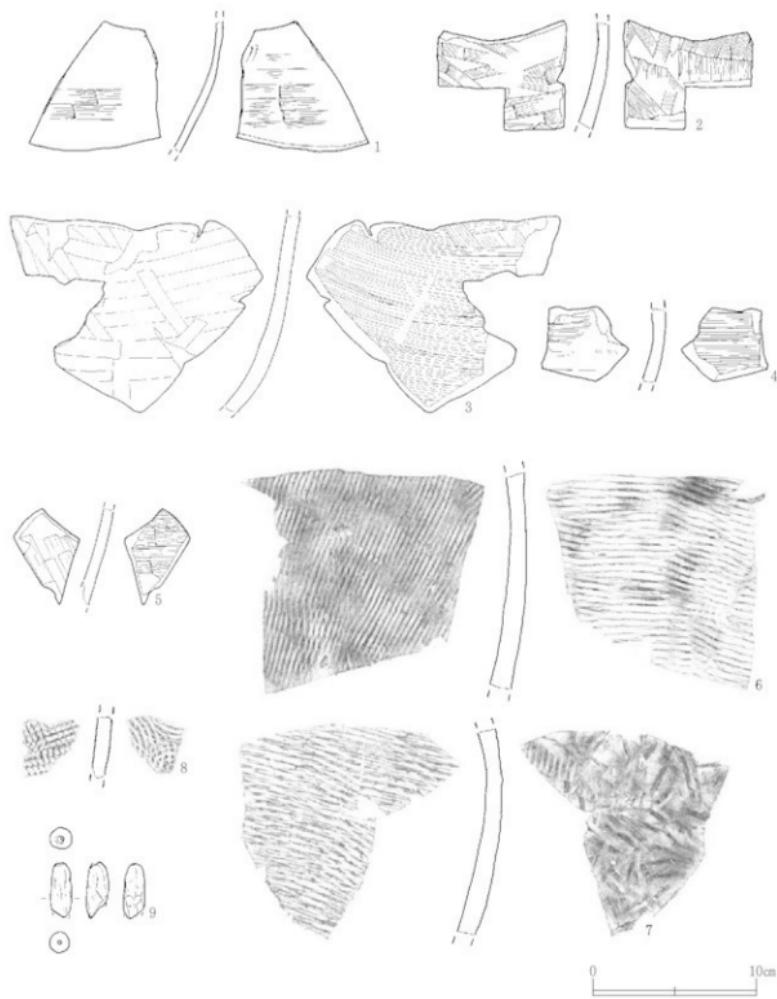
第36図 S X205その他の遺構・出土遺物(3)



第37表 遺物観察表

番号	種別	面形	部位	遺構・部位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
第37901	上顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: 研削面による	
第37902	上顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: ナメル、研削だけ	
第37903	上顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: 研削による	
第37904	上顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: 物理的・内内: ハラド、研削面による	
第37905	下顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: ハラド、研削面による	
第37906	下顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: ナメルハラド、内: ハラド	
第37907	下顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: ナメル、内: ナメル	
第37908	下顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: ナメル、研削面による、微減衰する	口縫直下
第37909	下顎器	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: 研削面による	
第37910	下顎器	側	頭端	S X205	-	-	-	ロクロ 内外: 第一矢状孔、内外: 研削面による	
第37911	下顎器	側	頭端	S X205	(9.25)	-	-	ロクロ 内外: ナメル、内: 研削面による	
第37912	下顎器	台形面	底部	S X205	(9.25)	-	-	ロクロ 内外: ナメル、底面	台形欠損
第37913	頭部	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ	
第37914	頭部	側	口縫部	S X205	-	5.6	-	ロクロ 口縫面切り	
第37915	頭部	側	口縫部	S X205	(15.5)	-	-	ロクロ 口縫外反	
第37916	頭部	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ 口縫直下	
第37917	頭部	側	口縫部	S X205	-	-	-	ロクロ	

第37図 S X205その他の遺構・出土遺物(4)



第24表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・部位	計測面積			特徴	その他
					口徑(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第38051	田赤器	縦縞	側面	S X 205	-	-	-	ロクロ 内面:タテ 織い	
第38052	田赤器	縦縞	側面	S X 205	-	-	-	ロクロ 内面:タテ 織い	
第38053	田赤器	縦縞	側面	S X 205 R P 逆縞	-	-	-	ロクロ 内:ヘタナギ 内外:砂粒混じる 外面に付着物	
第38054	田赤器	縦縞	側面	S X 205	-	-	-	ロクロ	
第38055	田赤器	縦縞	側面	S X 205	-	-	-	ロクロ 外:タテミリ 内:タテ 織い	
第38056	田赤器	縦縞	側面	S X 205 R P 1	-	-	-	ロクロ 内面:タテキリ 外縛	
第38057	田赤器	縦縞	側面	S X 205 R P	-	-	-	ロクロ 内面:タテキリ	
第38058	田赤器	縦縞	側面	S X 205	-	-	-	ロクロ 外:布目 内:タテキリ	
第38059	土製品	土器	S X 205	最大径 3.5 最大幅 1.8 最大厚 1.4 重さ 4.0 g 経過穴開通 片側欠損 破片混じる					

第38図 S X 205その他の遺構・出土遺物(5)

第3節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文時代、古代（平安時代）、中世（鎌倉～安土桃山時代）、近世（江戸時代）以降の4つに大別される。これらの遺物の8割以上は、平安時代に比定される時期のものであり、検出遺構の内部から出土した遺物の時期と合致する。この遺構外出土遺物を第39～53図に掲載した。第39図は縄文時代の遺物、第40～50図は平安時代の遺物、第51図は中世（鎌倉時代～室町時代）の遺物、第51～52図は近世（江戸時代）の遺物である。第53図には銭貨・鉄製品・木製品を掲載したが、これ以外に小鳥田I遺跡のほぼ北側に隣接する下道満遺跡の遺物が表採されたため、一部これも掲載した。以下、遺構外出土遺物について略述する。

第1群は、縄文時代の遺構外出土遺物である。

第39図1～5は縄文時代の土器と石器である。土器1点、石器3点、石製品1点を図示した。1は斜縫文が施された深鉢形土器の底部破片である。2はスクレイバーで一部欠損している。3は黒曜石の剥片である。原石面が一部残っており、石器加工の際に不要となった部分か。4は剥片であるが、外面に磨痕があり、礫石器の一部が欠けたものか。5は独鉛石で、両方の先端に使用痕と思われる欠損がある。中央には浅い凹みがあるものの、凹みは一周せず平坦な面を裏側に残す。

第2群は、古代（平安時代）の遺構外出土遺物である。その中の第1類を土師器、第2類を須恵器とした。

第40図1～16は土師器壺、第41図1～12および第42図1～14は土師器甕、第43図1～3は土師器壠、第43図4は土師器鍋である。

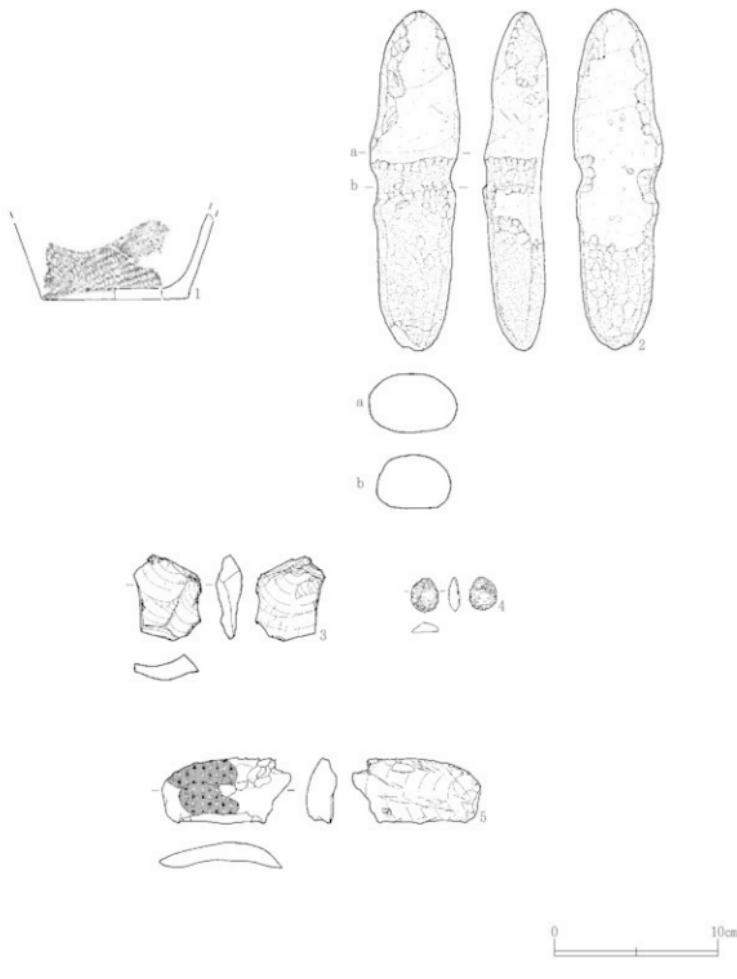
第44図1～8は須恵器壺、第44図9は須恵器壠、第44図10は須恵器鉢、第45図1～5・9、第46～47図、第48図1～4、第49図2・4～5は須恵器甕、第45図7は須恵器蓋、第45図6・8・10および第48図5～7、第49図1は須恵器壺である。

第50図1～2は灰釉陶器、3～4は綠釉陶器である。これらについては愛知県立陶磁資料館の井上喜久夫氏の教示を得た。灰釉陶器は2点とも長頸瓶の破片で、猿投窯産（K-90号窯式）9世紀後半の時期である。綠釉陶器は2点とも甕の破片で、近江窯産の10世紀前半の時期である。なお、綠釉陶器は近江窯産の最古式の深甕で、近江窯産綠釉陶器としては小鳥田I遺跡が最北の出土地となる。

第50図5は土製紡錘車、6は石製紡錘車である。石製紡錘車は外縁の一部に欠損があり、側面に線刻が施されている。このような紡錘車に線刻を施した事例は少ない。7は石帶である。裏面に紐通しの穴が6か所あり、3本の紐で固定できるようになっている。8は炭化物が付着した凹石で、古代の時期と判断した。9は砥石である。

第3群は中世・近世およびその他の遺物である。

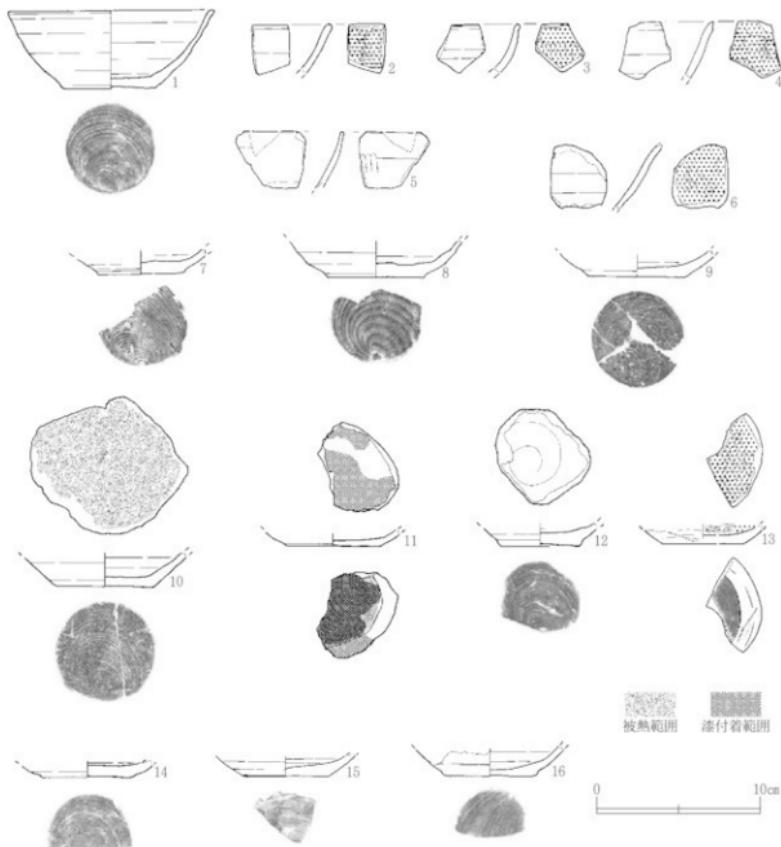
第51図1は中世陶器の擂鉢で、時期は14世紀前半と思われる。小鳥田I遺跡の中世遺物はこの1点のみである。第51図2～16、第52図1～11は近世陶磁器である。第53図1～15は近世の土器以外の遺物である。第53図1は近世の土製品、2～4は出土銭貨、6～13は鉄製品のキセル、14は木製品の椀、15は下駄である。第53図16～18は下道満遺跡の表採遺物で、16が浅鉢の縄文土器、17が凹石兼敲石、18は近世陶磁器である。



第39表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	デリット+位場	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)		
第3901	鍬又工具	深鉗	底面	L.P314-L.S30工具				直形	
第3902	石器	石刀	刃部	L.P30工具	最大長3.7 最大幅1.3 最大厚0.5	直形か靴形 中央にくびれあり	0.77g		
第3903	石器	石刀	刃部	L.P30工具	最大長2.5 最大幅1.1 最大厚0.5	スクレーパー	24.5g		
第3904	石器	石刀	刃部	L.S31工具	最大長4.0 最大幅1.6 最大厚0.8	直彎刃 直刃曲柄型	刀頭剥離あり 2.13g		
第3905	石器	縫石器			最大長4.0 最大幅1.6 最大厚1.6		43.0g		

第39図 遺構外出土遺物(1)



第40表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	デリック・位場	計測値			特徴	その他
					G径(cm)	横径(cm)	厚さ(cm)		
第4001	土器器	碗	底	山ほ先期 L.M50 R.P. 直腹	12.2	5.5	4.8	ロクロ 山ほ先期 内：ヒガキ→黒色処理	
第4002	土器器	碗	底	山ほ先期 L.R50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 内：ヒガキ→黒色処理	内面黒色処理
第4003	土器器	碗	底	山ほ先期 L.T50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 内：ヒガキ→黒色処理	内面黒色処理
第4004	土器器	碗	底	山ほ先期 L.S50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 内：ヒガキ→黒色処理	内面黒色処理
第4005	土器器	碗	底	山ほ先期 L.S50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 外二つ目回転線 内：ヒガキ→黒色処理	内面黒色処理 砂粒混じる
第4006	土器器	碗	底	山ほ先期 L.N50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 内：ヒガキ→黒色処理	内面黒色処理
第4007	土器器	碗	底	山ほ先期 L.T50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 山ほ先期	
第4008	土器器	碗	底	山ほ先期 L.T50 R.P. 直腹 R.P.	5.2	-	-	ロクロ 山ほ先期	
第4009	土器器	碗	底	山ほ先期 L.R50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 山ほ先期	
第4010	土器器	碗	底	山ほ先期 L.T50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 山ほ先期	時代に遡るがある
第4011	土器器	碗	底	山ほ先期 L.M50 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 山ほ先期	時代に遡る
第4012	土器器	碗	底	山ほ先期 L.Q49 R.P. 直腹	-	-	-	ロクロ 山ほ先期	新らしい
第4013	土器器	碗	底	山ほ先期 L.N54 R.P. 直腹	-	5.0	-	ロクロ 山ほ先期	時代に遡る 有光沢
第4014	土器器	碗	底	山ほ先期 M.A50 R.P. 直腹	-	5.0	-	ロクロ 内：ヒガキ→黒色 出火好 10cm	時代に遡る 有光沢
第4015	土器器	碗	底	山ほ先期 L.O50 R.P. 直腹	-	5.2	-	ロクロ 山ほ先期	10cm
第4016	土器器	碗	底	山ほ先期 L.M50 R.P. 直腹	-	5.8	-	ロクロ 山ほ先期	時代に遡る 有光沢

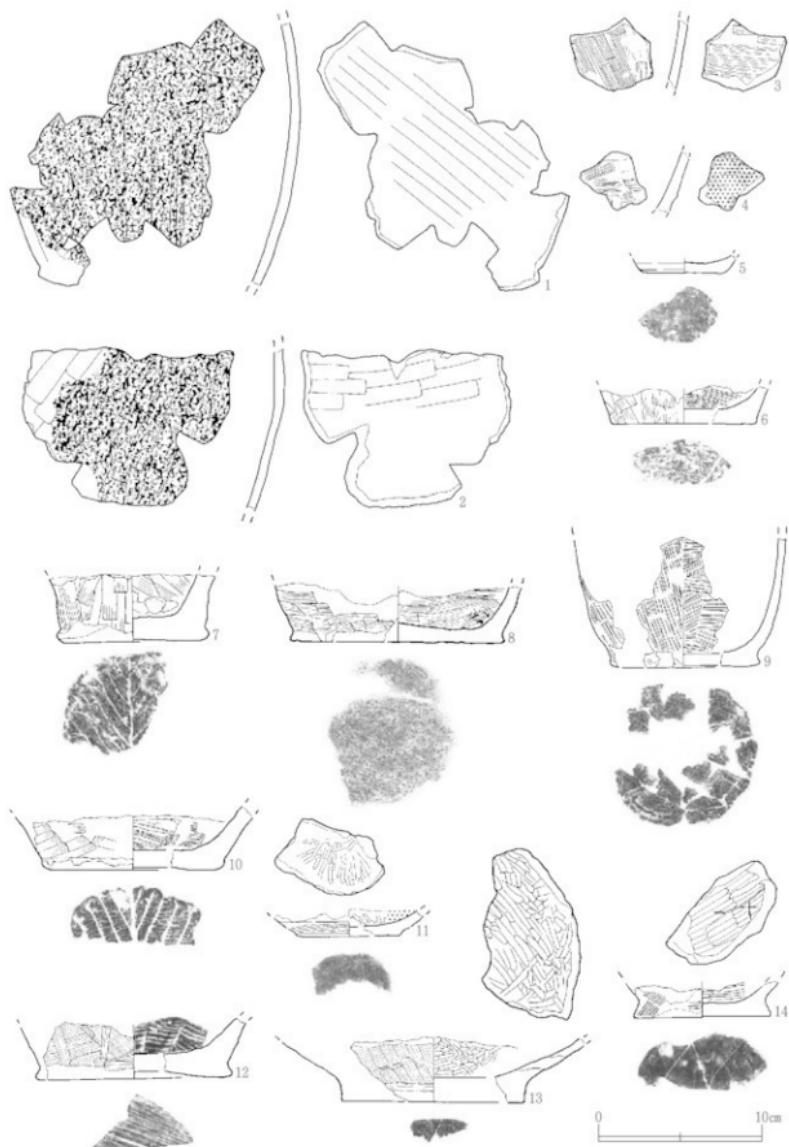
第40図 遺構外出土遺物(2)



第27表 遺物観察表

番号	種別	形態	部位	アリット・住地	計測 値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
M41房1	土器部	縦	LW4-5-54	L.M41-54 直筒	(18.8)	-	30.1	ロクロ 内: ロックチャットアズリ 内: ナメ 無垢に使用 砂利混じる	
M41房2	土器部	縦	LQ55	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ナメ	
M41房3	土器部	縦	LQ56	M.A41直筒	-	-	-	ロクロ 内: ナメ	口被欠損 砂利多量混じる
M41房4	土器部	縦	LQ57	口被直筒 E-3 レンガ	-	-	-	ロクロ 内: ナメ	砂利多量混じる
M41房5	土器部	縦	LQ58	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ナメ	砂利多量混じる
M41房6	土器部	縦	LQ59	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ナメ	砂利多量混じる
M41房7	土器部	縦	LQ60	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ハカド 内: ナメ	砂利多量混じる
M41房8	土器部	縦	LQ61	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ハカド 内: ナメ	砂利多量混じる
M41房9	土器部	縦	LQ62	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ハカド 内: ナメ	砂利多量混じる
M41房10	土器部	縦	L.M53	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ナメ	内反する 砂利混じる
M41房11	土器部	縦	L.T57	直筒	-	-	-	ロクロ 内: ナメ 内: ハカ	砂利混じる
M41房12	土器部	縦	L.Q58	直筒	-	-	-	ロクロ 内: 混合物付着	外反する

第41図 遺構外出土遺物(3)



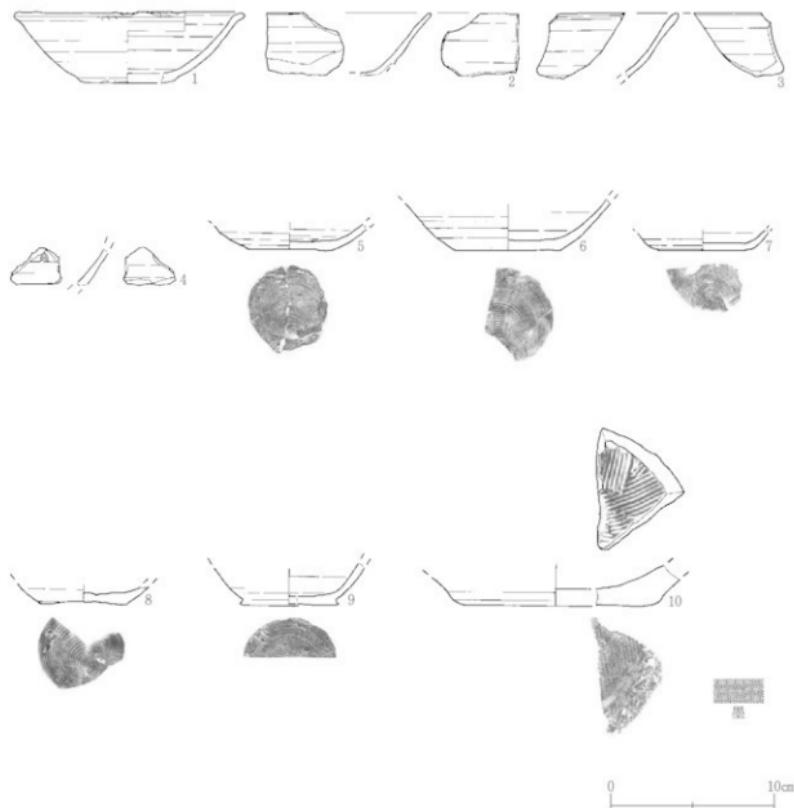
第42図 遺構外出土遺物(4)



第43表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	アリット・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
MR4301	土師器	縦	側面	L.M53+54 直筒	-	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 外面に炭化物多量付着	砂質層じる
MR4302	土師器	縦	側面	L.M53 B 縦 R.P3+5	-	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 外面に炭化物多量付着	砂質層じる
MR4303	土師器	縦	側面	L.T53B 縦	-	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 外面に炭化物多量付着	砂質層じる
MR4304	土師器	縦	側面	L.T53A 縦	-	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 外面に炭化物多量付着	砂質層じる
MR4305	土師器	縦	側面	L.T53A 直筒	-	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 外面に炭化物多量付着	砂質層じる
MR4306	土師器	縦	側面	M.F53 直筒	4.9	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 外面に炭化物多量付着	砂質層じる 地色土面
MR4307	土師器	縦	底面	断面図2 36.6cm 高:35cm 厚:10cm	9.0	-	-	ロクロ 地面	砂質層じる
MR4308	土師器	縦	底面	M.B53 直筒	11.8	-	-	ロクロ 内面に炭化物付着 回転あたり 砂質土面	砂質層じる
MR4309	土師器	縦	底面	M.B41 直筒	9.0	-	-	ロクロ 内:カズミ 底面へ凹部	砂質層じる
MR4310	土師器	縦	底面	M.B33 直筒 M.E45直筒	(20.0)	-	-	ロクロ 内:カズミ・輪縁小破 内:カズメ 葉網状	砂質層じる
MR43011	土師器	縦	底面	L.N54直筒	8.4	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ→泥色処理	砂質層じる
MR43012	土師器	縦	底面	L.N54直筒	9.5	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ→泥色処理 (内:ハケナガ)	砂質層じる
MR43013	土師器	縦	底面	L.L54 直筒	11.1	-	-	ロクロ 内:カズミ 内:ハケナガ 葉網状・砂質土面	砂質層じる
MR43014	土師器	縦	底面	L.N55 直筒	9.0	-	-	ロクロ 内:ハケナガ 内:ミガキ→泥色処理	内面に剥離
MR43015	土師器	縦	底面	L.L54+55直筒	-	-	-	ロクロ 内:カズメ 内:ミガキ→泥色処理	内面泥色処理
MR43016	土師器	縦	底面	L.L54B 縦	-	-	-	ロクロ 内:ミガキ→泥色処理	内面泥色処理
MR43017	土師器	縦	底面	L.R47B 縦	-	-	-	ロクロ 内:ミガキ 内:ハケナガ	
MR43018	土師器	縦	底面	L.Q49B 縦	-	-	-	ロクロ 内:ミガキ	

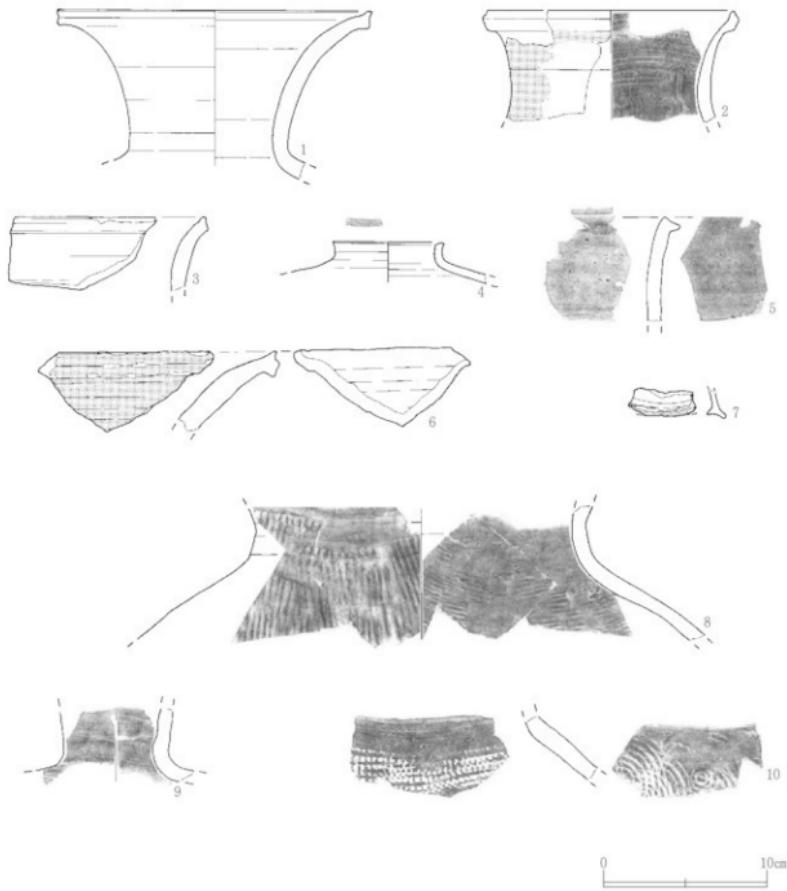
第43図 遺構外出土遺物(5)



第29表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	ドリッパ・位地	寸 厘 毫			特徴	その他の
					(D)径(cm)	(W)幅(cm)	(H)高(cm)		
第44081	直鉢形	碗	辺縁部	壁土中	13.3	5.2	4.4	ロクロ 口輪み切	口縁に複数の打ち穴孔
第44082	直鉢形		口縁部	L.T.6Ⅱ層	-	-	-	ロクロ 外面丸擦	
第44083	直鉢形		口縁部	船橋G.3Ⅰ層	-	-	-	ロクロ	
第44084	直鉢形		底盤	L.N.54Ⅱ層	-	-	-	ロクロ 表面あり	
第44085	直鉢形		底盤	L.Q.47Ⅱ層 R.P.	-	3.0	-	ロクロ 口輪み切	
第44086	直鉢形		底盤	L.Q.53Ⅱ層	-	4.4	-	ロクロ 口輪み切	
第44087	直鉢形		底盤	L.T.6Ⅱ層	-	6.0	-	ロクロ 口輪み切	
第44088	直鉢形		底盤	L.N.32Ⅱ層 L.MS.3Ⅱ層	-	5.3	-	ロクロ 口輪み切	
第44089	直鉢形		底盤	L.T.53Ⅱ層	-	6.0	-	ロクロ 口輪み切	台状
第44090	直鉢形	底盤	底盤	M.G.45Ⅱ層	(12.8)	-	-	ロクロ 底面に凹凸模様あり	

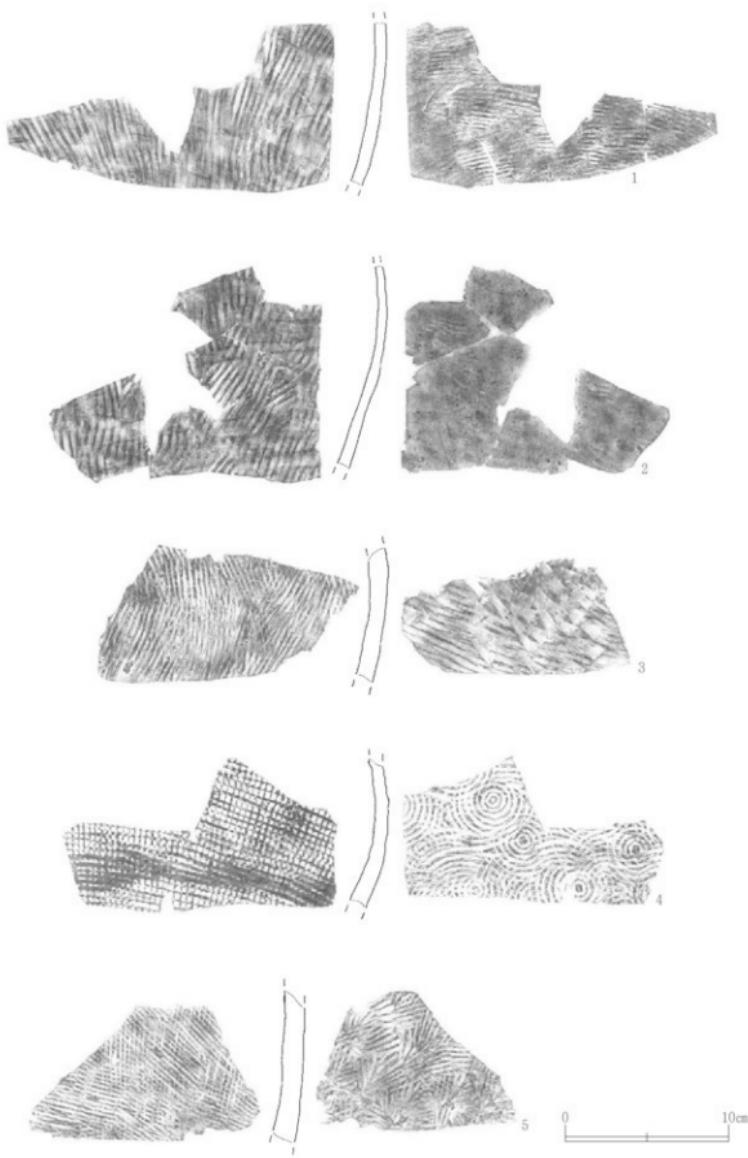
第44図 遺構外出土遺物(6)



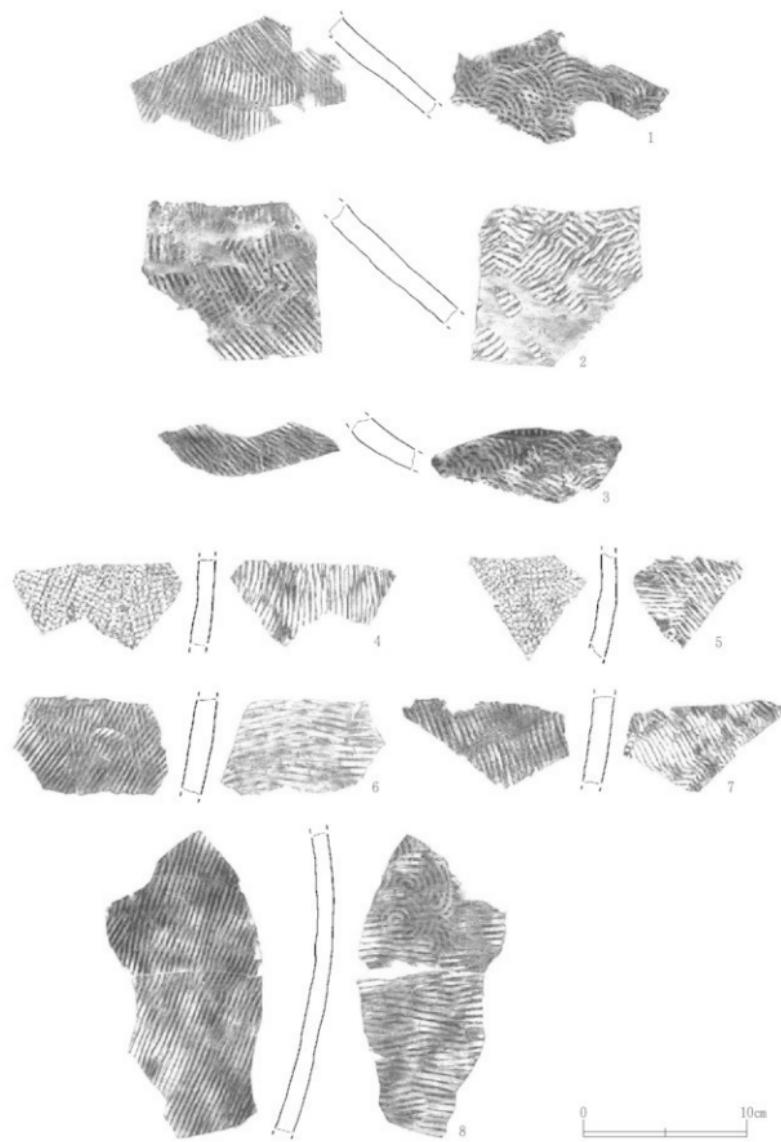
第30表 遺物観察表

番号	種別	部形	部位	アリット・位相	計画図			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
第45例1	瓦器類	盤	口縁部	32.0-37.0-37.0-38.0-38.0-38.0-38.0	(35.4)	-	-	ロクヨウ 大型盤	
第45例2	瓦器類	盤	口縁部	MD-63.0	-	-	-	ロクヨウ 内:施釉	
第45例3	瓦器類	盤	L.S.60.0	網	-	-	-	ロクヨウ	谷筋面に沿
第45例4	瓦器類	短鉢	口縁部	LT-69.0 網MC-44.0	-	-	-	ロクヨウ	
第45例5	瓦器類	盤	口縁部	MD-47.0	-	-	-	ロクヨウ	強引出し
第45例6	瓦器類	大盤	口縁部	LT-74.0	-	-	-	ロクヨウ 口縁部に施釉	口縫に縁の強引出し
第45例7	瓦器類	盤	口縁部	LO-60.0	-	-	-	ロクヨウ	強引出し
第45例8	瓦器類	大盤	腹	LO-100.0 網MC-44.0	(39.4)	-	-	ロクヨウ 内:タタキ目	
第45例9	瓦器類	盤	口縁部	MD-11.0 網MC-47.0	-	-	-	ロクヨウ 東濃腰帶あり	
第45例10	瓦器類	盤	網底	LP-10.0 P2	-	-	-	ロクヨウ 内:タタキ目	

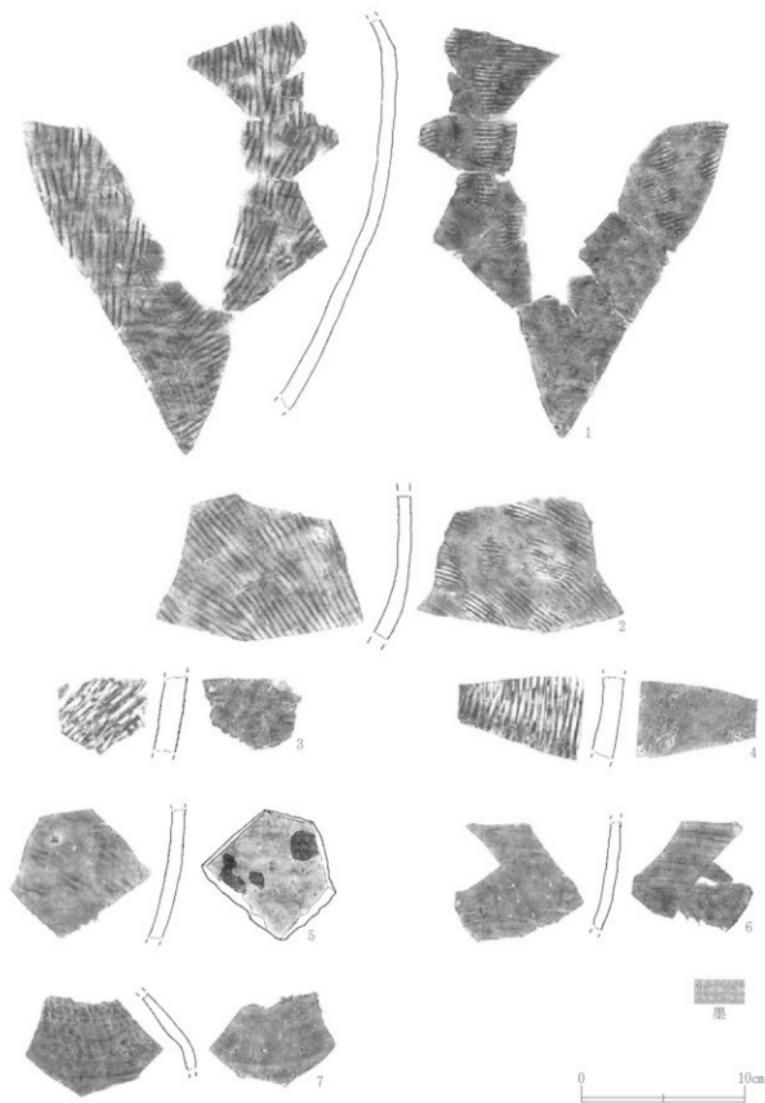
第45図 遺構外出土遺物(7)



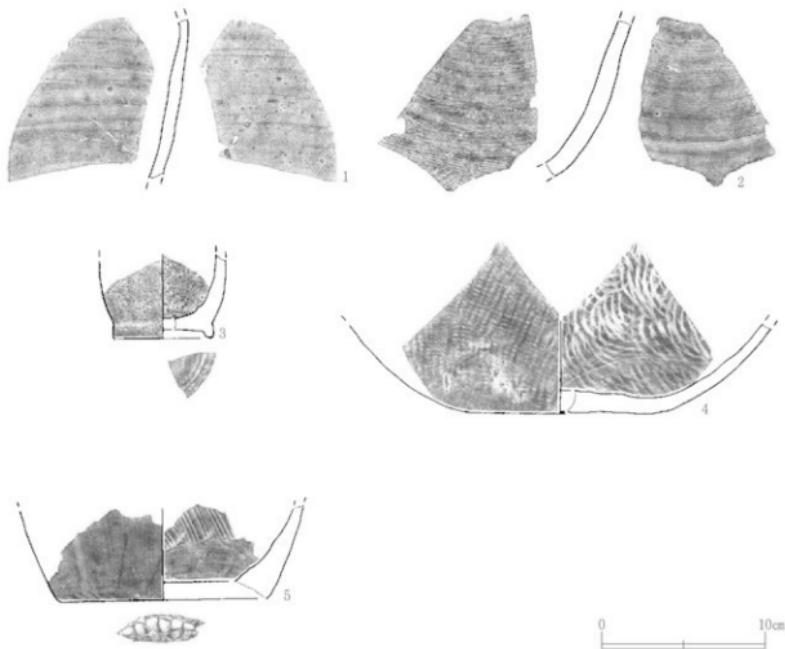
第46図 遺構外出土遺物(8)



第47図 遺構外出土遺物(9)



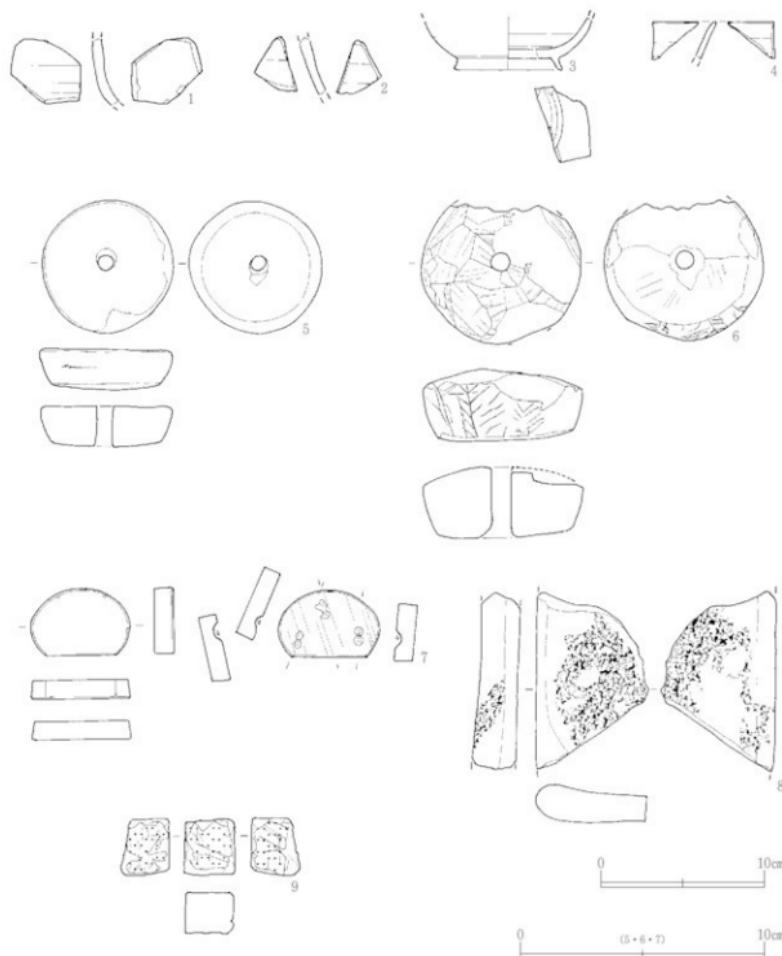
第48図 遺構外出土遺物(10)



第31表 遺物観察表

番号	種別	部類	部位	ダリゲット・地緒	計測面積			特徴	その他
					横径(cm)	縦径(cm)	厚さ(cm)		
第4801	田原器	壺	側面	MC48-1 田原壺MC48-2 田原壺	-	-	-	ロクロ 内: タテキ目	
第4802	田原器	壺	側面	MC48-3 田原壺	-	-	-	ロクロ 内: タテキ目 内面に炭化物付着	
第4803	田原器	壺	側面	L.S.45壺	-	-	-	ロクロ 内: タテキ目	
第4804	田原器	壺	側面	M.E.46壺M.B.43壺	-	-	-	ロクロ 外: 布目 内: タテキ目	
第4805	田原器	壺	側面	船底G.23レンガIV壺	-	-	-	ロクロ 内面: タテキ目	布面の跡あり
第4791	田原器	壺	側面	L.Q.49壺	-	-	-	ロクロ 内面: タテキ目	開口直下
第4792	田原器	大壺	側面	M.B.43壺	-	-	-	ロクロ 内: タテキ目	
第4793	田原器	壺	側面	L.R.52壺	-	-	-	ロクロ 外: タテキ目	
第4794	田原器	壺	側面	M.B.44壺	-	-	-	ロクロ 外: 布目	
第4795	田原器	壺	側面	M.B.45壺	-	-	-	ロクロ 外: 布目	
第4796	田原器	壺	側面	L.T.57壺	-	-	-	ロクロ 外: 斧形	
第4797	田原器	壺	側面	船底G.23レンガ基盤	-	-	-	ロクロ 外: タテキ目	上にタガ縫あり
第4798	田原器	壺	側面	船底M.B.55壺	-	-	-	ロクロ 内: タテキ目	蓋なし
第4801	田原器	壺	側面	MC48-4 田原壺	-	-	-	ロクロ 内: タテキ目	
第4802	田原器	壺	側面	船底C.3トレンザ壁土	-	-	-	ロクロ 外: タテキ目 内: ハカタ目	砂利混じる
第4803	田原器	壺	側面	船底E.2トレンザ	-	-	-	ロクロ 外: タテキ目	
第4804	田原器	壺	側面	L.M.54+55壺 L.N.53壺	-	-	-	ロクロ 外: 斧形 調整あり 内: 傷付有	
第4807	田原器	壺	側面	L.S.49壺	-	-	-	ロクロ 他の壺	後面有り 破損混じる
第4809	田原器	壺	側面	L.R.51壺	-	-	-	ロクロ	
第4902	田原器	壺	側面下	船底C.3トレンザ 基盤	-	-	-	ロクロ 内面に炭化物付着	
第4903	田原器	両耳水瓶	底面	L.Q.53壺	(0.1)	-	-	ロクロ 調整	3 C 平安時代
第4904	田原器	壺	底面	L.T.54壺	(0.0)	-	-	ロクロ 内: 布目 内: タテキ目 内面に墨み	
第4905	田原器	壺	底面	M.E.43壺	(0.0)	-	-	ロクロ 内: タテキ目	船底 内: ハカタ目

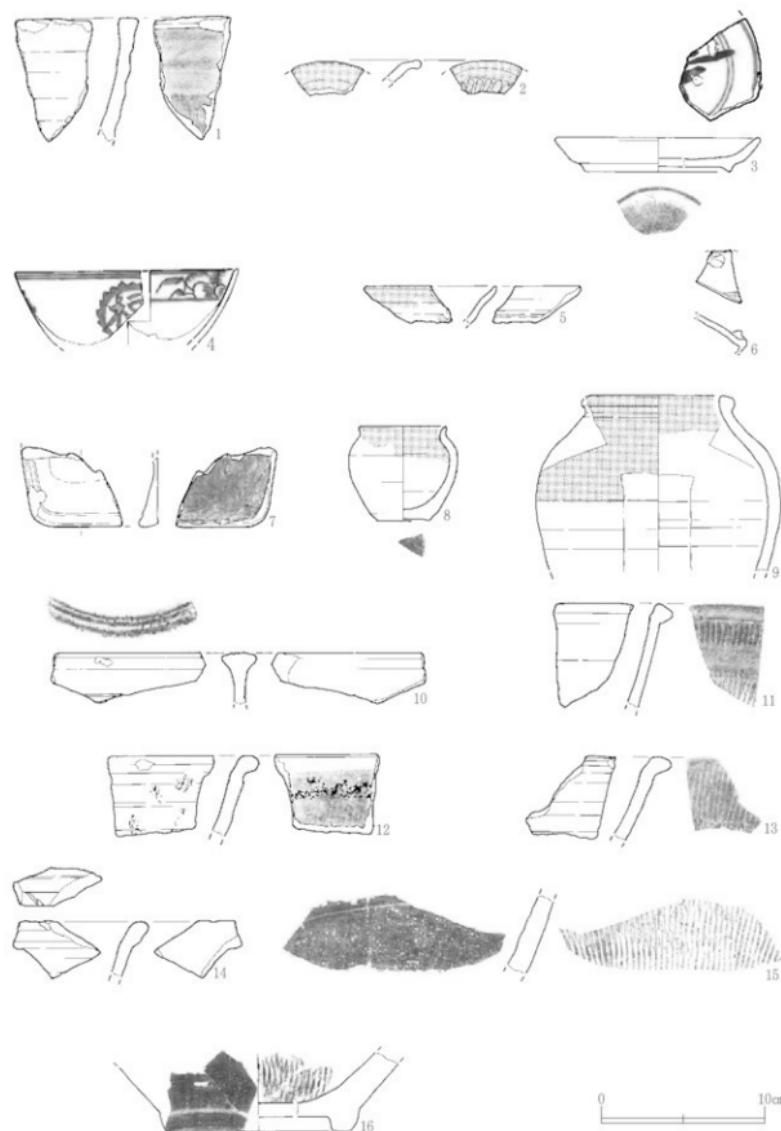
第49図 遺構外出土遺物(11)



第32表 遺物観察表

番号	種別	断面形	部位	テリット・佐地	計測	特徴	その他
					口径(cm) 岩厚(cm) 腹高(cm)		
第32001	灰陶瓦器	長板瓦	側面	M B 46 磁削	- - -	灰陶長板瓦 磁削窓 K-001模式 3C後半	
第32002	灰陶瓦器	長板瓦	側面	L 40 磁削	- - -	灰陶長板瓦 磁削窓 K-001模式 3C後半	
第32003	灰陶瓦器	長板瓦	底盤	- - -	- - -	磁削瓦器 磁削窓 3C後半	
第32004	灰陶瓦器	筒瓦	側面	S 33 磁削	- - -	磁削瓦器 磁削窓 3C後半	
第32005	灰陶瓦器	筒瓦	側面	M A 45 磁削	- - -	磁削瓦器 磁削窓 3C後半	
第32006	土製品	粘土車	-	M G 47 磁削	最大径4.4 最大幅4.5 最大厚1.7 輪縁E+トレンチ	-	円形 砂粒多量混じる
第32007	石製品	石車	-	M E 46 磁削	最大径4.0 最大幅3.8 最大厚3.3 経通Lの7/8 内あり 18.4kg	-	平安時代
第32008	石器	石器	-	M F 46 磁削	最大径2.8 最大幅2.7 最大厚2.7 炭化物付骨 囲みあり 23.67g	-	
第32009	石製品	鏡石	-	輪縁D+トレンチ	最大径1.0 最大幅1.0 最大厚1.3 鏡面無 石質不明 50.73g	-	

第50図 遺構外出土遺物(12)



第51図 遺構外出土遺物(13)

第3節 遺構外出土遺物

第34表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	デリック・位置	計測値 口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴	その他
第3401	中空陶器	瓶頸	口縁	M E45Ⅲ層	-	-	-	透光有り 耐久性あり	平口縁 14C前半
第3402	古伊陶器	瓶	底座	M F44Ⅱ層	(12.4)	(8.9)	2.1	底面有り 大底	16C末
第3403	古伊陶器	瓶	底座	M F44Ⅱ層	-	-	-	透光有り 地質有り	16C末~17C初頭 壺土燒山田塗
第3404	古伊陶器	瓶	底座	L P35Ⅲ層/M C 6Ⅲ層	(14.0)	-	-	透光有り 連州の白	17C前半
第3405	古伊陶器	瓶	底座	M E42 Ⅲ層	-	-	-	透光有り 口縫付に施釉	
第3406	古伊陶器	瓶	底座	L S35Ⅲ層	-	-	-	上面に墨、施釉 実紀部分がある 繠い	
第3407	古伊陶器	瓶	底座	C レンジナ V型	-	-	-	-	17C後期~末
第3408	古伊陶器	小瓶	口縁	M F44~5Ⅲ層 Fトレンジ	-	-	-	口縁有り	17J時代
第3409	古伊陶器	瓶	底座	M F44~5Ⅲ層 M E45 Ⅲ層	(8.0)	-	-	上半分施釉 口縫内凹	17J時代
第3410	古伊陶器	瓶	底座	M F44~5Ⅲ層	-	-	-	上半分に施釉あり	17J時代
第3411	古伊陶器	瓶	底座	L P35Ⅲ層	-	-	-	透光有り	平口縁
第3412	古伊陶器	瓶	底座	C 3トレンジ	-	-	-	側面に現存付費	内反する
第3413	古伊陶器	瓶	底座	C 3トレンジ (缺ト)	-	-	-	おろし口あり	内反する
第3414	古伊陶器	瓶	底座	C 3トレンジ Ⅲ層	-	-	-	内面に一条溝あり	17C下に設あり 内反する
第3415	古伊陶器	瓶	底座	M B35Ⅲ層	-	-	-	おろし口 使紋あり	
第3416	古伊陶器	瓶	底座	L R34 Ⅲ層	-	(11.0)	-	高台口 おろし口あり	

第34表 遺物観察表

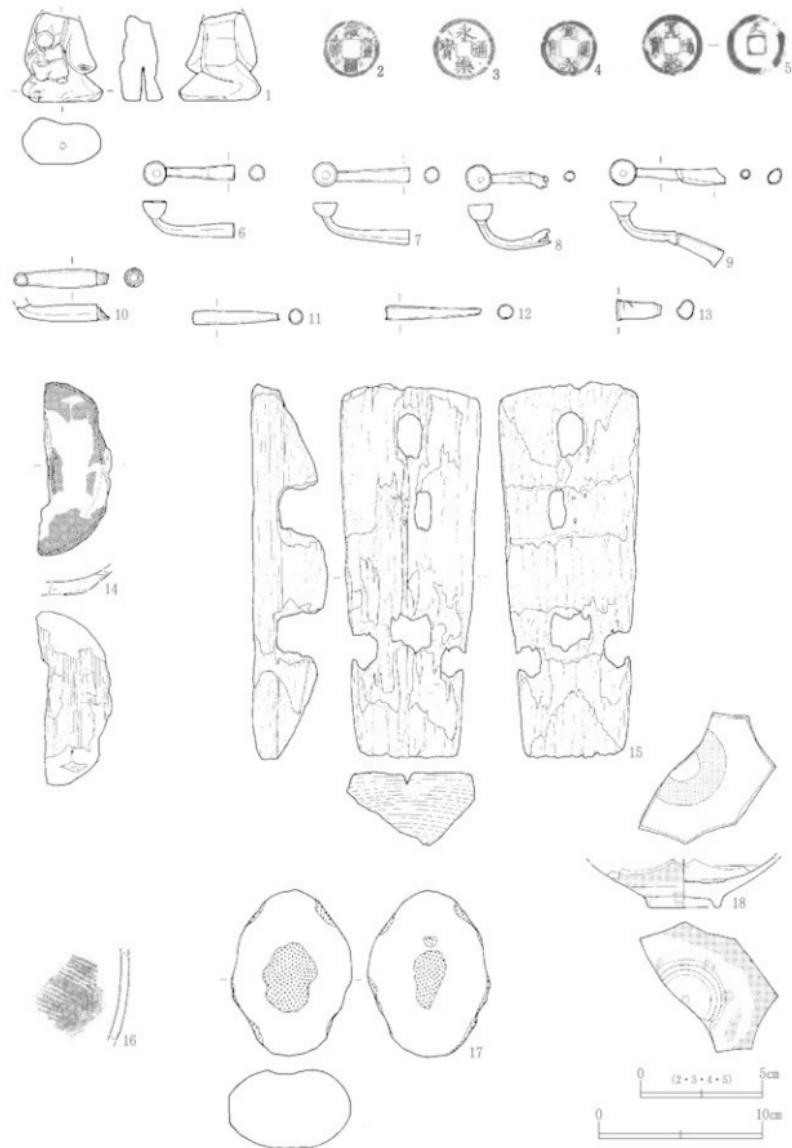
番号	種別	器形	部位	デリック・位置	計測値 口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴	その他
第3501	古伊陶器	小口小瓶	底座	L T35Ⅲ層	-	-	-	ロクロ 内外：施釉 斜士口縫み (欠損)	施釉付 17C
第3502	古伊陶器	瓶	底座	輪縛C 3トレンジ Ⅲ層	-	-	-	ロクロ 内外：施釉 斜士口縫み (一点のみ)	
第3503	古伊陶器	瓶	底座	輪縛C 3トレンジ Ⅲ層	-	-	-	内面帯状施釉 斜縫付	砂目縫みの可能性
第3504	古伊陶器	瓶	底座	輪縛C 3トレンジ 内 Ⅲ層	(14.1)	-	-	ロクロ 内外：施釉 斜縫 斜士口縫み (一点のみ)	17C前半
第3505	古伊陶器	瓶	底座	Eトレンジ 瓶土	(15.0)	-	-	透光	17C半前
第3506	古伊陶器	口付瓶	底座	輪縛E 4トレンジ	-	-	-	砂目縫	17C半前 17J時代
第3507	古伊陶器	口付瓶	底座	M L 35Ⅲ層	-	4.0	-	砂目縫 大明年号 (刻)	17C初頭
第3508	古伊陶器	口付瓶	底座	M L R P 施丸地點	-	0.0	-	砂目縫 大明年号 (刻) 付け裏蓋付	17C初頭
第3509	古伊陶器	口付瓶	底座	M L 35Ⅲ層	(12.4)	4.2	3.4	透光見込み	17C初頭
第3510	古伊陶器	瓶	底座	輪縛D 3トレンジ Ⅲ層	-	4.0	-	ロクロ 内外：施釉 二重縫口縫	口付 17C前半 17J時代
第3511	古伊陶器	口付瓶	底座	M E44Ⅲ層	-	4.5	-	-	18C頃

第35表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	デリック・位置	計測値 口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴	その他
第3501	油製品	人形	-	輪縛L 3トレンジ	5.0	4.9	2.8	母子像 画面に穴 孔	17J時代 意識著しい
第3502	油製品	人形	-	M E41Ⅲ層	11.3	10.3	12.7±2.3cm	-	
第3503	油製品	人形	-	L E41Ⅲ層	5.0	4.9	2.8	人形實體 明朝	
第3504	油製品	人形	-	M C 41Ⅲ層	10.2	9.9	11.2	人形實體 明朝	
第3505	油製品	人形	-	M D 03Ⅲ層	10.2(2.6)	9.9(0.9)	9.1±1.0cm	寛永通寶 寛永	17J時代
第3506	油製品	人形	-	M D 03Ⅲ層	10.2(2.7)	9.9(0.11)	9.1±1.0cm	寛永通寶 寛永	
第3507	油製品	人形	-	L Q50Ⅲ層	5.5	5.9	3.35	埋出し倒	
第3508	油製品	人形	-	M A50Ⅲ層	6.2	6.8	3.89	埋出し倒	
第3509	油製品	人形	-	M E44Ⅲ層	5.0	6.6	4.29	埋出し倒	
第3510	油製品	人形	-	M F43Ⅲ層	8.0	8.9	4.62	埋出し倒	
第3511	油製品	人形	-	M A50Ⅲ層	5.5	6.7	4.96	埋出し倒	
第3512	油製品	人形	-	M D 48Ⅲ層	5.9	6.8	4.79	埋出し倒	
第3513	油製品	人形	-	M E42Ⅲ層	5.9	6.65	4.49	埋出し倒	
第3514	油製品	人形	-	M G44 檻瓦	2.8	3.8	1.77	複数不明	
第3515	木製品	人形	-	M G47Ⅲ層	-	-	-	漆付板	
第3516	木製品	下駄	-	M F46Ⅲ層	22.80	8.55	4.7	切り欠きあり	漆塗 板 (分析:19)
第3517	鏡文+蓋	汽泡	底座	○トレンジ	口88	底88	26mm	繊細な 刻文鏡文 内面に化妆物形容	漆塗 板 (分析:20)
第3518	鏡石	鏡	底座	B 6トレンジ	12.0	-	4.8	画面に沢山 画面に鋸歯状	下底面鏡片上
第3519	鏡石	鏡	底座	A 6トレンジ	-	4.4	-	砂目縫み 漆塗板	下底面鏡片上



第52図 遺構外出土遺物(14)



第53図 遺構外出土遺物(15)

以上、小鳥田I遺跡は第2節で述べた平安時代（9世紀から10世紀）の検出遺構と出土遺物が確認されたほかに、縄文時代の土器・石器・石製品が出土しており、第39図1の深鉢形土器破片は縄文中期以降の時期に比定されるものと考えられる。第39図3の黒曜石剝片は、本遺跡が黒曜石原産地との交流を持っていたことを示している。また、同じ縄文時代の第53図16浅鉢破片は、北側に隣接する下道溝遺跡出土の晩期精製土器である。これ以外にも、文化財保護室および中仙町教育委員会の踏査・試掘調査で縄文時代の土器・石器が出土しており、小鳥田I遺跡・下道溝遺跡とともに平安時代の遺跡であるだけでなく、縄文時代の遺跡でもあることが判明した。

中世・近世の遺物からは、第51図2～4のような安土桃山時代の終わり頃から江戸時代初期に比定される陶磁器が出土しており、この頃は、常陸から秋田に転封となった佐竹義宣に従って、仙北郡長野の紫島（紫嶋城跡：遺跡地図番号49-43）に北家佐竹義廉が入った時期と重なる。また、第51図4のような漳州窯（福建省）産の陶磁器も出土している。

第5章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

秋田県仙北郡中仙町に所在する小鳥田I遺跡では、古代の住居跡・井戸跡等の遺構が確認されており、土師器・柱材・井戸枠材等が出土している。今回の分析調査では、出土した土器付着炭化物と堆積層中から抽出した炭化物を対象に加速器による放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、年代資料を得る。また、出土木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する情報を得る。

第1節 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、土器付着炭化物3点（試料番号1～3）、堆積物中から抽出した炭化物5点（試料番号4～6・8・10）、腐植混じり土壌1点（試料番号9）、炭化材1点（試料番号23）の計10点である。試料の詳細は結果と共に第36・37表に示す。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における曆年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施する。

3. 結果

結果を第1・2表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SN03焼土遺構出土土器付着炭化物（試料番号3）が約2,300年前の値を示す。これは、キーリ・武藤（1982）によれば、東北地方における縄文時代晩期末に相当する。測定年代値が土器年代観に比べて古い理由としては、付着炭化物が微量であったため、炭化物自体が土壤中の古い炭素の影響を受けていること等が考えられる。その他の試料の測定年代値は、SI199竪穴住居跡出土土器付着炭化物（試料番号1）が約1,400年前、SI49竪穴住居跡出土炭化物（試料番号6）が約1,300年前、SK202土坑出土土器付着炭化物（試料番号2）が約1,200年前、SI10竪穴住居跡出土炭化物2点（試料番号4・5）、SI199竪穴住居跡出土炭化物（試料番号8）、SN04焼土遺構出土炭化物（試料番号10）、SI91竪穴住居跡出土炭化材（試料番号23）が約1,100年前の6世紀～9世紀頃の値を示す。また、SE207井戸跡出土腐植混じり土壌（試料番号9）が約700年前の13世紀頃の値を示す。

今後は、同一遺構・同一層準から出土した炭化材・炭化物等の測定点数を増やすことにより、更に詳細な年代資料が得られると思われる。なお、SI91竪穴住居跡出土炭化材（試料番号23）の樹種はヤナギ属に同定された。

第36表 放射性炭素年代測定結果

番号	遺構	出土位置など	層位	試料の質		補正年代 BP		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)		測定年代 BP		Code.No.
1	SI199	-	5層カマド覆土中	土器付着炭化物		1440±30		-19.07±1.06		1340±30		IAAA-31882
2	SK202	RP1	4層	土器付着炭化物		1160±30	-	-24.83±1.00		1160±30		IAAA-31883
3	SN003	RP1	2層	土器付着炭化物		2280±40	-	-28.77±0.68		2340±40		IAAA-31923
4	SI010	炭サンプル④	3層	炭化物		1070±30	-	-8.53±0.66		800±30		IAAA-31884
5	SI010	炭サンプル⑤	3層(炭化物層)	炭化物		1100±40	-	-27.72±0.79		1150±30		IAAA-31885
6	SI049	炭サンプル	2層カマド覆土中	炭化物		1260±30	-	-22.46±0.72		1220±30		IAAA-31886
8	SI199	-	7層カマドRP20	炭化物		1080±40	-	-24.79±1.00		1070±30		IAAA-31888
9	SE207	-	4層	腐殖混じり土壌		730±30	-	-25.75±0.85		740±30		IAAA-31889
10	SN004	-	3層	炭化物		1110±40	-	-23.63±0.70		1090±30		IAAA-31890
23	SI091	炭サンプル④	-	炭化材(ヤナギ属)		1090±40	-	-24.88±0.68		1090±30		IAAA-31887

1)年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。

2)BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第37表 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.				
		cal	AD	601	-	cal	AD	651	cal	BP	1,349	-	1,299	1,000	IAAA-31882
1	1439±33	cal	AD	601	-	cal	AD	651	cal	BP	1,349	-	1,299	1,000	IAAA-31882
2	1163±33	cal	AD	782	-	cal	AD	790	cal	BP	1,168	-	1,160	0.076	IAAA-31883
		cal	AD	814	-	cal	AD	843	cal	BP	1,136	-	1,107	0.242	
		cal	AD	858	-	cal	AD	898	cal	BP	1,092	-	1,052	0.394	
		cal	AD	921	-	cal	AD	956	cal	BP	1,029	-	994	0.288	
3	2281±37	cal	BC	397	-	cal	BC	357	cal	BP	2,347	-	2,307	0.611	IAAA-31923
		cal	BC	286	-	cal	BC	258	cal	BP	2,236	-	2,208	0.314	
		cal	BC	242	-	cal	BC	234	cal	BP	2,192	-	2,184	0.075	
4	1067±32	cal	AD	903	-	cal	AD	916	cat	BP	1,047	-	1,034	0.175	IAAA-31884
		cal	AD	964	-	cal	AD	973	cat	BP	986	-	977	0.120	
		cal	AD	975	-	cal	AD	1,004	cat	BP	975	-	946	0.573	
		cal	AD	1,008	-	cal	AD	1,017	cat	BP	942	-	933	0.133	
5	1100±36	cal	AD	896	-	cal	AD	923	cat	BP	1,054	-	1,027	0.399	IAAA-31885
		cal	AD	940	-	cal	AD	985	cat	BP	1,010	-	965	0.601	
6	1263±34	cal	AD	691	-	cal	AD	777	cat	BP	1,259	-	1,173	1.000	IAAA-31886
8	1077±34	cal	AD	900	-	cal	AD	919	cat	BP	1,050	-	1,031	0.281	IAAA-31888
		cal	AD	959	-	cal	AD	1,001	cat	BP	991	-	949	0.687	
		cal	AD	1,013	-	cal	AD	1,015	cat	BP	937	-	935	0.032	
9	729±34	cal	AD	1,265	-	cal	AD	1,295	cat	BP	685	-	655	1.000	IAAA-31889
10	1114±35	cal	AD	894	-	cal	AD	925	cat	BP	1,056	-	1,025	0.414	IAAA-31890
		cal	AD	936	-	cal	AD	979	cat	BP	1,014	-	971	0.586	
23	1089±35	cal	AD	898	-	cal	AD	921	cat	BP	1,052	-	1,029	0.357	IAAA-31887
		cal	AD	945	-	cal	AD	949	cat	BP	1,005	-	1,001	0.043	
		cal	AD	955	-	cal	AD	996	cat	BP	995	-	954	0.600	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第2節 樹種同定

1. 試料

試料は、掘立柱建物跡の柱材または根固め材と考えられる木材6点（試料番号11～16）、井戸枠材の一部と考えられる木材2点（試料番号17～18）、椀1点（試料番号19）、加工材1点（試料番号20）の合計10点である。

2. 分析方法

各木製品について、木取りや破損状況を観察した。破損部を利用して、5mm角程度の木片を採取して試料とした。木片は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。

3. 結果

樹種同定結果を第3表に示す。木製品は、針葉樹1種類（スギ）と広葉樹2種類（ブナ属・モクレン属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部にのみ認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

第38表 樹種同定結果

番号	遺構	出土位置など	層位	器種	樹種
11	SB208	P4 RW1-1	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
12	SB208	P4 RW1-2	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
13	SB208	P4 RW2-1	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
14	SB208	P4 RW2-2	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
15	SB208	P4 RW2-3	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
16	SB208	P4 RW3	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
17	SE207		4層	井戸枠材の一部	スギ
18	SE207		4層	井戸枠材の一部	スギ
19		MG47グリッド	III層	漆塗り椀の底部	ブナ属
20		MF46グリッド	III層	はぞ穴・切り欠きのある材	モクレン属

4. 考察

掘立柱建物跡の柱材または根固め材と考えられる木材は、6点のうち試料番号15の1点を除く5点が板状を呈しており、広い面が板目となる木取りである。このうち、試料番号14では、平坦面のほぼ中央部に円形の抉れが認められる。一方、試料番号15は、広い面が木口となる木取りの木片である。これらの木材は、形状に関係なく、全てスギであった。この結果からスギが選択・利用されたことが推定される。スギ材は、木理が直通で割裂性が高く、加工は容易で比較的耐水性も高い。こうした加工性等の材質が利用された背景に考えられる。井戸枠材は、いずれも板状で広い面が板目となる木取りであり、柱材または根固め材とされる試料と類似点が多い。樹種もスギであり、同様の木材利用が推定される。

漆塗り椀は、約半分に割れた状態である。割れ目にみられる組織から、横木取りであるが、器底が板目か板目かの確認はできなかった。漆塗りは、両面とも黒色で、観察した範囲では模様などは認められない。樹種は、落葉広葉樹のブナ属であった。ブナ属は、全国的に漆器の木地としてはトチノキやケヤキと共に出土例の多い樹種の一つである（島地・伊東,1988；伊東,1990；伊東・久保,2002）。漆器については、秋田県内で樹種同定を行った例が少ないとため、木材利用の傾向などは不明である。しかし、秋田県内にはブナを主とした落葉広葉樹林が広く分布しており、木材の入手は容易であったと考えられる。

加工材は、ホゾ穴、切り欠きのある材で、横断面は五角形状で、平坦面が板目となる木取りである。平坦面は、幅6～8cm、長さ約20cmの長方形となる。ホゾ穴は、長方形の長軸方向の一方に2箇所が横に並んで配置、もう一方に1箇所認められる。側面觀は両端で薄く、中央部で厚い。切り欠きは、平坦面の反対側に2箇所認められ、いずれも断面が四角い溝状を呈する。これらの形状は、差歛下駄の台によく似ており、ホゾ穴は鼻緒を通す穴、切り欠きは歯をはめる溝に該当する。確認されたモクレン属は、下駄の台にも利用される種類であり、加工材が下駄としても矛盾しない。

«引用文献»

伊東隆夫,1990,日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ.木材研究・資料,26,

　　京都大学木材研究所,93-189p.

伊東隆夫・久保るり子,2002,日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅲ.木材研究・資料,38,

　　京都大学木質科学研究所,39-217p.

キーリ C.T, 武藤康弘,1982,縄文時代の年代,縄文文化の研究1 縄文人とその環境,雄山閣,246-275p.

島地謙・伊東隆夫（編）,1988,日本の遺跡出土木製品総覧,雄山閣,296p.

第6章　まとめ

小鳥田I遺跡は、堅穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟を始めとする様々な遺構が検出され、集落としての性格を持つことが分かった。堅穴住居跡からは、9世紀代の土師器・須恵器が多く出土し、集落の中心的な時期はこの頃に求めることができる。このほか土坑、井戸跡、溝跡、道路状遺構などを検出したが、ここでは主要な遺構である堅穴住居跡と道路状遺構について述べる。

堅穴住居跡について

調査区内から5軒検出したが、S I 91・199を除くS I 01・10・49については耕作による擾乱で住居の大半が失われており、カマド痕跡のみが確認され住居の規模や形態については不明である。従ってここではS I 91とS I 199について述べる。S I 199堅穴住居跡は多くの遺構と重複し、土層断面の観察からS E 207井戸跡→S K 201土坑→S I 199堅穴住居跡→S N 206焼土遺構の順に新しくなる。S I 199の南東に位置するカマドには焚口と組石、土製支脚、煙道が明瞭に確認された。そこから出土した土師器や須恵器より堅穴住居跡の時期は9世紀後半と考えられる。これとほぼ並行する時期のS I 91では、カマドの焚口と煙道は削平され支脚のみが確認できた。S I 01とS I 10は出土遺物から9世紀後半、S I 49は10世紀前半と考えられる。

道路状遺構について

調査区の中央で検出したS M198道路状遺構は、53か所の凹みが北東-南西方向（N-45°-E：真北に対し45度東偏）に連なった状態で検出された。ここでは、道路の軸線と方向と同じくする溝跡（道路の側溝として機能する溝状遺構）が検出されなかつたため「道路状遺構」として扱った。北西側に隣接するS D112溝跡（N-57°-E）は道路状遺構の軸線と異なり、地形の等高線とも沿わない。道路状遺構の形態は他県で検出例のある波板状凹凸に類似しており、幅は2.5～4mで等高線に沿っている。道路状遺構の時期は、この凹みより出土した土師器・須恵器の年代から9世紀後半と考えられる。

秋田県内（出羽国北半）の古代道路遺構については高橋学氏の集成があり、県内の主要な古代道路遺構として、秋田城跡と払田柵跡の城柵内部および周辺での検出事例などが示されている。特に平成12年（2000年）に発掘調査された横手市前通遺跡では、掘立柱建物跡を中心とする平安時代の集落跡から道路遺構が検出され、城柵外での初の調査例となった。五十嵐一治氏は、前通遺跡の道路遺構には概ね9世紀第3四半期頃が下限と考えられる第1期と、9世紀第4四半期が下限と推定される第2期とがあり、複数の溝状遺構を側溝とした幅4m前後の規模を持つ道路遺構と考えている。この道路軸線を意識した掘立柱建物跡の配置や、溝状遺構の出土遺物から、平安時代から中世初期まで存続する第3期の道路遺構も想定している。^(注1) 本遺跡のS M198道路状遺構は、古代集落跡からの検出という意味では前通遺跡と同様であるが、その形態は波板状の圧痕が連続し、両側には溝跡を伴わない特徴がある。

出土遺物について

小鳥田I遺跡では、土師器や須恵器以外に、綠釉陶器壺の破片2点、灰釉陶器長頸瓶の破片2点、石帯1点、側面に線刻が施された石製鋤鍤車1点などが遺構外から出土した。綠釉陶器と灰釉陶器は、

城柵官衙およびその関連遺跡から出土する傾向が^(註4)強く、石帯や線刻のある石製紡錘車とともに希少な遺物としての特徴を示している。灰釉陶器と綠釉陶器については愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏より教示を得ており、その結果、2点の綠釉陶器は近江窯産で10世紀前半の時期、2点の灰釉陶器は猿投窯産（K-90号窯式）で9世紀後半の時期ということである。なお、綠釉陶器は近江窯産の最古式の深塊で、近江窯産綠釉陶器としては小鳥田I遺跡が最北の出土地である。

以上、大まかに特徴的な遺構・遺物についてまとめたが、小鳥田I遺跡は古代城柵官衙遺跡の払田柵跡からは真北に約6kmの近い距離に位置している。さらに払田柵跡は9世紀初頭に創建され、10世紀後半に終末を迎えたとされる。このことと希少価値の高い遺物が出土していることから、本遺跡と払田柵跡は互いに関連し合って存在していたものと考えられる。

註1 早川泉「古代道路遺構に残された圧痕－波板状凹凸面の性格について－」『東京考古』9 1991(平成3)年

飯田充晴「道路築造方法について－埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして－」『古代交通研究』2 1992(平成4)年

註2 高橋学「出羽国－秋田県」『日本古代道路事典』古代交通研究会編 八木書店 2004(平成16)年

註3 五十嵐一治「第6章 まとめ」『前通遺跡』秋田県文化財調査報告書第351集 秋田県教育委員会 2009(平成15)年

註4 緑釉陶器の県内出土例としては、払田柵跡・秋田城跡・内村遺跡・上の山II遺跡・厨川谷地遺跡などがあり、灰釉陶器は払田柵跡・秋田城跡・小谷地遺跡・江原崎I遺跡・小林遺跡・厨川谷地遺跡などで出土している。

註5 秋田県教育委員会『払田柵跡I－政庁跡－』秋田県文化財調査報告書第122集 1985(昭和60)年

秋田県教育委員会『払田柵跡II－区画施設－』秋田県文化財調査報告書第289集 1990(平成11)年など、一連の秋田県教育庁払田柵跡調査事務所の調査成果による。



1. 調査区近景(南西→)



2. 調査区近景(北→)



1. SI01竪穴住居跡検出状況(南西→)



2. SI01竪穴住居跡断面(南西→)



1. SI10竪穴住居跡北側(北西→)



2. SI10竪穴住居跡焼土断面(東→)



3. SI10竪穴住居跡検出状況(北東→)



4. SI10竪穴住居跡南側焼土断面(南西→)



5. SI10竪穴住居跡南側焼土検出状況(北西→)



1. SI49竪穴住居跡完掘(北西→)



2. SI49竪穴住居跡カマド確認(北→)



3. SI49竪穴住居跡カマド確認(南→)



4. SI49竪穴住居跡カマド1断面(西→)



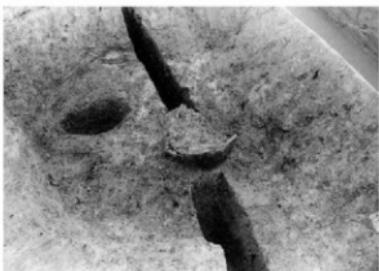
5. SI49竪穴住居跡カマド2断面(南西→)



1. SI91竪穴住居跡完掘(南東→)



2. SI91竪穴住居跡断面(北西→)



3. SI91竪穴住居跡カマド内支脚(北東→)



4. SI91竪穴住居跡カマド(南東→)



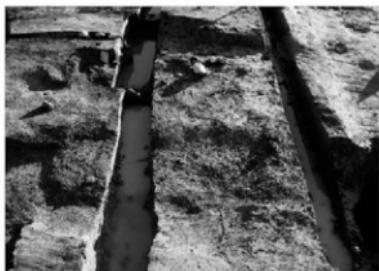
5. SI91竪穴住居跡カマド断面(北西→)



1. SI199竪穴住居跡完掘(北西→)



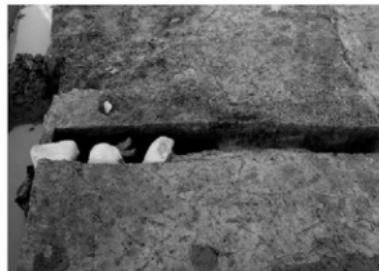
2. SI199竪穴住居跡断面(北西→)



3. SI199竪穴住居跡遺物出土状況(北東→)



4. SI199竪穴住居跡カマド検出状況(北西→)



5. SI199竪穴住居跡カマド断面(南西→)



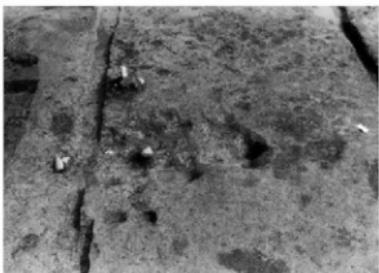
1. SB208掘立柱建物跡完掘(北東→)



2. SB208掘立柱建物跡柱穴断面(西→)



3. SK07土坑断面(北西→)



4. SK07土坑完掘(北西→)



5. SK44土坑断面(南→)



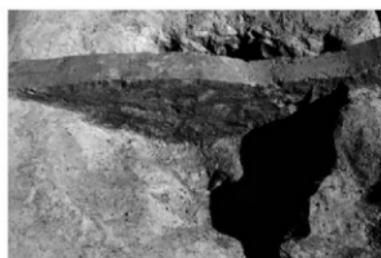
1. SK83土坑断面(東→)



2. SK109土坑断面(北東→)



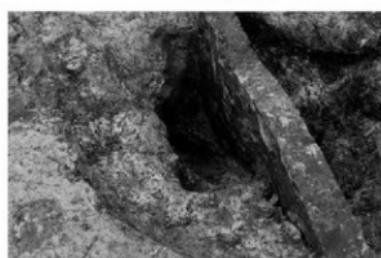
3. SK109土坑完掘(北東→)



4. SK201土坑断面(南東→)



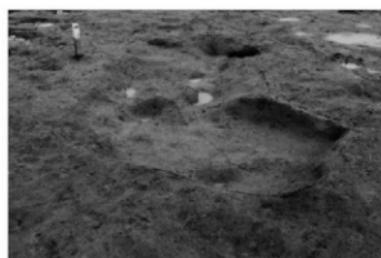
5. SK201土坑断面(北西→)



6. SK201土坑材出土状況(北西→)



7. SK202·203土坑検出状況(北→)



8. SK202·203土坑完掘(南西→)



1. SE207井戸跡露出状況(北→)



2. SE207井戸跡完全掘(北→)



3. SE207井戸跡湧水状況(西→)



4. SE207井戸材出土状況(南西→)



5. SE207井戸材出土状況(南→)



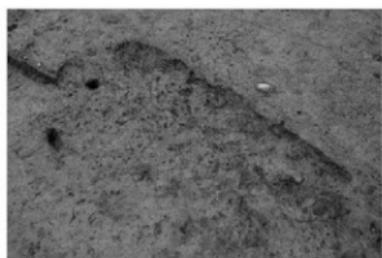
1. SN03燒土遺構檢出狀況(北西→)



2. SN03燒土遺構斷面(北西→)



3. SN04燒土遺構斷面(北西→)



4. SN04燒土遺構完掘(南→)



5. SN05燒土遺構斷面(南西→)



6. SN05燒土遺構完掘(西→)



7. SN06燒土遺構斷面(南東→)



8. SN06燒土遺構完掘(南東→)

4. SN206燒土遺構斷面(北→)



3. SN206燒土遺構斷面(南西→)

2. SN204燒土遺構斷面(南西→)



1. SN204燒土遺構遺物出土狀況(北東→)





1. SD02溝跡検出状況(北→)



2. SD02溝跡検出状況(北東→)



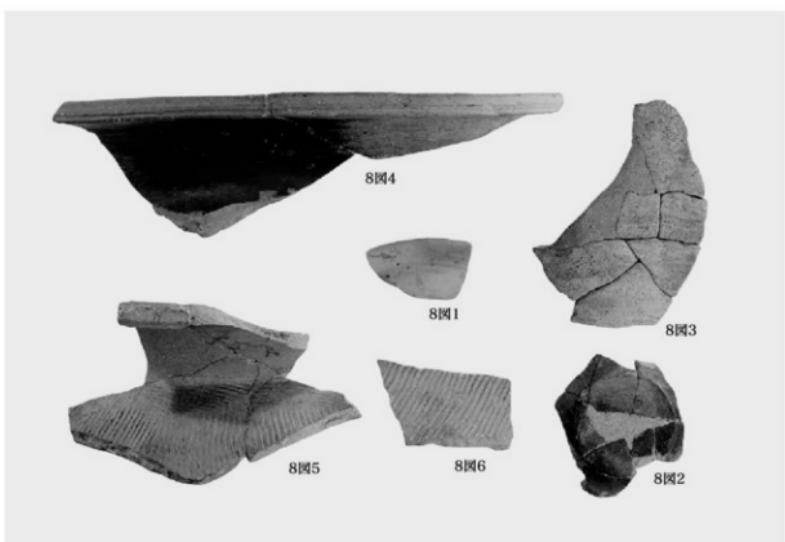
3. SD112溝跡断面(南西→)



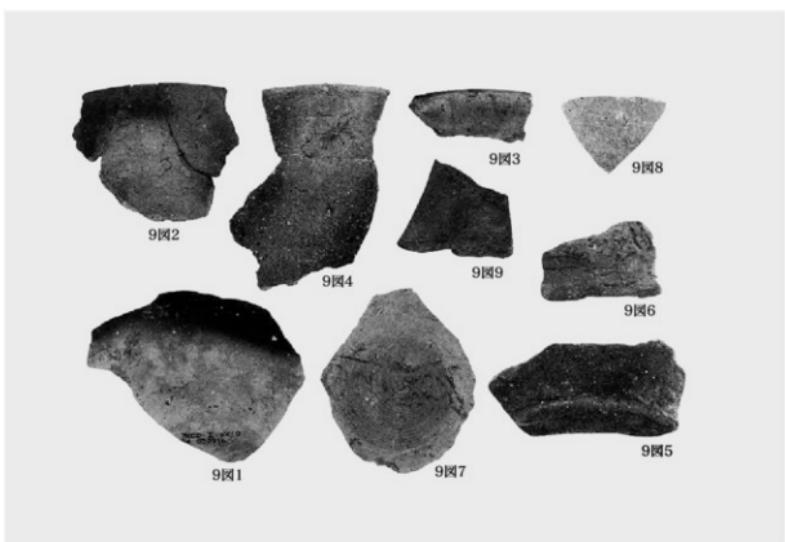
4. SD112溝跡・SX191断面(南西→)



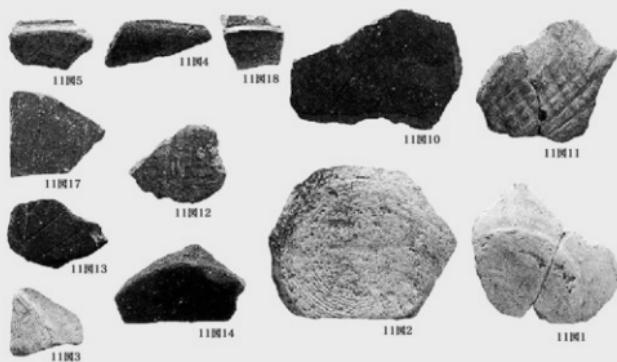
5. SD112溝跡・SM198道路状遺構(北東→)



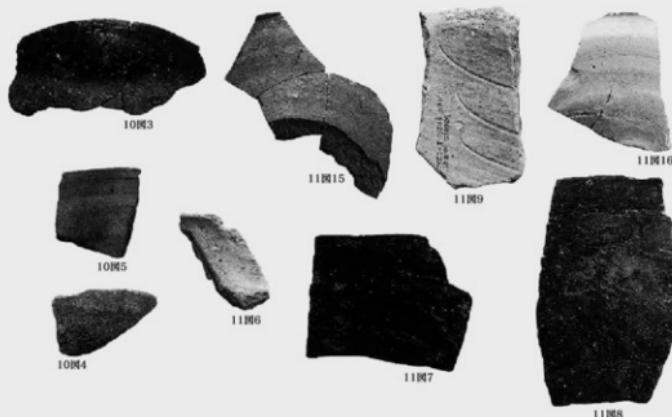
1. SI01竪穴住居跡出土遺物



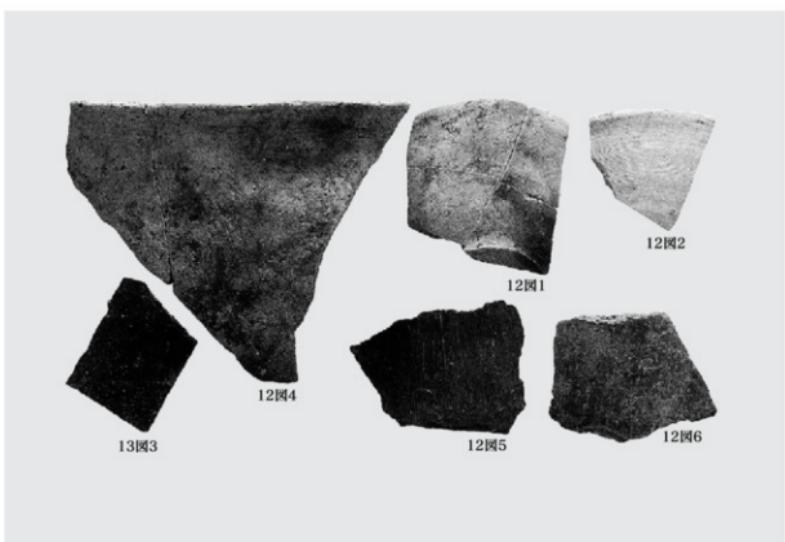
2. SI10竪穴住居跡出土遺物



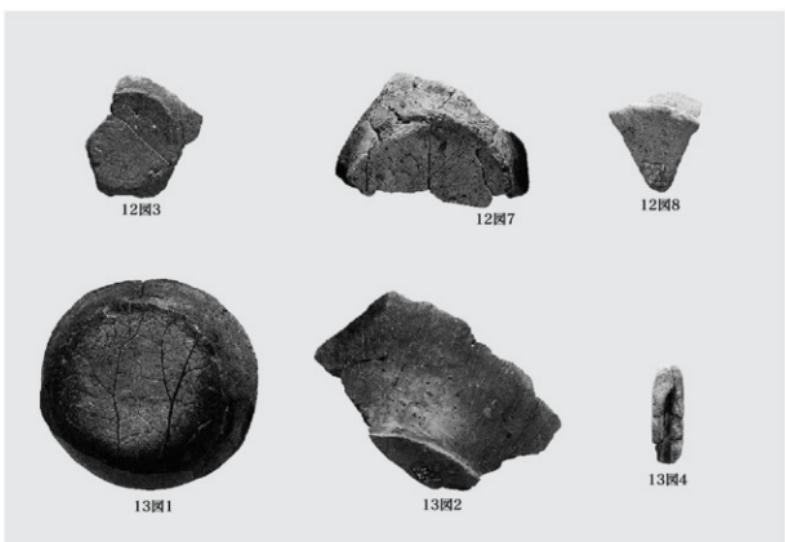
1. SI49竖穴住居跡出土遺物(1)



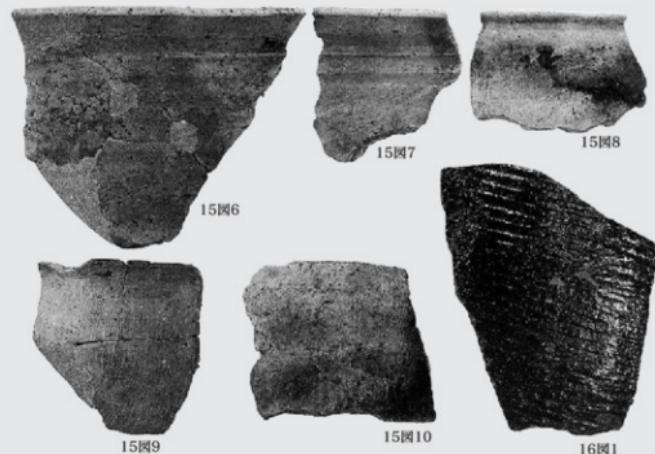
2. SI49竖穴住居跡出土遺物(2)



1. SI91竪穴住居跡出土遺物(1)



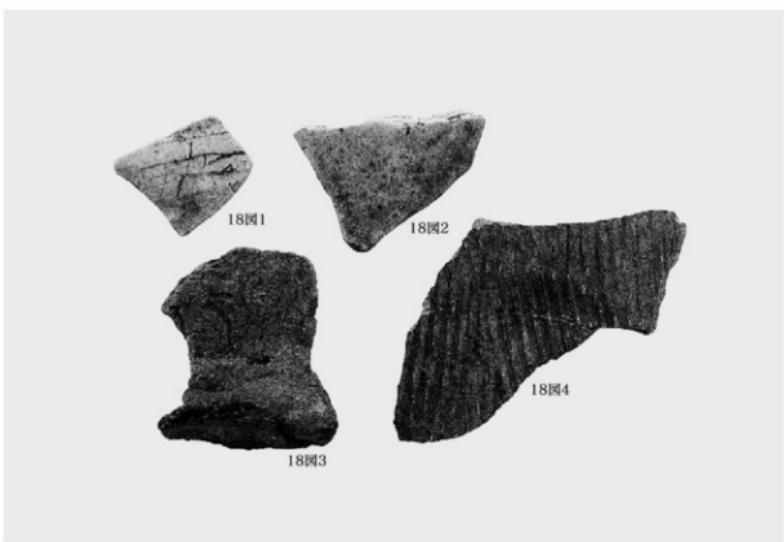
2. SI91竪穴住居跡出土遺物(2)



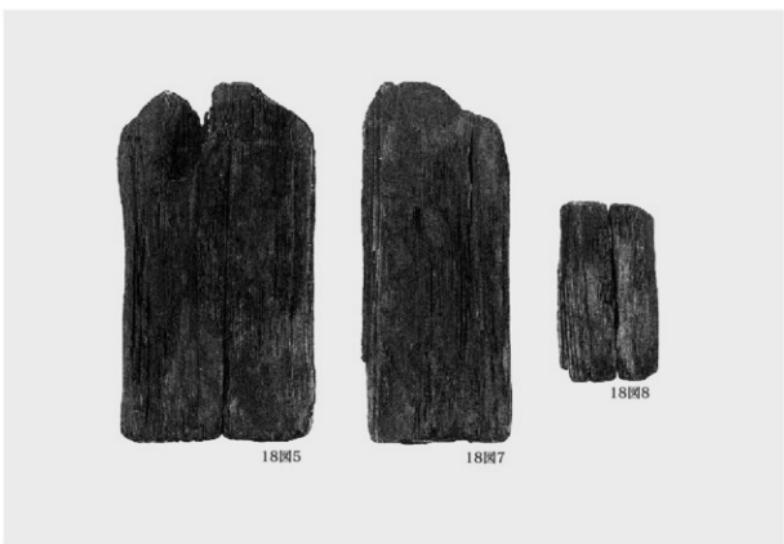
1. SI199堅穴住居跡出土遺物(1)



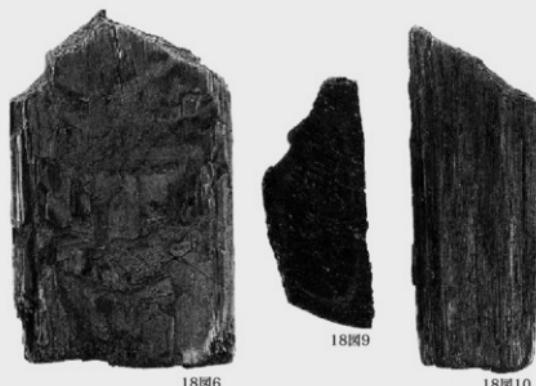
2. SI199堅穴住居跡出土遺物(2)



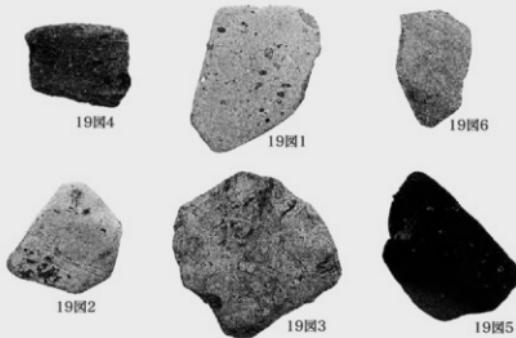
1. SB208掘立柱建物跡出土遺物(1)



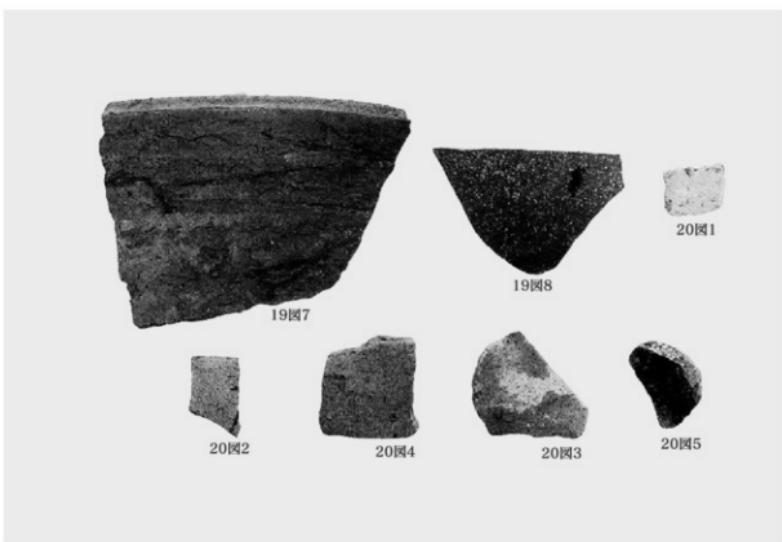
2. SB208掘立柱建物跡出土遺物(2)



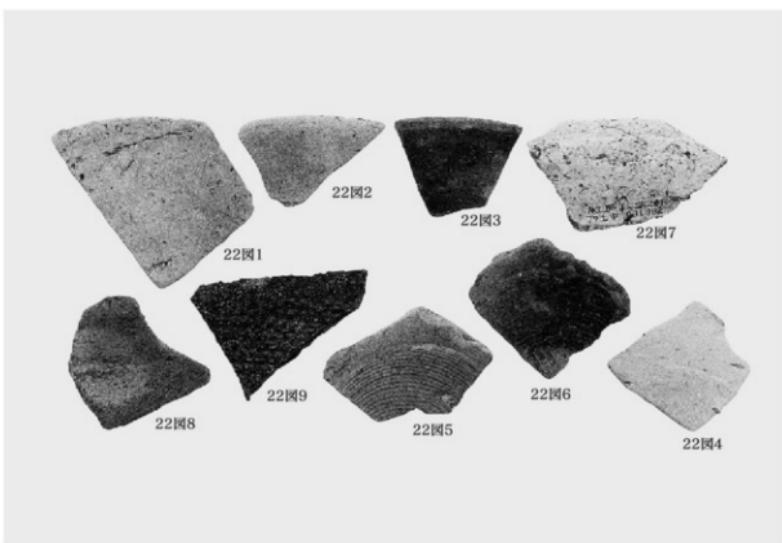
1. SB208掘立柱建物跡出土遺物(3)



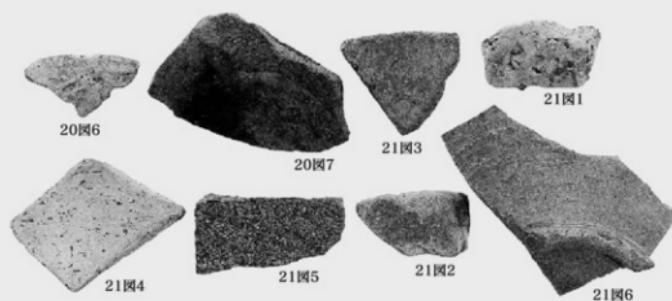
2. SK07土坑出土遺物



1. SK44-83-109土坑出土遺物



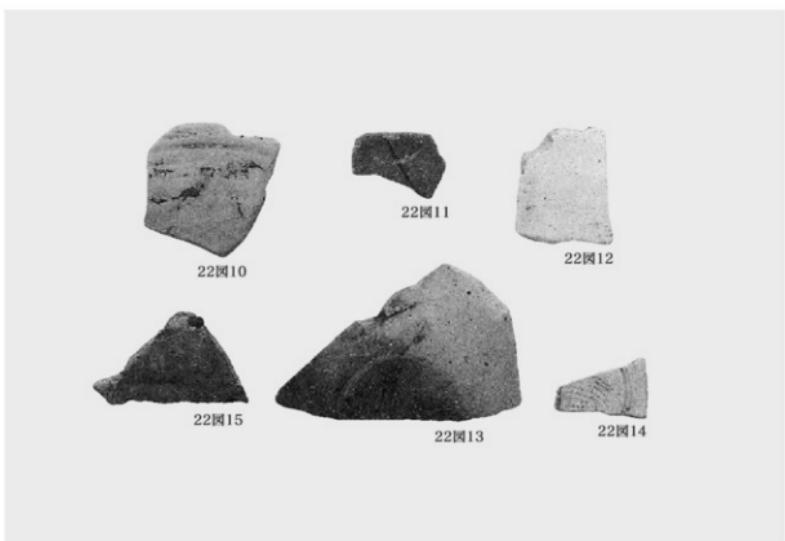
2. SK201土坑出土遺物



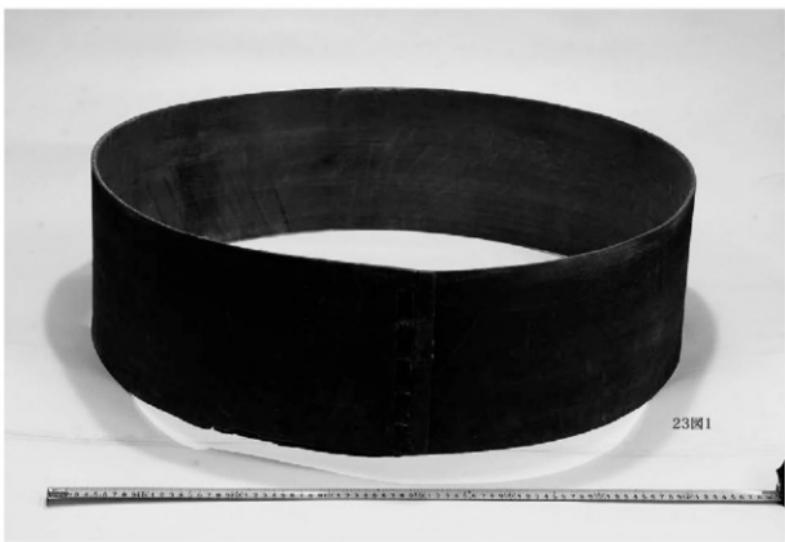
1. SK202·203土坑出土遺物(1)



2. SK202·203土坑出土遺物(2)



1. SE207井戸跡出土遺物(1)



2. SE207井戸跡出土遺物(2)



24図3



24図4



24図5

1. SE207井戸跡出土遺物(3)



23図3



23図2

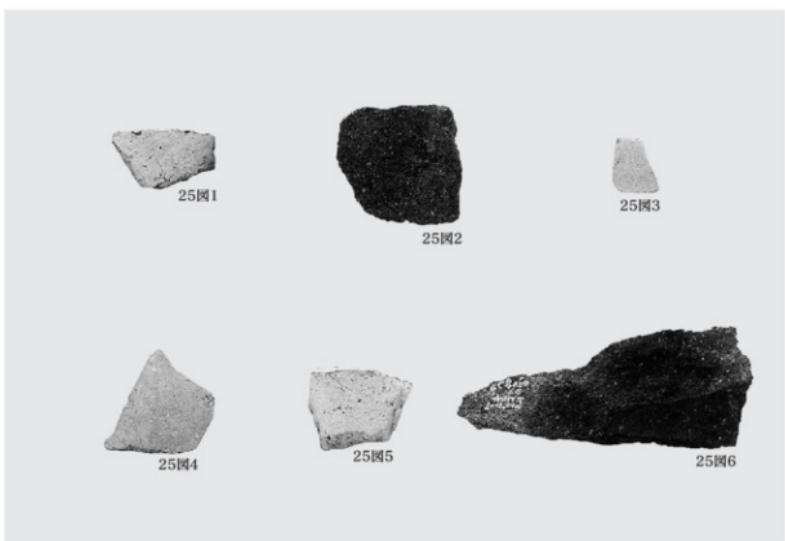


24図2

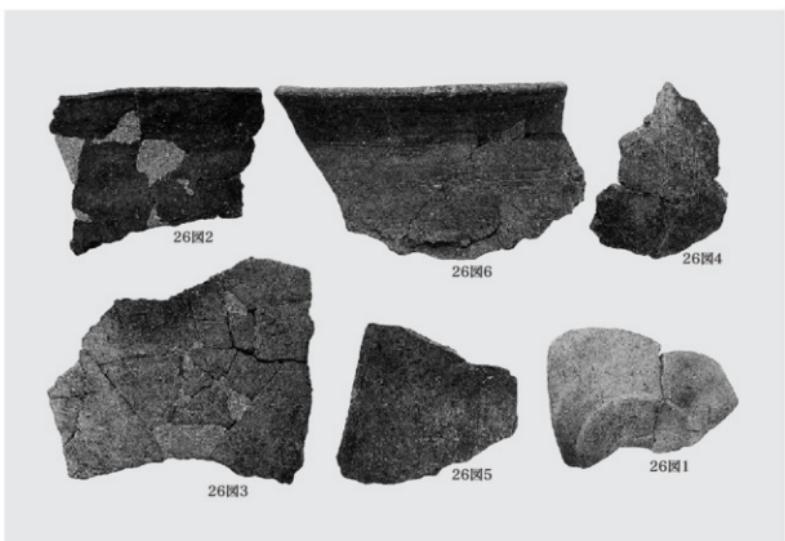


24図1

2. SE207井戸跡出土遺物(4)



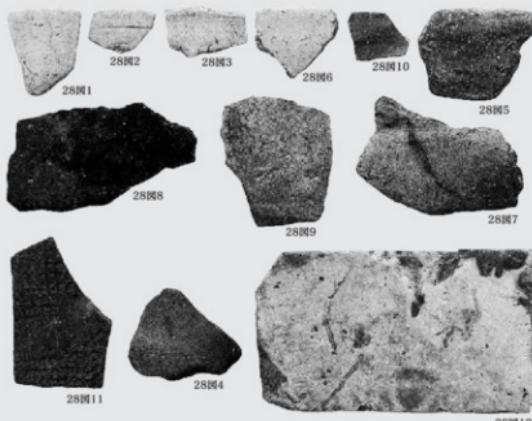
1. SN03-04焼土遺構出土遺物



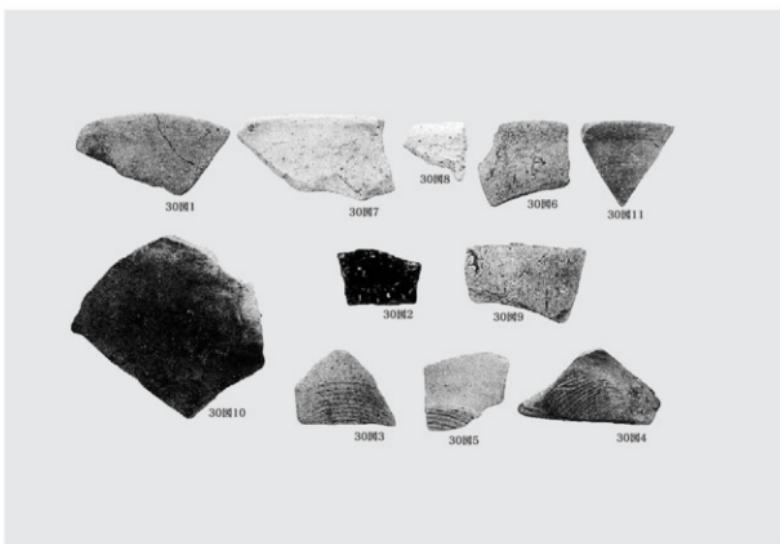
2. SN204焼土遺構出土遺物



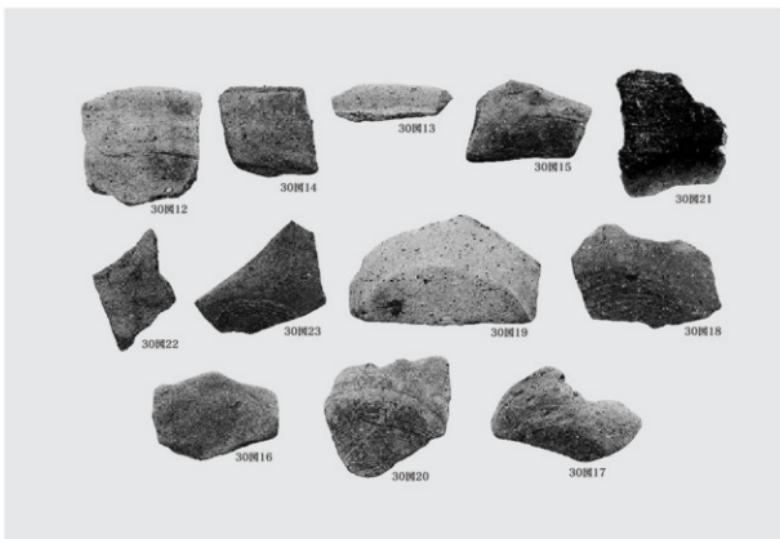
1. SN206燒土遺構出土遺物



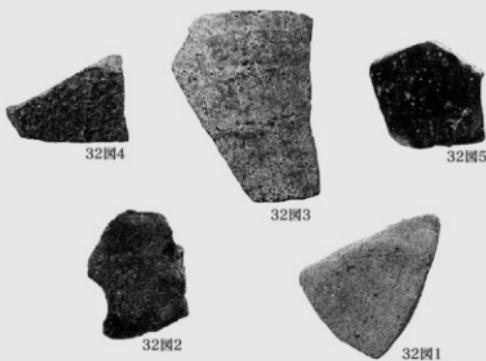
2. SD02溝跡出土遺物



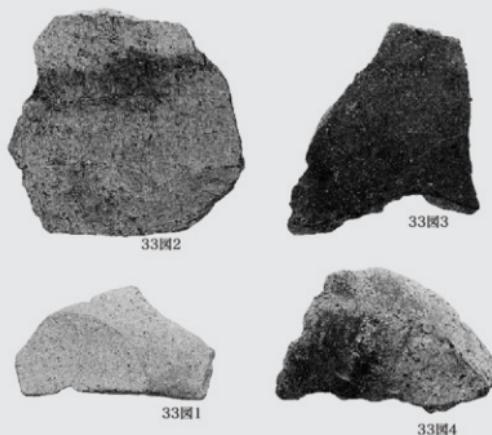
1. SD112溝跡出土遺物



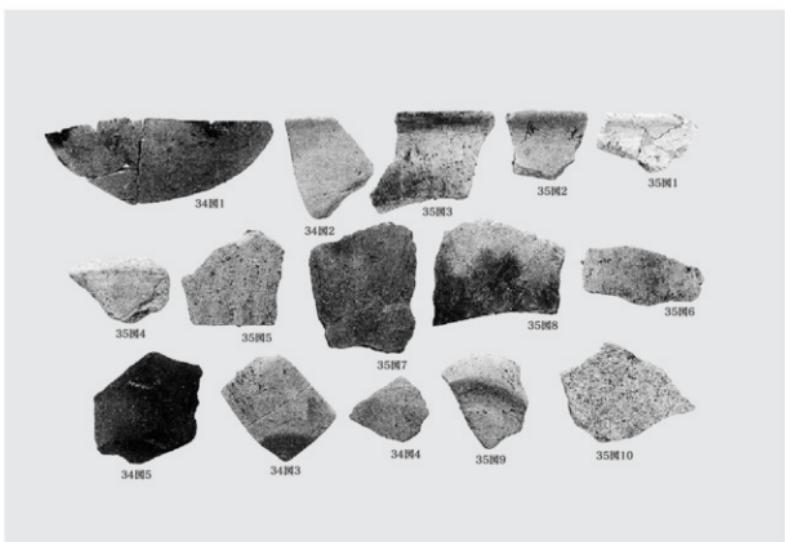
2. SM198道路狀遺構出土遺物



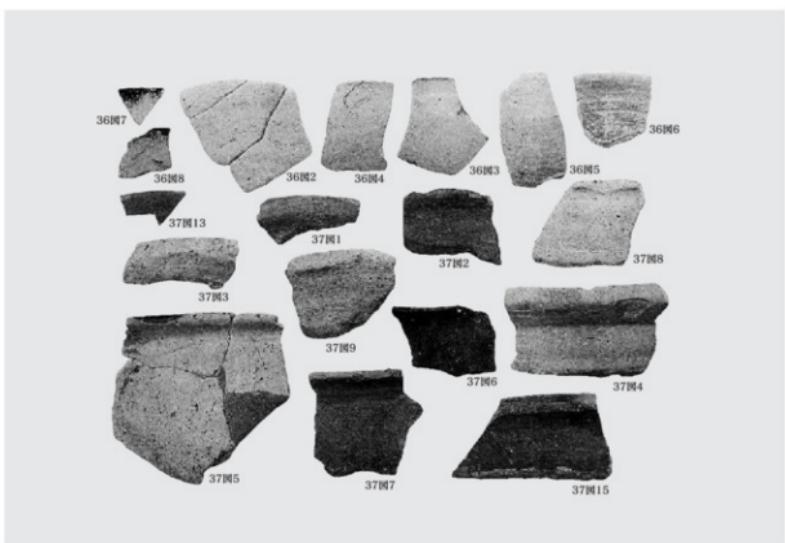
1. SKP92~115柱穴様ピット出土遺物



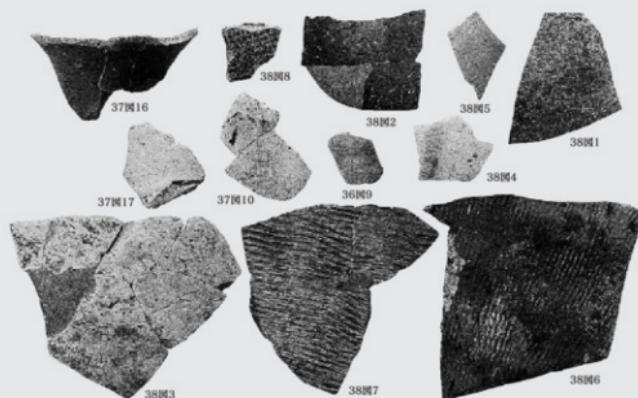
2. SX191その他の遺構出土遺物



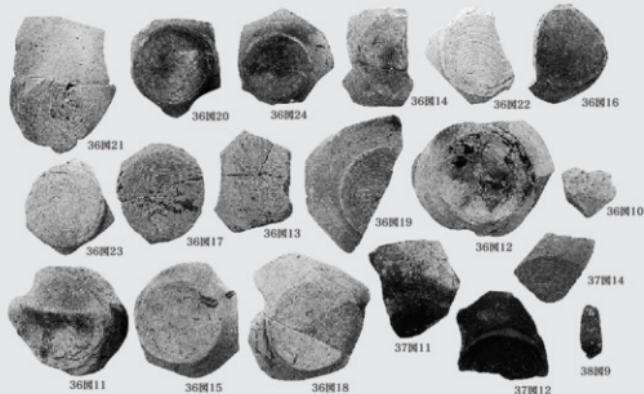
1. SX200その他の遺構出土遺物



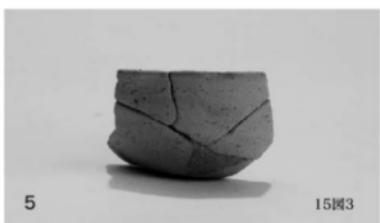
2. SX205その他の遺構出土遺物(1)

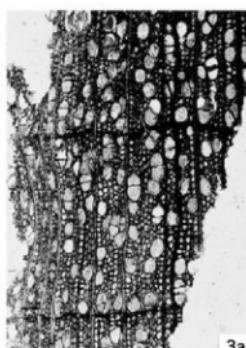
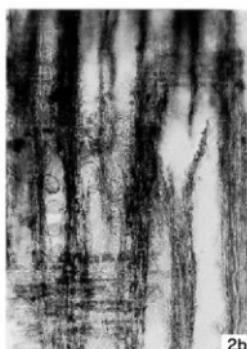
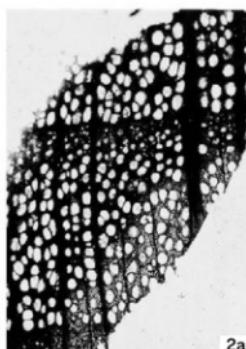
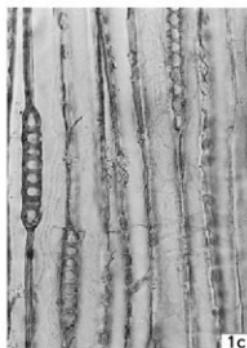
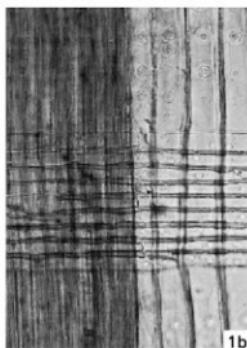
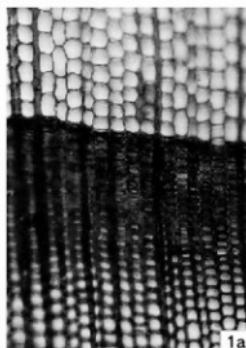


1. SX205その他の遺構出土遺物(2)



2. SX205その他の遺構出土遺物(3)





1.スギ(試料番号18)

2.ブナ属(試料番号19)

3.モクレン属(試料番号20)

a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:1a

100 μ m:1b,c

200 μ m:2,3a

200 μ m:2,3b,c

報告書抄録

ふりがな	こちょうだいちいせき							
書名	小島田I遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第385集							
編著者名	石澤宏基・大信田壽一・打矢泰之・千葉史宏							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号 TEL 018-860-3193							
発行年月日	西暦 2005年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
こちょうだいちいせき 小島田I遺跡	秋田県仙北郡 中仙町鍫見内 字水上216-1外	市町村 05425	遺跡番号 46-91 (新発見 の遺跡)	39度 31分 21秒	140度 31分 49秒	20030806 20031007	2,400m ² S	県営ほ場整備 事業（中仙南 部地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
こちょうだいちいせき 小島田I遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 平安時代前半	豊穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 井戸跡 焼土遺構 溝跡 道路状遺構 柱穴様ピット 性格不明遺構	5軒 1棟 7基 1基 6基 2条 1条 130基 3基	縄文土器 石器・剣片 土師器・須恵器 灰釉陶器 綠釉陶器 土製品(纺錘車等) 石製品(石帶等) 木製品(井戸材等)	玉川の左岸から約1km 東の河川平野(標高36~ 37m)上に營まれた平安 時代の集落である。主 体となる時代は平安時代 前半(9世紀~10世紀) である。豊穴住居跡と掘 立柱建物跡を中心とする 集落の中に多数の凹みを 持つ道路状遺構がある。 縄文時代および中世から 近世期のものは遺物のみ 出土した。		
	散布地 散布地	鎌倉時代以降 江戸時代以降	計156遺構		中世陶器・銭貨 近世陶磁器・銭貨			

秋田県文化財調査報告書第385集

小鳥田 I 遺跡

—県営は場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 平成17年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛鳩20番地

電話 (0187) 69-3331 FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話 (018) 860-5193

印 刷 株式会社 佐藤印刷

